

げに散な人後
一櫻色に衣は
深く染めて着
ん花の散りな
に後の形見
にまのらんざ
競馬に右方は
高麗の樂なり

らんと憚しければ、殿在せましかば、行末の御宿世御宿世は知ず。只今は効ある體に遇し給てましを」など宣ひ出て、皆物哀なり。中將など立ち給て後、君達は打措し給る碁打ち給ふ。昔より争ひ給ふ櫻を賭物にて、三番に數一つ勝ち給ん方に、花を寄てんと戯れ交し聞え給ふ。開うなれば端近うて打果て給ふ。御簾捲き上て、人々皆挑み念じ聞ゆ。折しも例の少將、侍従の君の御曹子に來りけるを打連て出で給ひにければ、大方人少なるに、廊の戸の啓たるに、徐ら寄て覗きけり。斯う嬉き折を見付たるは、佛などの現れ給らん、參りたらん心地するも果敢き心になん。夕暮の霞の紛は明瞭ならねど、熟々と見れば、櫻色の綾目も其と見分つ。實に散なん後の形身にも見ま欲く、句多く見え給ふを、甚ど他方に成り給ん事、佗しく思ひ増る。若き女房の打解たる姿ども夕映も興う見ゆ。右(姫末)勝せ給ぬ。「高麗の亂聲遅しや」など、逸りかに言もあり。右に心寄せ奉りて西の御前に寄て侍るを、左に成して、年頃の御争ひの斯れば有つるぞかしと、右方は心地好げに勵し聞ゆ。何事と知ねど興しと聞て、應答もせま欲けれど、打解け給る折、心なくやはと思て出て往ぬ。又斯る紛もやと影に添てぞ窺ひ歩きける。君達は花の評をしつゝ、明し暮

し給ふに、風荒らかに吹出たる夕つ方、亂れ落るが甚口惜う可惜しければ、
負方の姫君、

負方の「櫻ゆる風」に心の騒ぐかな、
姫君

思ひ隈なき花と見るく。」

御方(姉)の宰相君、

宰相「咲と見て半は散ぬる花なれば、

負るを深き恨とも見ず。」

と聞え助れば、右の姫君、

中君「風に散る事は普通枝ながら、

移ふ花を只にしも見じ。」

此御方の太輔の君、

太「心ありて池の汀に落る花、

泡となりても我が方に寄れ。」

勝方の童下て、花の下に歩き散たるを甚多く拾て持て參れり。

童女「大空の風に散ども櫻花、

竹 川

なれき
産女の名なり

左のなれき、
なれき「櫻花匂ひ數多に散さじと、

掩ふばかりの袖はありやは。」

心狭氣に見めれ」など言貶す。斯く言ふに月日果散く過すも行末不安きを、
尙侍の殿は萬に思す。院よりは御消息日々にあり。女御(弘徽)文「疎々しく思
し隔るにや。院は此許に聞え疎むるなめりと、甚憎氣に思し宣へば、戯れに
も苦うなん。同くは此頃の程に、思し立ね」など、甚眞摯に聞え給ふ。然べ
きにこそは在すらめ、甚斯う強要に宣ふも、畏しなど思したり。御調度な
どは、許多爲置せ給れば、女房の装束、何彼の些き事をぞ急ぎ給ふ。是を聞
くに藏人少將は、死ぬばかり思て、母北の方(雲井)を責め奉れば、聞き煩ひ給
て、雲「甚傍痛き事に就て微かし聞るも、世に頑しき闇の迷になん。思し知る
方もあらば推量りて、仍慰めさせ給へ」など、最惜氣に聞え給ふを、苦うも
あるかなと打嘆き給て、玉「如何なる事と思ふ給へ定むべきやうもなきを、院
(冷)より理なく宣するに、思ひ給へ亂れてなん。眞實なる御心ならば、此程を

つれなく
慕ふも
れは春の
下ゆくと
を御ゆる
なかくて
めしと
中將のお
姫君の女
取次する
この御返
んとて
玉簪の方
從のゆく
人の見な
ちし心な
仲まへ申
立の女なり

思し鎮めて慰め聞ん體をも見給てなん、世の風聞も穩ならん」など申し給ふ
も、此御參院過して、中の君をと思すなるべし。差合せては憂て得意顔なら
ん、未だ位など淺へたる程をなど思すに、男(少)は更に然思ひ移るべくもあら
ず、微に見奉りて後は、面影に戀しう、如何ならん折にとのみ覺るも、斯う
頼み懸らず成ぬるを、思ひ嘆き給ふ事限なし。効なき事も言んとて、例の侍
從の曹子に來れば、源侍從、蕪の文をぞ見居給りける。引隠すを、然なめりと
見て奪ひ取つ。事あり貌にやと思て甚うも隠さず。何處となくて只世を恨し
げに微めたり。

蕪難面て過る月日を數つ、

物恨しき暮の春かな。」

人は斯こそ長閑に、態好く妬氣なめれ。我が胡慮なる焦躁を一方は眼慣て、
悔り初られにたりと思ふも胸痛ければ、殊に物も言れで、例談ふ中將の御
許の曹子の方に往くも、例の効あらじかと嘆き勝なり。侍從の君(從侍)は、此
御返事せんとして上に參り給ふを見るに、甚腹立しう安からず。若き心地には
偏に物ぞ覺えける。淺ましきまで恨み嘆けば、此執達も餘り戯れ難く、最惜

街どの
姫君たちのな

つらきも
「うれしくは
忘るゝことも
ありなまじつ
らきぞながき
かたみなりけ
べし」の心なる

迎火つくれば
火のつきたる
に此方より又
火をつくれば
向ひの必消ば
ゆるこの腹立
ゆへに此方立
つるに負けず
腹立ちへば
彼方の怒りや
むを
冷泉院へ参ら
るゝには数な
らぬ身の詮な
しとなり
つよきに
恭によせてい
へり

手をゆるせよ
これい恭に
死は姫君一つ
我に許せとな

くやしう
正月一日に對
面の時少將深
く思ふと申し
ば強ちの申す
なり

とりかへあり
中の姫君をと

と

と思つて、答を一向せず。彼の御御の見據せし夕暮の事も言出て、少將「然ばか

りの夢をだに、又見てしがな。あはれ何を頼にて生たらん。斯う聞る事も残り少う覺れば、難面も哀といふ事こそ眞なりけれ」と、眞摯立て言ふ。哀とて言やるべき方なき事なり。彼の慰め給はん御體露ばかり嬉しと思へき氣色もなければ、實に彼夕暮の顯證なりけんに、甚ど斯う生憎なる心は添たるならんと道理に思つて、中「聞召せたらば甚ど如何に怪らぬ御心なりけりと、疎み聞え給ん。心苦しと思ひ聞つる心も失ぬ。甚不安き御心なりけりと、疎みれば、藏「率や然ばれや、今は限の身なれば、物恐しくもあらず成にたり。扱も負け給しこそ、甚最惜かりしか。秘に召寄て眼交せ奉らましかば、此上なからましものを」など言つて、

藏人「率や何ぞ數ならぬ身に叶ぬは、

中將「打笑つて、

中「理なしや強きに寄ん勝負を、

人に負じの心なりけり。」

と答るさへぞ辛かりける。

藏人「哀とて手を釋せかし生死を、

君に任する我身とならば。」

泣み笑み語ひ明す。翌の日は卯月に成にければ、同胞の君達の内裏に参り彷徨に、甚う屈し入て眺め居給れば、母北方(雲井)は涙含て在す。大臣(霧)も、院(泉)の聞召す所もあるべし。何にかは懇なく聞き入んと思つて、夕「悔しう、對面の序にも、打出で聞す成にし。自身強ちに申さましかば、然とも得違へ給ざらまし」など宣ふ。扱例の、

藏人「花を見て春は暮しつ今日よりや、

繁きなげきの下に惑ん。」

と聞え給へり。御前にて是彼、上臈だつ人々、此御懸想人の種々に最惜げなるを、聞え知する中に、中將御許、中「生死をと言し體の、言にのみにはあらず心苦しげなりし」など聞れば尚侍の君も最惜と聞え給ふ。大臣(霧)北方(雲井)の思す所に依り、切て人の御恨深くはと、取換ありて思す。此御參院を妨げやうに思らんはしも、眼覺しき事限なきにても臣下には決て有まじきものに、

この御文
花を見ての歌
なり

故殿(黒鬘)の思し掟てたりしものを、院に参り給んだに、行末の榮々しからぬを
思したる折しも、此御文取り入て哀がる。御返し、
玉「今日ぞ知る空を眺る氣色にて、
花に心を移しけりとも。」

あやしう
雲井雁の文な
り
うけたまはり
御参りのこと
をなり

情はおはすか
し
玉かづらの心
なり

噫最惜き戯れにのみも取做すかな」などいへど、煩がりて書き敢ず。九日に
ぞ参り給ふ。右の大殿(霧)御車御前驅の人々數多奉り給り。北方も恨しと思
ひ聞え給ど、年來も然もあらざりしに、此御事ゆゑ繁う聞え通ひ給るを、又
搔絶んも憂てあれば、被けものども好き女(少將)の装束數多奉れ給り。文「奇う現心
もなきやうなる人(少將)の有様を見給へ扱ふ程に、承り留る事もなかりけ
るを、驚かさせ給ぬも疎々しくなん」とぞありける。平然なるやうにて微か
し給るを、最惜と見給ふ。大臣も御文あり。夕、自身も参るべきと思ふ給つる
に、慎む事の侍りてなん。男子們も、雑役にとて参らす。疎からず召使せ給
へ」とて、源少將、兵衛佐(夕霧)など奉れ給り。情は在すかしと悦び聞え給
ふ。大納言殿(紅)よりも、女房の御車奉れ給ふ。北の方は故大臣(黒鬘)の御娘、
横柱の姫君なれば、何方に就ても、陸う聞え通ひ給へけれど、然しもあらず。

今限と
藏人少將の文
なり

いかなる人
に
我にかけるも
のとも辨へる
誰が名は誰
が名はた誰
世の中常な
きものといひ
そなたの御名
れと立つべけ

藤中納言(玉鬘)はしも、自身に在して、中將、辨の君達(夕鬘)諸共に事行ひ給ふ。
殿の在せましかばと、萬に就て多感なり。藏人(少將)の君、例の人に、甚き言を
盡して、文「今は限と思ひ侍る命の有繋に悲きを、哀と思ふとばかりだに一言
宣はせば、其に繋留められて、暫時も生存やせん」などあるを、持て参りて
見れば、姫君二所打語ひて、最甚う屈し給り。夜晝諸共に慣ひ給て、中の戸
ばかり隔てたる西東をだに、甚愠きものにし給て、互に渡り通ひ在するを、
別々に成ん事を思すなりけり。特殊に仕立て引粧ひ奉り給る御容甚美し。殿
(黒鬘)の思し宣し事などを思し出で、物哀なる折からにて取て見給ふ。大臣北方
の、然ばかり立ち並て、頼しげなる御中に、何ど斯う漫言を思ひ言らんと怪
きにも、限とあるを實にやと思して、即て此御文の端に、
姫君「あはれてふ常ならぬ世の一言も、

如何なる人に懸るものぞは。」
忌々しき方にてなん微に思ひ知たる」と書き給て、斯う言ひ遣れかし」と宣
ふを、即て奉りたるを限なら珍きにも、折を思し留るさへ甚と涙も留らず、
立かへり誰が名は立じなど、啣言がましくて、

られしことな
りかたふき
冷泉院のな
れ方似合し
かずとなり
かう思し立
母上の心あ
てせられし
と中將の言
さむやうも
かりしとな
かんの君を
快に思ひて
すとなり申

後見や何や
後見殿女御
思すと今み
女御に寵あ
らば思はる
けられはる
にはならず
なり

思して、中將(姫君)召てなん宣はせける。中將「御氣色好しからず。然ばこそ世人の心の中も、傾首ぬべき事なりと、豫て申し事を思し取る方殊にて、斯う思し立にしかば、兎も角も聞え難くて侍るに、斯る仰事の侍るは、某等が身の爲も味氣なくなん侍る」と、甚不快と思て、尙侍の君を申給ふ。玉否や只今斯う俄にしも思ひ立ざりしを、強ちに最惜う宣せしかば、後見なき奉仕の、内裏邊は頼なげなめるを、今は心安き御有様なめるに任せ聞てと思ひ寄りなり。誰も一便なからん事は有の儘にも諫め給で、今引返し右大臣(霧)も、僻々しきやうに趣けて宣ふなれば苦うなん。是も然へきにこそは」と、平易に宣ひて、心も騒い給す。中將「昔の御宿世は眼に見えぬものなれば斯う思し宣するを、是は宿縁殊なるとも如何は奏し直すべき事ならん。中宮(明石)を憚り聞え給とて、院の女御(弘徽)をば、如何し奉り給んとする。後見や何やと豫て思し交すとも、然しも得侍らじ。縦し見聞き侍らん。熟う思は、内は中宮(明石)在すとして、他人は交ひ給すや。君に仕う奉る事は其が心安きこそ、昔より興ある事には爲けれ。女御は些なる事の遠目ありて快からず思ひ聞え給んに僻みたるやうになん、世の聞耳も侍らん」など、二所(中將と)して申し給へば、

歌頭六人とな

見給ふらん
御息所のなり
過にし夜
去年正月廿日
の夜のことな

尙侍の君甚苦しと思しぬ。然は限なき御寵のみ月日に添て増る。七月より胎み給にけり。打惱み給へる體、實に人の種々に聞え煩すも、道理ぞかし。如何でかは斯らん人を斜に見聞き過しては止んとぞ覺ゆる。明暮御遊宴をせさせ給つ、侍從(薰)も氣近う召入れば、御琴の音などは聞き給ふ。彼の梅枝に合せたりし中將の御許の、和琴も常に召出て彈せ給ば、聞合するにも虚心には覺ざりけり。其年返りて、男踏歌せられけり。殿上の若人們の中に、物の上手多かる頃ひなり。其中にも勝れたるを撰せ給て此四位侍從(薰)右の歌頭なり。彼藏人少將樂人の數の中に在けり。十四日の月の華やかに曇なきに、御前より出て、冷泉院に參る。女御(弘徽)も此御息所(君)も、上に御局して見給ふ。上達部親王達引連て參り給ふ。右の大殿(夕)致仕大臣の族を離れて、輝しう美麗なる人はなき世なりと見ゆ。今上の御前よりも、此院をば甚憚しう殊に思ひ聞えて、皆人用意を加る中にも、藏人少將は、見給らんかと思ひ遣て静心なし。匂もなく見苦しき綿花も、簪す人柄に見分れて、容も聲も甚美くぞありける。竹川歌て、御階の許に踏み寄る程、過にし夜の些かりし遊びも思出られければ、僻事もしつべくて涙含みけり。後の宮(秋)の御方に參

少將の心の鬼
にみかき思へり
水驛は酒肴ば
かりなり

相の影をいふ
月の影をいふ
やみはまやな
き「春の夜のや
みはあやなし
梅の花の色は
見えね香やは
かくる」
月にはゆるな
り

れば、上(冷)も其方に渡せ給て御覽す。月は夜深なる隨に、晝よりも顯證う
澄み上りて、如何に見給らんとのみ覺れば、踏む空もなう漂ひ歩きて盃も献
て、一人をのみ咎らるゝは面目なくなん。夜一夜所々に馳き歩き、甚惱し
う苦くて臥たるに、源侍從を院より召たれば、薫「噫苦し。暫し休むべきに」と
唧りながら參り給り。御前の事どもなど問せ給ふ。冷「歌頭は打過したる人の、
先々する事を撰れたる程、奥床かりけり」とて愛しと思したためり。萬春樂を
御口吟にし給つゝ、御息所の御方に渡せ給れば、御供に參り給ふ。物見に參
りたる里人多くて、例よりも花やかに様子賑かし。渡殿の戸口に暫し居て、
聲聞き知たる人に物など宣ふ。薫「一夜の月影は顯證りし事かな。藏人少將の
月の光に輝きたりし氣色も、桂の蔭に耻るにはあらずやありけん、雲の上近
くては、然しも見ざりき」など語り給は、人々哀と聞くもあり。「闇は黒白な
きを、月映今少し特殊なりと聞し」など嘸して、内より、
女房「竹川の其夜の事は思ひ出や、
偲ぶばかりの節はなけれど。」
と些き事なれど、涙含るゝも實に甚淺くは覺ぬ事なりけりと、自身思ひ知る。

たのめ空しき
薫の鬢黒の御
女を思ひかけ
たりしを院へ
參られしかば
なり
あなかしこ
とはずがたり
もしつべしと
なり

このとの殿は
べもとみけり
さき草の三つ
業四つ葉に殿
作りして

薫「流れての頼め空しき竹川に、

世は憂きものと思ひ知にき。」

物哀なる氣色を、人々美しがる。然は下立て人の如にも佗び給ざりしかど、
人體の有繋に心苦しう見るなり。薫「打出で過す事もこそ侍れ。噫畏」とて立
つ程に、此方にと召出れば、耻さ心地すれど參り給ふ。故六條院の踏歌の
翌朝に、女方にて遊びせられける、甚面白かりきと、右大臣(夕)の語れし。何
事も彼邊の差次なるべき人、難く成にける世なりや。甚物の上手なる女さへ
多く集りて、如何に些き事も興しかりけんなど思し遣て、御琴ども調へさせ
給て、箏は御息所。琵琶は侍從(薫)に給ふ。和琴を彈せ給て、此殿など奏び給
ふ。御息所の御琴の音、未だ未成なる所ありしを、甚好う教へ做奉り給てけ
り。趣致しう爪音好くて、歌、曲の物など、上手に甚好く彈き給ふ。何事も
心許なく後れたる事は在し給ぬ人なめり。容貌甚美しかるべし、仍心留る。
斯様なる折多かれば、自然氣遠からず、見馴れ給ふ。憂て馴々しうなどは恨
み懸ねど、折々に就て、思ふ心の違る嘆かしさを微るも、如何思しけん知ず
かし。卯月に女宮生れ給ぬ。殊に顯著なる物の榮もなきやうなれど、院の御

かくいひく
 「世の中をか
 果々はいかに
 やいかになら
 んとすらん一
 おほやけさま
 中君をなり
 いかたう
 侍は重職な
 れまなり
 思しおきし
 辭したくなり
 そのこと
 譲ることなり

氣色に隨て、右の大殿より初めて、御産養し給ふ所々多かり。尙侍の君(玉)直と抱き持て愛み給ふに、疾う參り給へき由のみあれば、五十日の程に參り給ぬ。女宮一所(殿の出)のみ在すに、甚珍う美しうて在すれば、最甚う思したり。甚と只此方にのみ在す。女御(弘徽)方の人々、甚斯らで有ぬべき世かなと、只ならず言ひ思へり。正身の御心どもは、殊に輕々しく背き給にはあらねど、侍ふ女房の中に曲々しき事も出来などしつゝ、彼中將の君の然言ど、人の兄にて宣ひし事叶ひて、尙侍の君も無下に斯く言ひくゝての果如何ならん、胡慮に恥うもや遇されん。院の御寵遇は淺からねど、年經て侍ひ給ふ御方々(秋好中宮)快からず思ひ放ち給はば、苦しくも有べきかなと思すに、今上には眞に不快と思しつゝ、度々御氣色ありと人の告げ聞れば、煩しくて、公方に交せ奉らん事を思して、尙侍を譲り聞え給ふ。朝廷甚難うし給ふ事なりければ、年來斯う思し置しかど得辭し給ざりしを、故大臣(藤)の御忠誠を思して久う成にける昔の例など引出て、其事叶ひぬ。此君(中將)の御宿世にて、年來申し給ひしは難きなりけりと見たり。斯て心安くて、内裏住もし給へかしと思すにも最惜う、少將の事を母北方(雲井)の特と宣ひしものを頼め聞しやう

心うつくしき
 やうに
 打明てなり
 一人は院一人
 は内裏へなれ
 ばなり

ゆるさぬこと
 中姫君を入内
 のこと玉かづ
 ならの代りなる

に微かし聞しも如何に思ひ給らんと思し扱ふ。辨の君(玉)として心美しきやうに、大臣(霧)に聞え給ふ。玉「内裏より斯る仰事のあれば、種々に強ちなる奉仕の好みと、世の風評も如何と思ふ給てなん煩ひぬる」と聞え給は、主上の御氣色は思し答るも道理になん承る。公事に就ても、宮仕し給ぬは然まじき事になん。早思し立べきになん」と聞え給り。又此度は、中宮(明石)の御氣色取てぞ參り給ふ。大臣在世ましかば、押消ち給ざらましなど、哀なる事どもをなん。姉君は容貌など名高う美しげなりと、聞召し置たりけるを、引違へ給るを生心適ぬやうなれど、是も甚薦々しく、奥床く待遇て侍ひ給ふ。前の尙侍の君、容姿を變てんと思し立つを、方々に扱ひ聞え給ふ程に勤行も心慌しうこそ思されめ。今少し何方も心悠閑に見奉り做し給て、不安き所なく一途に勤め給へと、君達の申し給はば、思し滞りて、内裏には時々忍て參り給ふ時もあり。院には煩しき御情意の仍絶ねば、然へき折も更に參り給はず、古を思ひ出しが、有繫に畏う覺し陳謝に、人の皆許さぬ事に思りしをも知ず貌に思て參せ奉りて、自身さへ戯れにても若々しき事の世に聞えたらんこそ、甚眩く見苦しかるべけれと思せど、然る忌に因りと將た、御息所に

も現し聞え給ねば、我を昔より故大臣は取分て思し冊き、尙侍の君は若君
 (中姫)を櫻の争ひ、些き折にも、最負せ給し名残に思し貶しけるよと、恨しう
 思ひ聞え給り。院の上、將た、況て甚う難面しとぞ思し宣せける。院「古めか
 しき邊に差放ちて、思ひ貶さるゝも道理なり」と打語ひ給て可憐にのみ思し
 増る。年來ありて、又男皇子生み給つ。許多侍ひ給ふ御方々に、斯る事なく
 て年來に成にけるを、疎ならざりける御宿世など、世人驚く。帝(院)況て限な
 う珍しと、此今宮をば思ひ聞え給り。讓位給ぬ世ならましかば、如何に効あ
 らまし。今は何事も榮なき世を、甚口惜となん思しける。女一宮を限なきも
 のに思ひ聞え給しを、斯く種々美うて數添ひ給れば、珍なる方にて甚殊に
 思いたるをなん。女御(弘徽)も余り斯まで物しからんと、御心動きける。事
 に觸て安からず曲々しき事出来などして、自然御中も隔るべかめり。世の事
 として數ならぬ人の間にも、元より道理得たる方にこそ、効なき他の人も、
 心を寄る事なめれば院の中上下の人々、甚貴くて久く成り給る御方にの
 み道理て、些き事にも、此御方さまを好らず取做しなどするを、御兄の君達
 (中將)も、「然ばよ、悪うやは聞え置ける」と甚と申し給ふ。心安からず聞き
 辨(君)も、

もとよりこと
 わり
 本臺の方にな

聞えし人々
 少將を初
 藏人として
 とし御息所
 人にかける
 人なり

左大臣
 誰ともなし
 道の果なる
 一東路の道の
 果なる常陸帯
 のかごとばか
 りも逢んとぞ
 思ふ

苦しき隨に、斯らで悠閑に見安くて、世を過す人も多かめりかし。限なき幸
 福なくて、宮仕の筋は思ひ寄るまじき事なりけりと、大上(玉)は嘆き給ふ。聞
 し人々の見安く發達つゝ然ても在せましに、偏ならぬぞ數多なるや。其中に
 源侍從(薰)とて、甚若う纖弱なりと見しは、宰相中將にて、匂や薰やと聞き
 憎く愛で騒るなる。實に甚人柄重厚に奥床きを此上き親干達大臣の御娘を、
 志ありて宣ふなるなども、聞き入らずなどあるに就て、古は若う不安きやう
 なりしかど、見安く成熟増りぬべかめりなど言ひ在さうず。少將なりし(藏人)
 も、三位中將とか言て輿望あり、容貌さへ有ま欲かりきやなど、生心悪き
 仕り人は打忍つゝ、煩げなる御有様よりはなどいふもありて、最惜うぞ
 見し。此中將は仍思ひ初てし心絶ず、憂くも辛くも思つゝ、左大臣の御娘を
 得たれど、一向心も留めず、道の果なる常陸帯のと、手習にも言種にもする
 は、如何に思ふ様のあるにか有けん。御息所安氣なき世の煩しさに、里勝に
 成り給けり。尙侍の君思し如にはあらぬ御有様を、口惜と思す。内裏の君
 (中姫)は却々賑かしう心安げに舉止て、世にも趣あり、奥床き寵遇にて侍ひ給
 ふ。左大臣薨せ給て、右(藤)は左に、藤大納言(紅)左大將兼け給る右大臣に成

り給ふ。次々の人々登進て、此薫中將は、中納言に、三位君(夕霧の息)は宰相に成て、慶し給る。人々此御族より外に、人なき頃ひになんありける。中納言(薫)の御慶に、前の尙侍の君に参り給り。御前の庭にて拜し奉り給ふ。尙侍の君對面し給て、玉斯く甚草深く成行く葎の門を過ぎ給ぬ御懇情にも、先づ昔の御事思ひ出られてなんなど聞え給ふ、御聲の貴に愛嬌づき、聞ま欲う雅きたり。古り難くも在するかな。斯れば院の上は恨み給ふ御心絶ぬぞかし。今終に事引出で給てんと思ふ。薫悦などは、心には甚しも思ふ給ぬども、先づ御覽せられにこそ参り侍れ。過ぬなど宣するは疎なる罪に打返させ給にやと申し給ふ。玉今日は盛過にたる身の憂など、聞へき序にもあらずと憚み侍れど、特と立寄り給ん事は難きを、對面なくて將た、有繫に冗々しき事になん。院に侍る、(所)息が、最甚う世中を思ひ亂れ、中空なる如に漂ふを、女御(弘徽)を頼み聞え、又后の宮(秋)の御方にも、然とも思し許されなんと思ふ給へ過すに、何方にも無禮に許さぬものに思されたれば其傍痛くて、宮達は然て侍ひ給ふ。此の甚交ひ難げなる自身は斯て心安くだに眺め過い給へとて罷出させたるを、其に就ても聞き憎くなん、院にも好しからず思し宣す

うちかへさせ俗にあてつけ申さるゝかとなり
對面なくて人傳にてはな

なる。序あらば微かし奏し給へ。右方左方に頼もしく思ひ給て、出し立て侍し程は、何方をも心安く打解け頼み聞しかど、今は斯る事齟齬に、幼う負氣なかりける自身の心を誹かしくなん」と打嘆い給ふ氣色なり。薫更に斯まで思すまじき事になん。斯る御奉仕の安からぬ事は昔より然る事と成り侍りにけるを、位を去て閑に在し、何事も顯著ならぬ有様と成にたるに、誰も打解け給るやうなれど各自内心には、如何挑しくも思す事もなからん。人は何の過失と見ぬ事も、我御身に取ては恨しくなん、効なき事に心を動し給ふ事、女御后の常の御癖なるべし。然ばかりの紛もあらじものとしてやは思し立けん。只平和に舉動て御覽し過すべき事に侍るなり。男子の方にて奏すべき事にも侍ぬ事になん」と剛直う申し給ば、玉對面の序に憂へ聞えんと待付け奉りたる効もなく、淡の御道理やと打笑て在する、人の親にて涉々しがり給る程よりは、甚若やかに鷹揚たる心地す。御息所も斯様にぞ在すべかめる。宇治の姫君の心留りて覺るも、斯様なる氣色の興きぞかしと、思ひ居給り。尙侍(中姫)も、此頃罷出給り。此方彼方住み給る様子興しく、大方悠閑に紛る事なき御有様どもの、簾の中心恥しう覺れば用意せられて、甚ど沈着め見易きを、

近うも
蕪を筆にして
も見まし
しかば

昔のこと
蕪黒の大變の
ことなり

源氏物語活釋後編

大上(玉)は、近うも見まししかばと、打思しけり。大臣殿(紅梅)は、只此殿の東
なりけり。大饗の垣下の公達など數多集ひ給ふ。兵部卿宮(匂)左の大殿(夕
の、賭弓の返り立ち、相撲の饗などには在し、を思て、今日の光と請じ奉
り給けれど、在さず。奥床く厚遇さ給ふ姫君達を、然は志殊に如何でかと
思ひ聞え給ふべかめれど、宮(匂)ぞ如何なるにかあらん、御心も留め給ざりけ
る。源中納言(蕪)の甚と有ま欲う成熟整ひ、何事をも後れたる方なく在し給ふ
を、大臣(梅)も北方(柱)も眼留め給けり。隣(斯)く騒りて、往交ふ車の音、前
驅(聲)々も昔の事思出られて、此殿には物哀れに眺め給ふ。玉「故宮(蕪)薨せ
給て、程もなく此大臣(梅)の通ひ給し事、甚輕率いやうに、世人は誹くなりし
かど、思も消ず斯て在し給ふも、有繋然る方に見安かりけり。不定の世や、
孰にか寄るべき」など宣ふ。左の大殿の宰相中將(藏人)大饗の翌日、夕付て
爰(玉)に参り給り。御息所里に在すると思ふに甚と心化粧添て、幸「公儀の數
まへ給ふ慶事などは何とも覺え侍らず、私の思ふ事叶ぬ嘆のみ、年月に添て
思ふ給へ晴けん方なき事」と、涙押拭ふも殊更めいたり。廿七八の程(宰相)の
甚盛に匂ひ、華麗なる容貌し給り。玉「見苦しの君達の、世中を心の隨に傲り

「いますがらふ
や」
の意なり
つぎくしく
中將のおも
しふのかた
ら

て、官位をば何とも思はず、過し在すがらふや。故殿(蕪)在せまししかば、爰なる
子息も、斯る戯事にぞ心は擾らまし」と、打嘆き給ふ。右兵衛督、右大辨に
て、皆非参議なるを憂しと思り。侍従と聞めりしぞ、此頃頭中將と聞る、年
齡の程は醜ならねど、人に後ると嘆き給り。宰相は兎角似々しく。

橋姫

母方大臣の女にて、筋殊なるべし。春宮にも立ち給ふべかりし。時移りて、弘徽殿の太后は此八宮を取立てんとせり。しかば中々といへり。その沙汰なくば、いと難し。親連の八宮春宮に立給はるべし。もし父などな思したるとは、

其頃世に數まへられ給ぬ古宮在しけり。母方なども貴く在し給て、筋殊なるべき興望など、在しけるを、時移りて世中に侮蔑られ給ける紛に、却々甚名残なく、御後見なども輕薄しき心々にて、方々に就て世を背き去つ、公私に寄所なく、差放れ給るやうなり。北方も昔の大臣の御娘なりける。哀に心細く親達の思し掟てたりし事など思出で給ふに、比へなき事多かれど、深き御契の二なさばかりを愛世の慰安にて、互に又なく頼み交し給へり。年來經るに、御子も在し給て待遠かりければ、淋々しく徒然なる慰安に、如何で美しからん兒もがなと、宮を時々思し宣けるに、珍く女君の甚美しげなる生れ給へり。是を限なく憐と思ひ冊き聞え給ふに、又差續き氣色ばみ給て、此度は男にてもなど思したるに、同じ様にて平にはし給ながら、最甚く煩て亡せ給ぬ。宮淺ましく思し惑ふ。有經るに就て、甚不合く堪へ難き事多かる世なれど、見捨て難く哀なる人の御有様性質に繋留らる、絆にてこそ過し來つれ。一人留りて甚ど荒涼くもあるべきかな。幼き人々をも、一人育み立ん

いでや折ふし、これ故に北方打捨てふとて、見ぬなり

やんごとなき、筋は、姉君の方なり

若君、女子をもいふ、年の若き意、ほどにつけた、俗に身分相應のなり

程、限ある身にて甚愚がましう外觀悪かるべき事と思し立て、本意も遂ま欲うし給けれど、見讓る人もなくて殘し留んを、甚く思し躊躇つ、年月も經れば、各自成長増り給ふ。容姿の美う有ま欲きを、明暮の御慰安にて無爲を過し給ふ。後に生れ給し君をば、侍ふ女房も、率や折節心憂くなど打咳きて、心に入ても扱ひ聞ざりけれど、臨終の態にて何事も思し分ざりし際ながら、是を甚心苦しと思て、北、只此君をば形身に見給ひて、憐と思せしとばかり、只一言なん宮に聞え置き給ければ、前世の宿命も辛き折節なれど、然べきにこそはありけめと、臨終と見しまで、甚哀と思て、不安げに宣しをと思し出つ、此君をしも甚可愛うし奉り給ふ。容貌なん眞に甚美、う由々しきまで在し給ける。姫君(姉)は性格靜に趣ある方にて、見る眼舉動も氣高く奥床さ體ぞし給へる。大切く此上なき筋は勝りて、孰をも種々に思ひ冊き聞え給と、叶ぬ事多く年月に添て宮の中物淋くのみ成り増る。侍し人も便宜なき心地するに、得忍び敢ず、次々に隨て罷出散つ、若君の御乳母も、然る騒に、抄抄しき人をしも選り敢給ざりければ、分際付たる心淺さにて、幼き程を見捨て奉りにければ、只宮(八)を養育み給ふ。有繋に廣く面白き宮の池、山な

橋姫

巢守 卵の皆孕りて
巢立ちたる後
中に残れるも

源氏の大臣の
八宮の系圖を
いへり
よこさまに
冷泉院を除き
て八宮を坊に
しこと前にあ
れり
わが御時
引徹殿の威勢
強かりし時な

あなたさまの
源氏の方なり
かの御次々に
源氏の類親の
みになる世な

川瀬に多くあ
竹木などをあ
みつらね網に
代へて魚を捕
ふるもの宇治
川にて冬日米
魚をとるに用
重なる
一月よみの光
に山かき足引
て遠からなかり
の事なり諸冊
二神の御子と
いふの朝霧
一雁の來る峯
の朝霧晴れず

中泣々も羽打着する君なくば、

我ぞ巢守に成べかりける。」

御衣どもなど萎ばみて、御前に又人もなく、甚淋く徒然なるに、種々甚可愛
氣にて在し給ふを、可憐に心苦う如何思さざらん。經を片手に持給ひて、半
讀つゝ唱歌をし給ふ。姫君に琵琶若君に箏の御琴を、未だ幼けれど、常に合
せつゝ習ひ給はば、聞き難くもあらで甚興しく聞ゆ。父帝(桐壺)にも母女御にも
疾く後れ給て、抄々しき御後見の取立たる在せざりければ、學問など深くも得
習ひ給はず。況て世中に住着く御規摸は、如何でかは知り給はん。貴き人と聞
る中にも、淺ましう上品に恍なる、女の如に在すれば、古き世の御寶物祖父
大臣の御處分、何や彼やと盡すまじかりけれど、行方もなく果敢く失せ果て、
御調度などばかりなん、殊と麗しくて多かりけり。参り侍ひ聞え心寄せ奉る
人もなし。徒然なる隨に、雅樂寮の樂の師どもなどやうの、勝れたるを召寄
つゝ、些き御管絃に心を入れ生出で給れば、其方は甚巧く勝れ給り。源氏の
大臣の御弟八宮とぞ聞しを、冷泉院の春宮に在し、時、朱雀院の太后の、邪
に思し構て、此宮を世中に立ち繼ぎ給べく、我が御時厚遇き奉り給ける驥

に、何なく彼方方の御間には差放れ給にければ、愈彼の御順次に成り果ぬる
世にて、得交ひ給ず。又此年來、斯る仙に成り果て、今は限と萬を思し捨た
り。斯る程に、住み給ふ宮焼にけり。甚どしき世に、淺ましう敢なくて、移
ひ住み給べき所の好適地もなかりければ、宇治といふ處に由緒ある山里持給
りけるに渡り給ふ。思ひ捨て給る世なれども、今はと住み離れなんを哀に思
さる。網代の氣色近く耳喧き川の邊にて、靜なる望に叶ぬ方もあれど、如何
はせん。花紅葉水の流にも悶を遣る便宜に寄て、甚どしく眺め給より外の事
なし。斯く絶え籠りぬる野山の末にも、昔の人(北)に在し給ましかばと思出で
聞え給ぬ折なかりけり。

宮見し人も宿も煙に成にしを、

何て我身の消え残りけん。」

生る効なくぞ思し憧るゝや、甚ど山重れる御住家に尋ね参る人もなし。賤き
下素など、田舎びたる山賤どものみ、稀に馴れ参り仕奉る。峯の朝霧晴る折な
くて明し暮し給ふに、此宇治山に、聖たちたる阿闍梨住けり。學識甚偉くて、
世の評も輕からねど、一向公事にも出仕へず籠り居たるに、此宮の斯く近

橋 姫

のみ思ひ盡せぬ世中の憂心ばかりは「極樂國土有七寶池一八功德水充滿其中一池底純以金沙一布地（中略）池蓮華大如車輪（阿彌陀經）内教（内典）佛の經典を内典とし世の教典を外典といふ佛家の自稱なり

俗聖「身在レ家心出レ家」俗形にて戒行を持する人なり

さ程に住み給て淋き御様子に、貴き勤行をせさせ給つゝ法文などを讀み者ひ給ば、貴び聞て常に參る。年來學び知り給る事どもの、深き意義を説聞せ奉り、愈此世の假初に味氣なき事を申し知すれば、宮心ばかりは蓮の上に思ひ上り、濁なき池にも住ぬべきを、甚斯く幼き人々を見捨ん不安さばかりになん、得直途に形容をも變ぬなど隔意なく物語し給ふ。阿闍梨は冷泉院にも親く侍ひて、御經など教へ聞る人なりけり。京に出たる序に參りて、例の然べき經文など御覽じて、問せ給ふ事もある序に、阿闍梨の甚偉く内教の御才、悟深く在し給けるかな。然べきにて生れ給る人にや在し給らん。心深く思ひ澄し給るほど、眞の聖僧の掟になん見え給ふ」と聞ゆ。院未だ形容は更へ給すや。俗聖とか此の若き女房の命名たんなる、哀なる事なり」など宣す。宰相中將（薰）も御前に侍ひ給て、我こそ世中を甚荒涼く思ひ知ながら、勤行など人に眼留るるゝばかりは勤ず、口惜くて過しけれなど人知ず思つゝ、俗ながら、聖僧に成り給ふ心の掟や如何にと、耳留て聞き給ふ。阿出家の志は、元より在し給るを、些き事に思ひ滞り、今と成ては、心苦き女子どもの御上を得思ひ捨ぬとなん嘆き侍り給ふ」と奏す。有繋に物の音愛る阿闍

なかく院の帝は姫君をゆかしく思はるゝに薫はなかく父親をゆかしく思はるゝなり

梨にて、阿實に將た、此姫君達の琴合奏て遊び給る、河波に競て聞え侍るは甚面白く、極樂思ひ遣れ侍るや」と古代に賞れば、帝微笑み給て、冷然る聖僧の邊に生出て、此世の方さまは迥々しからんと推量るゝを、興しの事や。不安く思ひ捨難く憂慮ひ給らんを、若し暫時も後ん程は、譲やはし給ぬ」など宣す。此院の帝（冷）は、十の親王にぞ在しける。朱雀院の、故六條院に預け聞え給し入道宮（女）の御例を思し出て、彼君達をがな。徒然なる遊び敵になど打思しけり。中將の君（薰）は、却々親王の思ひ澄し給らん御意思を、對面して見奉らばやと思ふ心を深く成ぬる。然て阿闍梨の歸り入るにも、薫必ず參りて物習ひ聞へく、先づ内々にも氣色給り給へ」など語ひ給ふ。帝は御言傳にて、冷哀なる御住居を、人傳に聞く事」など聞え給て、冷世を厭ふ心は山に通へども、八重立つ雲を君や隔る。」

阿闍梨此御使命を先に立て彼宮に參りぬ。普通なる際の際然べき人の使だに稀なる山蔭に、甚珍く待ち悦び給て、所に付たる肴などして然る方に歡待し給ふ。御返し、

橋 姫

一とたえ
思ひ捨て
にあらねど
世の憂きに
むり澄むに
むり澄むに
むり澄むに

源氏物語活釋後編

宮跡絶て心澄むとはなけれど、

世を宇治山に宿をこそ借れ。

僧の方をば卑下して聞え做し給れば、仍世に恨残りけると最惜く御覽ず。阿
閑梨中將の君(薫)の道心深げに在し、新ふなど語り聞て、法文などの意義得ま欲
き志なん、幼稚かりし齡より深く思ながら、得去ず世に在經る程、公私
に暇なく明暮し、殊と閉ぢ籠りて習ひ誦み、大方抄々しくもあらぬ身にしも、
世中を背き貌ならんも憚るべきにあらねど、自然打撓み、紛しくてなん過し
來るを、甚有難き御有様を承り傳しより、斯く心に懸てなん頼み聞さする
など懇に申し給しなど語り聞ゆ。宮、八宮「世中を假初の事と思ひ取り、厭しき
心の付き初る事も、我身に憂ある時、凡ての世も恨しう思ひ知る初ありてな
ん、道心も起る事なめるを、年若く世中思ふに叶ひ、何事も飽ぬ事はあらじ
と覺る身の程に、然將た、後世をさへ辿り知り給らんが有難き。爰には然へ
きにや、只厭ひ離れよと故らに、佛などの勸め赴け給ふ如なる有様にて、自
然こそ靜なる思に叶ひ行ど、餘命少き心地するに、抄々しくもあらで過ぬべ
かめるを、來し方行末、更に得辿る所なく思ひ知るゝを、却りては心恥げ

佛の御方には
姫君の方と持
佛と障子を隔
てたるさまな
所のさまなり
らばそくなが
俗形ながら法
文するを優姿
塞といふ行あ
山、の椎が本
し、の椎が本
八宮のよき言
と薫の心な給

なる法の友にこそは在し給なれ」など宣ひて、互に御消息通ひ、自身も參で
給ふ。實に聞しよりも、哀に住居給る體より初て、甚假なる草の庵に、思做
し事省ぎ給たり。同き山里と言ど、然る方にて心留りぬべく閑寂なるもある
を、甚荒涼き水の音、波の響に物忘打し、夜など心解て夢をだに見るべき間
もなげに、凄く吹き拂たり。聖僧だちたる御爲には、斯るしもこそ心留らぬ
促進ならめ。女君達何心地して過し給らん。普通の女しく婉びたる方は遠く
やと、推量るゝ御有様なり。佛の御方には障子ばかりを隔てぞ在すべかめる。
好色心あらん人は氣色ばみ寄て、人の御性質をも見ま欲う、有繋に如何と床
しうもある御様子なり。然ど然る方を思ひ離る願望に、山深く尋ね聞たる本
意なく、好色しき等閑言を打出で、戯ればまんも事に違てやなど思ひ返して、
宮の御有様の甚哀なるを、懇に見舞ひ聞え給ひ、度々參り給つゝ、思しやう
に、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など殊と偉しげにはあらで、甚好
く宣ひ知す。聖僧だつ人、才ある法師などは世に多かれど、餘り強々しう氣
遠げなる、宿徳の僧都僧正の際は、世に暇なく木強にて、經の意義を問ひ現
さんも事々しく覺え給ふ。又其人ならぬ佛の御弟子の戒む事を保つばかりの

橋 姫

す。薫「何かは然、日限ある御勤行の程を紛し聞させんに驗なし。斯く濡々参りて徒爾に歸ん憂を、姫君の御方に聞て、哀と宣せばなん慰むべき」と宣へば醜き顔打笑みて、宿「申させ侍らん」とて立つを、薫「暫しや」と召寄て、薫「年來人傳にのみ聞て床しく思ふ御琴の音どもを、嬉し折かな。暫し少し立ち隠れて、聞べき物の限ありや。接なく差過て参り寄ん程皆琴罷め給ては、甚本意なからん」と宣ふ。御様子顔容の、然る素朴しき心地にも甚愛たく畏く覺れば、宿「人聞ぬ時は、明暮斯くなん遊せど、下人にて、都の方より参り立ち交る人侍る時は、音も爲させ給す。大方斯くて女君達、在す事をば隠させ給ひ、一般の人に知せ奉じと思し宣する」と申せば、打笑て、薫「味氣なき御物隠なり。然忍び給なれど、皆人有難き世の例に聞出で侍るを」と宣ひて、薫「仍案内せよ。我は好色しき心など無き人ぞ。斯て在すらん御有様の、奇く實に普通に覺え給ぬなり」と仔細に宣へば、薫「噫かして。思慮なきやうに後の風聞や侍らん」とて、彼方の御前は、竹の透垣し籠て皆隔障殊なるを、教へ寄せ奉れり。御供の人は、西の廊に呼び据て、此宿直人待遇ふ。彼方に通へかめる透垣の戸を少し押啓て見給ば、月興しき程に霧渡れるを眺て、簾を

扇ならで
びはの撥の形
なるべし
入る日を返す
還城樂陵王を
危ぶめんとす
日のくるに午
に撥して目を
いふことあり
及ばずともな
りにはなる
ものかは
琵琶の撥をを
隠す穴をば
李嬌琵琶詩
曰「半月分三絃
上二
昔物語に姫
住吉物語に姫
君の琴ひくを
中將の聞きつ
又らつことあり
に月おもしろ語
御簾まき上げ

少し短く捲き上て、女房居たり。簀子に甚寒げに身細く萎ばめる童一人、同じ體なる大人など居たり。内なる人一人は、柱に少し居隠れて、琵琶を前に置いて撥を弄りにしつゝ居たるに、雲隠れたりつる月の、俄に甚明く射出たれば、大君「扇ならで、是しても月は招きつべかりけり」とて、差覗たる顔、甚く可愛氣に艶麗なるべし。倚臥たる人は、琴の上に傾き倚りて、中「入る日を返す撥こそありけれ。特殊にも思ひ及び給ふ御心かな」とて、打笑たる氣色、今少し重厚に才づきたり。大「及ずとも、是も月に離るものかは」など、些き事を打解け宣ひ交したる御氣色ども、更に他に想像しには似ず、甚憐に懐しう美し。昔物語などに語り傳て、若き女房などの讀むをも聞くに、必ず斯様の事を言たる、然もあらざりけんと憎く推量らるゝを、實に哀なる物の隈あるべき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、明瞭に見へくもあらず。又月差出なんと思す程に、奥の方より、女「人在す」と告げ聞る女房やあらん。簾下して皆入ぬ。驚き貌にはあらず、婉曲に舉止て徐ら隠ぬる氣色ども、衣の音もせず甚柔婉に心苦うて、甚う貴に雅趣なるを憐と思ひ給ふ。徐ら立出て、京に、御車率て参るべく人走せ給つ。往つる侍に、薫「折悪く参り侍りに

橋 姫

て琴どもひき
合せあそぶる
ることあり

ありつる
最前のなり

さまことこ
御簾の外に
へしらは給ふ
はさまかはり
したる御もて
しとなり

けれど、却々嬉しく、思ふ事些し慰てなん。斯く侍ふ由聞よ。甚う濡にたる御
言も聞させんかし」と宣へば、参りて聞ゆ。斯く見やしぬらんとは思しも寄
で、打解たりつる事どもを聞やし給らんと最甚く恥し。奇く香しく香ふ風の吹
つるを、思ひ懸ぬ際なれば驚かざりける心遅さよと、心も惑て恥ぢ在さうす。
御消息など傳る人も甚初々しき人なめるを、折からにこそ萬の事もと思て、
未だ霧の紛なれば、ありつる御簾の前に歩み出て、突居給ふ。山里びたる若
人どもは、應答ん言の葉も覺で、御褥差出る體も辿々しげなり。薰此の御簾
の前には不面目侍りけり。輕率に淺き心ばかりにては、斯も尋ね參るまじ
き山の岨路に思ひ給るを、特殊にこそ。斯く露けき旅を重ては、然とも御覽
じ知らんとなん頼もしう侍る」と、甚切に宣ふ。若き女房の平易に物聞ゆべ
さもなく、消え返り羞耻しげなるも傍痛ければ、女們的奥深きを起し出る間
久く成て殊とめいたるも苦うて、大何事も思ひ知ぬ有様にて、知り顔にも如
何は聞へき」と、甚趣ありて貴なる聲して、引入ながら微に宣ふ。薰半知な
がら憂きを知ず貌なるも、世の習俗と思ひ給へ知るを、一所しも余り恍惚せ
給らんこそ口惜かるべけれ。有難う萬を思ひ澄したる御住居の中へ、何事も

すゞしく
父宮の思ひ
給ふ御心
たぐひて
の御心
づ涼しく
に人となり
る人をよめ
志賀の浦風
かばかり心
中の涼し心
らん六公任

涼しく推量れ侍れば、仍斯く忍び余り侍る深さ淺さの程も、分せ給んこそ効
は侍らめ。普通の好色しき筋には思召し放つべくや。然様の方は殊と進る人
侍るとも、靡くべうもあらぬ心強さになん。自然聞召し合するやうも侍りな
ん。鬱々とのみ過し侍る世の物語も聞させ所に頼み聞させ、又斯く世離れて
眺させ給らん御心の紛しにも、然しも驚させ給ふばかり聞え馴れ侍らば、
如何に思ふ様に侍らん」など多く宣へば、憚しく答へ難くて、起しつる老女
の出來たるにぞ譲り給ふ。比へなく差過して、老噫畏なや。傍痛き御座の體
にも侍るかな。御簾の中にぞ。若き女房は物の階級知ぬやうにこそ」など、
率直に言ふ聲の盛過たるも傍痛く、君達(姫)は思す。老甚も奇く、世中に住居
給ふ人の數にもあらぬ御有様にて、然も有ぬべき人々だに訪ひ數まへ聞え給
も、見え聞ずのみ成り増り侍るめるに、有難き御志の程は、數にも侍らぬ
心にも、驚嘆さまで思ひ給へ聞させ侍るを、若き御心地にも思し知ながら、
聞させ給ひ難きにや侍らん」と、甚憚なく物馴たるも生憎きもの乍、氣色甚
う人めきて趣ある聲なれば、薰甚便宜も知ぬ心地しつるに、嬉し御様子にこ
そ。何事も實に思ひ知り給ける頼み此上なかりけり」とて、寄居給るを、凡

帳の傍より見れば、曙の漸う物の色分るゝに、實に微服給ると見る狩衣姿の甚濡れ濕りたる程、轉て此世の外に香にやと奇きまで香り満たり。此老人は打泣ぬ。老差過たる罪もやと思ふ給へ忍れど、哀なる昔の御物語の、如何ならん序に打出で聞させ、片端をも微かし知し召せんと、年來念誦の序にも、打交ぜ思ふ給へ渡る効にや、嬉き折に侍るを、未だに溺れたる涙に昏て、得こそ聞させ侍らね」と打戦く氣色、眞に甚く物悲しと思ひ。大方盛過たる人は、涙脆なるものとは見聞き給と、甚斯しも思ふも奇う成り給て、薫爇に斯く參る事は度重りぬるを、斯く哀知り給る人もなくてこそ、露けき途の程に一人のみ濡ちつれ。嬉き序なめるを言な残い給そかし」と宣へば、老斯る序しも侍りかし。又侍るとも夜の間の程知ぬ命の頼むべきにも侍ぬを、然ば只斯る老人世に侍りけりとはばかり知し召れ侍らなん。三條宮(女)に侍し小侍従は、果敢く成り侍りにけると微に聞き侍りし。往昔睦う思ひ給し、同じ齡の人多く亡せ侍りにける世の末に、遙なる世界より傳り參て來て、此五歳六歳の間なん、是に斯く侍り侍る。得知し召じかし。此頃藤大納言(梅紅)と申すなる御兄の、衛門督(柏)にて薨れ侍りにしは、物の序などにや、彼の御上とて聞

辨が母
女三宮の御乳
母侍従の姉は
れば小侍従は
辨のいとこな
末方なり
末期になり

「白雲の八重
に重なる遠人
に思はんとつ
な」

召し傳る事も侍らん。逝ぎ給て幾許も隔らぬ心地のみし侍る。其折の悲さも、未だ袖の干く折侍らず思ひ給らるゝを、手を折て數へ侍れば、斯く成人く成せ給にける御齡の程も、夢の如になん。彼の故權大納言の御乳人に侍りしは、辨(梅紅)が母になん侍りし。朝夕に仕奉り馴れ侍りに、人數にも侍ぬ身なれど、人に知れず御心より將た餘りける事を、折々打霞め宣しを、今は臨終に成り給にし御病の末の方召寄て、些宣ひ置く事なん侍りしを、聞召へき所由なん一言侍れど、斯許り聞出で侍るに、残をと思召す御心侍らば、緩になん聞召し果て侍るべき。若き女房も、傍痛く差過たりと突合ひ侍るも道理になん」とて、有繫に打出ず成ぬ。奇く、夢語、巫女やらの者の、不問語するやうに珍かに思さるれど、切に不審く思し渡る事の筋を聞れば、甚奥床しけれど、實に人眼も繁し、一途に古物語に繫ひて、夜を明し果んも骨々しかるべければ、薫何と思ひ分く事はなきもの乍、古の事と聞き侍るも物哀になん。然ば必ず此殘餘聞せ給へ。霧晴ゆけば耻かるべき微服を、面なく御覽じ咎められぬべき體なれば、思ひ給る心の程よりは口惜うなん」とて立ち給ふに、彼の在す寺の鐘の聲微に聞て、霧いと深く立ち渡れる、峯の八重雲

吉の神通はれし時の御うたれとて「さむしき今宵もや我を待つらん宇治の橋姫を古今にそへて此處につれづれと眺めらるる心を汲みて高瀬舟にさす袖をぬらすとたり
身さへうきて「さす棹の竿にぬる袖ゆゑに身さへ浮きても思ほゆるかな」
身をやすくもふるまひにくきなり

て仍思ひ離れ難き世なりけりと、心弱く思ひ知る。御文奉り給ふ。懸想立てもあらず。白き色紙の厚肥たるに、筆は引粧ひ撰て、墨次見所ありて書き給ふ。文「率爾なる體にやと効なく止め侍りて、餘情多かるも苦き事になん。片端聞え置つるやうに、今よりは御簾の前も心易く思ひ許すべくなん。御山籠果て侍らん日數も承り置て、懣せかりし霧の迷も晴け侍らん」などぞ、甚淡白に書き給る、左近將監なる人御使にて、薫「彼の老人尋て文も取せよ」と宣ふ。宿直人の寒げにて彷徨しなど、哀に思し遣て、大なる檜割籠やうの物數多せさせ給ふ。翌日彼の御寺にも奉り給ふ。山籠の僧ども、此頃の嵐には甚心細く苦しからんを、然て在す間の布施給へからんと思し遣て、衣綿など多りけり。御勤行果て出で給ふ朝なりければ、行ひ人どもに衣袈裟衣など、惣て一領の程づ、有る限の大徳達に給ふ。宿直人、彼の御脱棄の艶に甚き狩の御衣ども、得ならぬ白き綾の御衣の柔軟と言知ず香るを移し着て、身を將た得變ぬものなれば、似合しからぬ袖の香を人毎に咎られ愛らるゝなん、却却所狭かりける。心に任せて身を安くも舉動れず、甚可恐さまで人の驚く香を失ひてばやと思と、所狭き人の御移香にて、得も濯ぎ捨ぬぞ余りなるや。

まうでんと
こよりは薫
のことなり
や、疎漏の
かきざまなり

さかし
磨ならまし
ば見せんの返
事に戯れて答
へらるゝなり
御覽すべかめ
艶書のなり

君は姫君の御返事甚見易く巨めかしきを興しく見給ふ。宮にも斯く御消息ありきなど、人々聞させ御覺せさせれば、八「何かは、懸想だちて遇ひ給んも却々憂てあらん。例の若き人に似ぬ御性質なめるを、亡らん後もなど一言打徴かしてしかば、然様にて心ぞ留たらん」など宣ひけり。御自身も、種々の御贈進の山の窟に余りし事など宣へるに、參でんと思して、三の宮(匂)の、斯様に奥まりたらん邊の見増りせんこそ興しかるべけれど、希望事にだに宣ふものを、聞え勵して御心騒し奉らんと思して、閑靜なる夕暮に參り給り。例の種々なる御物語聞え交し給て、見し曉の有様など、委く聞え給に、宮(匂) 切に興しと思したり。然ばよと御氣色を見て、甚ど御心動きぬべく言續け給ふ。句「扱其有けん返事は、何か見せ給ざりし。磨ならましかば」と恨み給ふ。薫然かし。甚種々御覽すべかめる端をだに見せ給はぬ。彼邊は、斯く甚埋れたる身に引籠て、止べき様子にも侍らねば、必ず御覽せさせばやと思ひ給れど、如何でか尋ね寄せ給へき。容易き身こそ、好色ま欲くは甚好く好色ぬべき世に侍りけれ。打隠へつゝ多かめるかな。然る方に見所ありぬべき女の物思しき、打忍たる住家も山里めいたる隈などに、自然侍るべかめり。此の

心ながら叶はぬありて遁世の心深き身をさる女に眼をまじき心つかば大きに本意となり
 ひじりことば今さやうにいさぎよきひじりことばの行末までかはらぬか見果てまほしとなり
 一「大きに」なりどひじりめかひるなり
 ひをむし朝あれども夕べをしらぬ身ぞとなり水魚そぎすて
 遊興の事はな昔は女などの

聞さする邊は、甚世似ぬ聖僧態にて骨々しうぞあらんと、年來は思ひ悔り侍りて、耳をだにこそ留め侍らざりけれ。微なりし月影の、見劣せずば、正ならんはや。氣色有様將た然ばかりならんをぞ、有ま欲き程と覺え侍るべき」など聞え給ふ。果々は、熱心だちて甚憾く、普通の人の心移るまじき人の、斯く深く思るを、疎ならじと床しう思す事限なく成り給ぬ。句「仍又々熟く氣色見給へ」と人を教唆給て、限ある御身の程の高貴さを、厭しきまで焦躁しと思したれば可笑くて、薫いでや由なくぞ侍る。暫し世中に心留めじと思ひ給るやうある身にて、等閑事も憚しう侍るを、心ながら叶ぬ心着き初なば、大に豫期に違へき事なん侍るべき」と聞え給ば、句いで噫事々し。例の誇大しき聖僧言葉、見果てしがなとて笑ひ給ふ。心の中には、彼の老人の微かし筋などの、甚ど打驚されて物哀なるに、興しと見る事も、眼易しと聞く邊も、何ばかり心にも留らざりけり。十月に成て、五六日の程に宇治へ參で給ふ。網代をこそ此頃は御覽せめと聞る人々あれど、薫何かは其の蜉蝣に争ふ心にて、網代にも寄んにと省略捨て給て、輕らかに網代車にて、緋の直衣指貫縫せて、故らび着給り。宮(八)待ち悦び給て、所に應たる御饗應など趣致う

み乗りたる車に用ひたる故堅かたり約といふ細かに織りし平絹なり服者も着るものなれば文もかなくはなやかならぬものなり御ことのひびき器のよき故しかと思ひたりしを只今自はさの調ぶるは巧もなきは人の巧みなりしとて心入るべしとも弾かれぬなり
 峯の松屋
 「松風入二夜」
 琴こといふ通とを松風の音に峯の松風通ふに結よりしづべの緒よりしづ

爲做し給ふ。暮ぬれば大殿油近くて、前々見措給る經文どもの深意など、阿闍梨も請じ下して、義など言せ給ふ。打も交睫す、河風の甚荒涼きに木葉の散交ふ音、水の響など、哀も過て物怖しく心細き所の體なり。明方近く成ぬらんと思ふ程に、過し東雲思出られて、琴の音の哀なる事の序作り出て、薫前の度霧に惑され侍りし曙に、甚珍き物の音一聲承りし残なん、却々に甚欲聞う飽す思ひ給らるゝ」など聞え給ふ。宮色をも香をも思ひ捨し後、昔聞し事も皆忘れてなん」と宣へど、人召て琴取寄て、宮「甚似なく成にたりや。嚮導する物の音に就てなん、思出らるべかりける」とて、琵琶召て賓客薫に唆し給ふ。取て調べ給ふ。薫更に微に聞き侍りし同じ物とも思ふ給られざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ふ給しか」とて、心解ても搔立て給ず。八「いで噫善惡なや。然御耳留るばかりの手などは、何處よりか爰までは傳り來ん。有まじき御事なり」とて、琴搔鳴し給へる、甚哀れに心凄し。過半は峯の松風の反響するべし。甚辿々しげに謙き給て、趣味ある曲一つばかりにて罷め給つ。宮「此邊に案外で、折々微く箏の琴の音こそ、心得たるにやと聞く折侍れど、心注てなどもあらで久う成にけりや。心に任せて各自搔鳴す

橋 姫

松風故に一し
ほの感あるな
折々ほのめく
中君の所作を
申さるゝなり
はづかしう
八宮の薫に耻
しと思さるゝ
なり

へかめるは、河浪ばかりや打合すらん。論なう物の用に爲ばかりの、拍子な
ども留らじとなん覺え侍る」とて、宮搔鳴し給へ」と彼方に聞え給ど、思ひ
寄ざりし一人琴を聞き給けんだにあるものを、甚醜ならんと引入つゝ、皆肯
き給す。度々、唆し聞え給ど、兎角聞え角力て止み給ぬれば、甚口惜う覺ゆ。
其序にも斯く奇う世似ぬ體裁にて過す有様どもの、思の外なる事など恥う思
いたり。宮一人にだに如何で知せじと育み過せど、今日明日とも知ぬ身の残少
さに、有繫に行末遠き人は、零落れて流浪ん事、是のみこそ實に世を離ん際
の絆なりけれ」と打語ひ給ば、心苦う見奉り給ふ。薰殊との御後見だち、歩
歩しき筋に侍ずとも、疎々しからず思召れんとなん思ひ給る。暫も生存へ侍
ん命の間は、一言も斯く打出で聞させてん様を、違へ侍るまじくなん」など
申し給ば、宮「甚嬉き事」と思ひ宣ふ。扱曉方、宮の御勤行し給ふ程に、彼の
老人召出て逢ひ給り。姫君の御後見にて侍はせ給ふ、辨の君とぞ言ける。年
は六十に少し足ぬ程なれど、閑雅に趣ある氣色して物など聞ゆ。故權大納言
の君の世と共に物を思つゝ、病付き果敢く成り給にし有様を聞え出て、泣く
事限なし。實に他の人の上と聞んだに哀なるべき故事どもを、況て年來不審

く床しう、如何なりけん事の初にかと、佛にも此事を明瞭に知せ給へと念し
つる驗にや、斯く夢の如に哀なる昔語を、意えぬ序に聞付つらんと思すに、
涙留め難かりけり。薰扱も斯く其世の情知たる人も残り給りけるを、珍にも
恥うも覺る事の筋に、仍斯く言傳る儔や又も有ん。年來懸ても聞き及ざり
けるを」と言ば、辨「小侍従と辨と放て、又知る人侍らじ。一言にても又他人
に打真似び侍らず。斯く卑賤く數ならぬ身の程に侍れど、夜晝彼(柏)の御影に
付き奉りて侍しかば、自然物の氣色を見奉り初しに、御心より余りて思しけ
る時々、只二人の中になん、稀の御消息の通ひも侍りし。傍痛ければ委く聞
させず。臨終の末期に成り給て、些宣ひ置く事の侍しを、斯る身には置所
なく慥く思ふ給へ渡つゝ、如何にしてかは聞召し傳へきと、歩々しからぬ念
誦の序にも思ひ給つるを、佛は世に在しけりとなん思ふ給へ知ぬる。御覽せ
さすべき物も侍り。今は何かは焼も捨て侍りなん。斯く朝夕の消を知ぬ身の
打捨て侍りなば、落散るやうもこそと、甚不安く思ひ給れど、此宮邊にも、
時々微かせ給ふを待出で奉りしかば、些し頼もしく、斯る折もやと念じ侍り
つる力出で參で來てなん。更には是は此世の事にも侍じ」と、泣々細かに、生

藤衣たちかき
 柏木の藤衣に
 ぬるなり
 よからぬ人
 辨を妻とせし
 人ありしとせし
 紫に具して筑
 なるべしける
 父方ににつけて
 辨尼が父左中
 北方の母方の
 をぢなり
 みやまがくれ
 深山がたくれ
 朽木なれ心は
 花になさばは
 の句をとりの
 いへり
 小侍は
 女三宮の女房
 なれば薫の女
 り給はんと尋
 罪重なり
 賞父の行方
 しらで罪深か

れ給ける程の事も熟く覺つ、聞ゆ。空う成り給し騒に、母に侍し人(柏木の)は
 即て病着て程經ず逝れ侍にしかば、甚と思ひ給へ沈み、藤衣裁ち重ね悲き事を
 思ひ給し程に、年來好らぬ人の心を着たりけるが、人を詐ちて、西の海の果
 まで奪持て罷りにしかば、京の事さへ跡絶て、其人も彼處にて亡せ侍にし後、
 十歳余りにてなん、有ぬ世の心地して罷り上りたりしを、此宮は、父方に就
 て、童より参り通ふ所由侍りしかば、今は斯う世に交べき體にも侍ぬを、冷
 泉院の女御殿(柏木の妹)の御方などこそは、昔聞き馴れ奉りし邊にて参り寄べ
 く侍しかど、恥く覺え侍りて得差出で侍らで、深山隠れの朽木に成にて侍る
 なり。小侍従は何時か亡せ侍りにけん。往昔の若盛と見侍りし人は、數少く
 成り侍りにける末の世に、多くの人に後る命を悲く思ふ給てこそ、有繫に
 廻ひ侍れ」など聞る程に、例の明け果ぬ。薰縦し然ば、此昔物語は盡すべう
 なんあらぬ。又人聞ぬ心安き所に聞ん。侍従(小侍)と言し人は微に覺るは、
 五歳六歳ばかりなりし程にや、俄に胸を病て亡にきとなん聞く。斯る對面な
 くば罪重き身にて過ぬべかりける事」など宣ふ。小やかに押卷させたる反
 古どもの微臭きを、袋に縫入れたる取出て奉る。辨御前にて失せ給へ。我仍

らんとなり
 柏木の詞なり
 女三宮の御前
 て焼捨て給へ
 自身は生くべ
 りにもあらず
 りにたりとな
 私事には
 此文をつたへ
 得ざりしは
 逢は私死に
 逢は私死に
 しが悲しと
 院の女一宮
 冷泉院の女大
 宮母は致仕大
 臣の女なり
 ふせなり
 綾の類も浮織
 なり

生べくもあらず成にたりと宣はせて、此御文を取集て給せたりしかば、小侍
 従に又逢見侍らん序に、明瞭に傳へ参せんと思ひ給しを、即て別れ侍にしも、
 私事には飽ず悲うなん思ひ給る」と聞ゆ。平然て是は隠い給つ。斯様の老
 人は不問語にや、奇き事の例に言出らんと苦く思せど、返すくも散さぬ由
 を誓つる、然もやと又思ひ亂れ給ふ。御粥強飯など食り給ふ。昨日は暇の日
 なりしを、今日は内裏の御物忌も明ぬらん。院の女一宮惱み給ふ御見舞に必
 ず参るべければ、旁暇なく侍るを、又此頃過して、山の紅葉散ぬ先に参る
 べき由聞え給ふ。宮斯く屢立寄せ給ふ光に、山の蔭も少し物明むる心地して
 なん」など悦び聞え給ふ。歸り給て、先づ彼袋を見給ば、唐の浮線綾を縫て、
 上といふ文字を上にかき給ふ。細き組糸して、口の方を結たるに、彼(柏)の御名
 の封付きたり。披るも恐ろ覺え給ふ。色々の紙にて、稀に通ける御文(三)の返
 事、五つ六つぞある。又は彼(柏)の御手にて、病は重く限に成にたるに、又
 微にも聞ん事難く成ぬるを、床しう思ふ事は添にたり。御形容も變りて在す
 らんが種々悲き事を、檀紙五六枚に點々と奇き鳥の蹟の如に書て、
 相眼の前に此世を背く君よりも、

他に別る魂ぞ悲き。」

又端に、珍く聞き侍る二葉(薫)の程も、不安う思ひ給る方はなけれど、

柏「命あらば其とも見まし人知ず、

岩根に留し松の生末。」

書措たるやうに、甚亂雑しくて、侍従の君にと表には書き付たり。紙魚といふ虫の棲家に成て、古めきたる黴臭さながら跡は消ず、只今書たらんにも違ぬ言葉どもの、細々と明白なるを見給ふに、實に落散たらましかばと不安う最惜き事どもなり。斯る事世に又有んやと心一つに甚ど物思し添て、内裏へ參んと思しつるも出立れず。宮(三)の御前に參り給れば、甚何心もなく若やかなる態し給て、經誦み給ふを恥ひて持て隠し給へり。何かは知にけりとも知れ奉らんなど、心に籠て萬に思ひ居給へり。

椎本

うらめしとい
一我庵は都の
たつみしかぞ
住む世をうぢ
山と人はいふ
なりてむつま
しう
姫君たち故に
六條院より融
河原左大臣融
公の別業宇治
郷にあり後雅
六條左大臣雅
信公領されし
を御堂關白道
長公買取られ
て長保五年に
人々を遊へて
乗船の遊びな
どあり息頼通
の代に法華寺
永承七年に華
三味を修せし
三平院とせし
れ平治三年に
付け治院とせ
に左幸院とせ
傳は左幸院と
は左幸院とせ
をより三年に
六

二月の廿日の程に、兵部卿宮(句)初瀬に詣で給ふ。古き御願なりけれど、思しも立で年來に成にけるを、宇治の邊の御中宿の床しさに、多分は催され給るなるべし。恨しといふ人もありける里の名の、凡て睦しう思さる、故も果敢しや。上達部甚數多仕奉り給ふ。殿上人などは更にも言ず世に残る人少く仕奉れり。六條院より傳りて右の大殿(霧)領り給ふ所は、川より遠に甚廣く面白くてあるに、御饗應せさせ給り。大臣(霧)も歸途の御迎に參り給へく思したるを、俄なる御物忌の重く愼み給へく申たれば得參ぬ由の陳謝申し給り。宮(句)生荒涼く思したるに、宰相(中將(薫)、今日の御迎に參り合ひ給るに、却却心易くて、彼の邊の氣色も傳へ寄んと御心適ぬ。大臣(霧)をば打解て見え難く、事々しきものに思ひ聞え給り。御子の公達、右大辨、侍従、宰相、權中將、頭、少將、藏人、兵衛佐など皆侍ひ給ふ。帝后も特殊に思ひ聞え給る宮なれば、大方の御待遇も甚限なく、況て六條院の御方々は、附々の人も皆私に心寄せ仕奉り給ふ。所に就たる御裝飾など趣致う爲なして、恭、

條院より傳は
りてとは擬し
たるべし
川よりあなた
川よりあなた
なり
私の君に
公の君に
のぞき奉りて
は私の主君に
なり

川添柳
日本紀第十五
顯宗天皇御
歌柳水ゆき
添柳水ゆき
なびき起き
ずち其根は
立

ふきとく
みは吹きかす
どもはほ心の
隔てははるか
なると笛を薫
と推量してよ
まれば
なほふきかよ
そなたより心
を隔てられそ
なり
酬酢樂
村上御記「應
和元年閏三月
十一日藤宴舟
樂奏二酬酢樂
舞の四人云
の例あるにや
櫻人越の心
を越調の心
に越調なる
りて吹調に
その舟の詞
はとありち
はとありち
はとありち

源氏物語活釋後編

双六、彈棊の盤どもなど取出て、心々に遊び暮し給つ。宮は習ひ給ぬ御外出に惱しく思されて、爰に休息の御心も深ければ打休み給て、夕つ方を御琴など召て遊び給ふ。例の斯う世離れたる所は、水の音も誇張して、物の音澄み増る心地して、彼聖僧の宮にも只差渡る程なれば、追風に吹來る響を聞き給ふに、昔の事思し出られて、宮、笛を甚興しくも吹通したなるかな。誰ならん。昔の六條院の御笛の音聞しは、甚興趣げに愛嬌付たる音にこそ吹き給しか。是は澄上りて事々しき氣の添たるは、致仕大臣の御族の笛の音にこそ似たんなれ」など獨語ち在す。宮、哀に久く成にけりや。斯様の管絃などもせで、有にもあらで過し來にける年月の、有繫に多く數へらるゝこそ効なけれ」など宜ふ序にも、姫君達の御有様可憐く、斯る山懷中に引籠ては止すもがなと、思し續らる。宰相の君の同らは近き由縁にて見せ欲げなるを、然も思ひ寄まじかめり。況て今様の心淺からん人をば、如何でかはなど思し亂れて、情々と眺め給ふ。所は春の夜も甚明し難きを、心遣り給る旅寢の宿は、酔の紛に甚疾う明ぬる心地して、飽す歸ん事を宮は思す。遙々と霞み渡る空に、散る櫻あれば今開け初るなど色々見渡さるゝに、河添柳の起臥靡く水影など尋常

ならず興しきを、見習ひ給ぬ人は、甚珍く見捨て難しと思さる。宰相(薰)は斯る便宜を過さず彼宮に參でばやと思せど、數多の人眼を避て、一人漕出で給ん舟渡りの程も、輕卒にやと思ひ躊躇ひ給に、彼(八)より御文あり、
宮、山風に霞吹解く聲はあれど、
隔て見る遠の白浪。」
草に甚美しう書き給り。宮思す邊と見給ば、甚興しく思いて、此御返事は我
せんとて、
句「遠近の汀の波は隔つとも、
仍吹通へ宇治の河風。」

中將(薰)は參で給ふ。管絃に心入たる公達誘て、掉遣り給ふ程、酬酢樂奏びて、水に覗きたる樓に造り下したる橋の意匠など、然る方に甚興しう趣致ある宮なれば、人々心して舟より下り給ふ。爰は又特殊に、山里びたる網代屏風などの、殊更に簡略て見所ある御設計を、然る心地して搔拂ひ、最甚う爲做し給り。古器の音など、甚二なき彈物どもを、特と設たるやうにはあらで、次次彈出で給て、一越調の心に、櫻人奏び給ふ。主人の宮(八)の御琴を、斯る序

椎本

どめよとのよ
せありておも
ひたるにやあ
おほきみ
王孫の末々を
いふ
いとほしが
句宮此の字治
八宮方にかや
うの眼見ると
つ折るとりも
はといたはり
ひたるなり合
山櫻にほふあ
姫君のことか
よめり同じか
ざしを同じか
む吉野と君の
入らば同じか
さしを同じか
そはせめ一の
樹の蔭にきて
此花の枝を折
りつるの意な
野をむつまじ

み
一春の野に董
つみにと来し
我ぞ野をむつ
まじみ一夜寝
にけり
かざしたる歌
卑下したる歌
方なり花に過
なるべしとみ
野を分てしも
何句ふらし秋
の野にいなづれ
ともなくなび
く尾花をなづ
よりとらわさ
にほあるを何
歌にとりなさ
れしなり
前川風も
かよへ字治し
川風とありし
院と八宮に遊
と両方の遊の

源氏物語活釋後編

にと人々思ひ給れど、箏の琴をぞ心にも入らず折々掻合せ給ふ。耳馴ぬ氣にやあらん、甚物深く面白しと、若き人々思ひ染たり。所に就たる饗應甚興趣うし給て、他に想像し程よりは、生孫王めく賤しからぬ人数多、諸王、四位の古めきたるなど、斯く人眼見るべき折と、豫て最惜がり聞けるにや、然べき限参り合て、瓶子取る人も汚げならず、然る方に古めきて、儀禮しう遇し給り。賓客達は、御姫達の住居給らん御有様思ひ遣つ、心盡す人もあるべし。彼宮(八)は況て容易き程ならぬ御身をさへ、所狭く思さるゝを、斯る折にだにと忍び難て、面白き花の枝を折せ給て、御供に侍ふ上童の美さして、奉り給ふ。

句「山櫻匂ふあたり尋ね来て、

同じかざしを折てける哉

野を睦じみ」とやありけん。御返事は如何でかはなど聞え難く思し煩ふ。斯る折の事、故とがましくもてなし、程の経るも、却々憎き事になんし侍りしなど老女ども聞れば、中君にぞ書せ奉り給ふ。

宮、騷し折る花の便りに山賤の、

垣根を過ぬ春の旅人。

野を分てしものと、甚美しげに藤々しく書き給り。實に川風も心分ぬ體に吹通ふ物の音ども面白く奏び給ふ。御迎に藤大納言仰事にて参り給り。人々數多参り集ひ物騒くて競ひ歸り給ふ。若き人々飽ず願のみせられける。宮(八)は又然べき序しと思す。花盛にて四方の霞も眺め遣る程の見所あるに、唐のも倭のも歌ども多れど、煩くて尋ねも聞ぬなり。物騒くて、思まゝにも得言やらず成にしを、飽ず宮は思して、嚮導なくとも御文は常にありける。宮(八)も宮、仍聞え給へ。特と懸想だちても遇さじ。却々心動きにも成ぬべし。甚好色給る親王なれば、斯る人など聞き給ふが、仍も有ぬ戲なめり」と、唆し給ふ時々、中君ぞ聞え給ふ。姫君(大)は斯様の事、戯にも距れ給る御心深さなり。何時となく心細き御有様に、春の徒然は甚ど暮し難く眺め給ふ。成熟増り給ふ御姿容ども愈増り、有ま欲く美しさも、却々心苦う不充分に在せましかば、可憐く惜き方の思は薄からましなど明草思し亂る。姉君廿五中君廿三にぞ成り給ける。宮(八)は重く慎み給へき年なりけり。物心細く思して、御勤行常よりも撓なくし給ふ。世に心留め給ねば、出立急ぎをの

つし給ふ
八宮此の巻の
末に蕨せらる
伏線なり
極樂をいへり

いかなること
父の事の不明
はなり頃より
音羽の山
一松の初聲
音羽の山より
吹きそめけり
近き處に横の都
山は宇治の事なり

うはべのなさ
下には猜み嫉
む心ありなが
ら上には情を
交すなり
一夜ふかき
をしづめては
れ、秋の夜は
なす、と音に

源氏物語活釋後編

み思せば、涼き道にも赴き給ぬべきを、只此の御事どもの甚最惜く、限なき御心強さなれど、必ず今はと見捨て給ん御心は亂れなんと、見奉る人も推量り聞るを、思す如にはあらずとも、尋常に然ても外聞口惜かるまじう、見許されぬべき際の人の、誠心の後見聞んなど思寄り聞るあらば、不知貌にて許してん。一所世に住み着き給ふ便あらば、其を見譲る方に慰め置べきを、然まで深き心に尋ね聞る人もなし。稀々は些き便に、好色事聞などする人、又若々しき人の心の戯に物詣の中宿、往來の程の等閑事に氣色ばみ懸て、有繫に斯く眺め給ふ有様など推量り侮はしげに遇すは眼覺しうて、苟の答をだに爲させ給す。三宮(句)ぞ仍見では止しと思す御心深かりける、然べきにや在しけん。宰相(中將)其秋、中納言に成り給ひぬ。甚ど句増り給ふ世の營に添ても、思す事多かり。如何なる事と愾く思したりし年來よりも、心苦うて、逝ぎ給にけん往時の思やらるゝに、罪軽く成り給ばかり勤行も爲ま欲くなん。彼老人(辨)をば憐なる者に思ひ置いて、著き體ならず、兎角紛しつゝ、心寄せ見舞ひ給ふ。宇治に參で、久う成にけるを思し出て參り給り。七月ばかりに成にけり。都には未だ入立ぬ秋の氣色を、音羽の山近く風の音も甚冷やかに、

横の山邊も僅に色づきて、仍尋ね來るに興しう珍う覺るを、宮(八)は況て例よりも待ち悦び聞え給て、此度は心細氣なる物語甚多く申し給ふ。八宮亡らんと、此君達を然べき物の便にも訪ひ、思ひ捨ぬものに數まへ給へ」など赴けつゝ聞え給ば、薰一言にても承り置てしかば、更に思ふ給へ怠るまじくなん。世中に心を留しと省き侍る身にて、何事も頼もしげなき生先の少さになん侍れど、然る方にて廻り侍ん限は、變ぬ志を御覽じ知せんとなん思ふ給る」など聞え給ば、甚嬉しと思いたり。夜深き月の明かに差出て、山の端近き心地するに、念誦甚哀に爲給ひて昔物語し給ふ。宮此頃の世は如何成にたらん。宮中などにて斯様なる秋の月に、御前の御管絃の折に侍ひ合たる中に、物の上手と覺しき限、各自に打合せたる拍子など、事々しきよりも、藝能ありと評ある女御更衣の、御局々の各自は挑しく思ひ、表面の情を交すべかめるを、夜深き頃の人の氣濕りぬるに、心惱く搔調べ微に綻び出たる物の音など、聞所あるが多しかな。何事にも女は玩弄の端にしつべく、物果敢きもの乍、人の心を動す種子になん有べき。然ば罪の深きにやあらん、子の道の闇を思ひ遣るにも、男子は甚しも親の心を擾さずやあらん。女は限あ

椎本

聲にめづる
音樂の方はな
迎葉の宮に
優婆塞の詞な
れば相應して
おもしろし經
「大樹緊那羅
於佛前一彈二
瑠璃琴奏二八
萬四千音樂二
迦葉尊者忘二
威容一前起出
うとくしか
薫を頼まるゝ
初めにとなり

すまひ
「七月十六七
日間相撲召
仰也廿六日
内取廿九日披
出相撲御七人
諸國の供御と
を召集めて七
月に相撲御七
いふ事を行ひ
ずるなり初め
をば召合せと
申し後御召と
りて御出と人
ふは供御など
しは供御など
にいたむる故
者なり

りて、言ふ効なき方に思捨べきにも、仍甚心苦かるべき」など、大方の事に就て宣へる。如何然思さざらんと思苦しく思ひ遣る、御心の中なり。薫凡て眞に然思ひ給へ捨たる故にや侍らん。自身の事にては、如何にも如何にも深う思知る方の侍ぬを、實に些き事なれど、聲に愛る心こそ背き難き事に侍りけれ。賢う聖僧だつ迦葉も然ばや立て舞ひ侍りけん」など聞て、飽ず一聲聞し御琴の音を切に床しがり給は、疎々しからぬ初にもと思すらん、御自身彼方に入り給て、切に峻し聞え給ふ。箏の琴をぞ甚微に搔鳴して止み給ぬる、甚ど人の氣息も絶て哀なる空の氣色所の體に、殊となき御管絃の、心に入て興しう覺れど、打解ても如何でかは彈き合せ給ん。宮自然斯ばかり鳴し初つる殘は、世籠れる同志に譲り聞てん」とて、宮は佛の御前に入り給ぬ。宮「我なくて草の庵は荒ぬとも、此一言は枯じとぞ思ふ。斯る對面も此度や最終ならんと物心細きに忍び難て、頑しき辭言多くも成ぬるかな」とて、打泣き給ふ。賓客、薫如何ならん世にか枯せん永き世の、

契結る草の庵は

相撲など、公事ども紛れ侍る頃過て侍はん」など聞え給ふ、此方にて彼の不問語の老人召出て、殘多かる物語など爲させ給ふ。入方の月は隈なく射入て透影優雅きに、君達も奥まりて在す。通例の懸想びてはあらず、心深う物語悠閑に聞つ、在し給は、然べき御答など聞え給ふ。三宮(句)は甚床しう思いたるものをと、心の中には思出でつ、我心ながら、仍人には殊なりかし。然ばかり御心も許い給ふ事の然しも急れぬよ。距れて將た、有まじき事とは有繫に覺ず、斯様に物を聞え交し、折節の花紅葉に就て、哀をも情をも通すに憎からず在し給ふ邊なれば、宿世殊にて他方にも成り給んは有繫に口惜かるべく、領じたる心地しけり。未だ夜深き程に歸り給ひぬ。心細く殘なげに思いたりし御氣色を思出で聞え給つ、騒ぎ程過して參でんと思す。兵部卿宮も、此秋の程に紅葉見に在さんと、然べき序を思し廻す。御文は絶ず奉り給ふ。女は深厚に思すらんとも思ひ給ねば、煩しくもあらで、微き態に扱しつ、折々に聞え交し給ふ。秋深く成行く隨に宮(八)は甚う物心細く覺え給ければ、例の靜なる所にて、念佛をも紛なく爲んと思して、君達に

すぎねひにし
姫君たちの母
君なり

も然べき事聞え給ふ。世の習として終の別を免れぬ事なめれど、思ひ慰む方
 ありてこそ、悲さをも覺すものなめれ。又見讓る人もなく、心細げなる御有
 様どもを打捨てんが甚き事。然ども然ばかりの事に妨げられて、永き世の闇
 にさへ惑んが益なさ。半見奉る程だに思ひ捨る世を、去なん後の事知べき事
 にはあらねど、我身一つにあらず、逝ぎ給にし御面伏に、輕々しき心ども用
 ひ給な。臆氣の所縁ならで、人の言に打靡き、此山里を浮遊れ給な。只斯う
 人に違たる宿命殊なる身と思し做て、爰に世を盡してんと思取り給へ。一向
 に思し做ば、事にもあらず過ぬる年月なりけり。況て女は然る方に絶籠りて、
 著く惜氣なる他の誹を負ざらんなん好るべき」など宣ふ。兎も角も身の成
 んまでは思しも流されず。只如何にしてか後れ奉りては、世に片時も生存べ
 きと思すに、斯く心細き體の御豫言に、言ふ方なき御昏惑どもになん。心の
 中にこそ思捨て給つらめど、明暮御傍に習ひ給て、俄に別れ給んは難面き
 心ならねど、實に恨しかるべき御有様になん有ける。明日入り給んとての日
 は、例ならず此方彼女イみ歩き給て見給ふ。甚物果敢く假初の宿にて、過い
 給ける御住居の有様を、亡らん後に如何してかは、若き人の絶え籠ては過い

給んと、涙含つつ念誦し給ふ體甚清げなり。大人びたる女房召出で、宮安
 心く仕奉れ。何事も元より容易く、世に評判あるまじき際の人は、末の衰も
 常の事にて紛ぬべかめり。斯る際に成ぬれば、人は何とも思ざらめど、口惜
 うて流浪ん宿命、畏く最惜き事なん多かるべき。物淋く心細き世を経るは
 例の事なり。生れたる家の分限家憲のまゝに遇したらんなん、外聞にも我心
 地にも過失なくは覺べき。賑しく人數めかんと思とも、其心にも叶まじき世
 とならば、努々輕々しく、良らぬ方に披し聞ゆな一など宣ふ。未だ曉に出で
 給とて、此方に渡り給て、宮無らん程心細くな思し佗そ。心ばかりは慰て
 管絃などはし給へ。何事も思に得叶まじき世をな思し入そ」など、顧み勝に
 て出で給ぬ。二所甚ど心細く物思ひ續られて、起臥打語つ、姫君一人
 一人無らましかば如何でか明し暮さまし。今行末も定なき世にて、萬一別る
 やうもあらば、など、泣み笑み、遊戯事も實際事も同じ心に慰め交して過し
 給ふ。彼の行ひ給ふ三昧今日果ぬらんと、疾と待ち聞え給ふ夕暮に使参りて、
 宮今朝より惱うてなん得参ぬ。風邪かとして兎角繕ふと爲する程になん。然
 は例よりも對面待遠きを」と聞え給り。胸潰れて如何なるにかと思し嘆き、

推 本

念じて
こらへて歸ら
んとなり

死
い
み
じ
き
事
別
も
な
り

御衣ども綿厚くて急ぎ爲させ給て奉れなどし給ふ。二三日は下り給ず。如何にくと人奉り給ど、宮に重體しくはあらず、何處となく苦しうなん。些も快うならば、今念じてしなど、言葉にて聞え給ふ。阿闍梨直と侍ひて仕奉り給りけり。阿些御病惱と見れど、限の度にも在すらん。君達の御事、何か思し嘆くべき。人は皆御宿世といふもの殊別なれば、御心に懸るべきに在らず」と、愈思し離へき事を聞え知せつ、阿今更に勿思し出で給そ」と諫め申すなりけり。八月廿日の程なりけり。大方の空の氣色も最どしき頃、君達は朝夕霧の晴る間もなく、思し嘆きつ、眺め給ふ。有明の月の甚花やかに差出て、水の面も瞭に澄たるを、其方の部上させて見出し給るに、鐘の聲幽に響て、明ぬなりと聞る程に人來て、使「此夜半ばかりになん、亡せ給ぬ」と泣々申す。心に懸て如何にとは絶す思ひ聞え給れど、打聞き給には、淺ましく物覺ぬ心地して、甚ど斯る事に涙も何地か往にけん。只俯伏臥し給り。甚き事も、見る眼の前にて不審からぬこそ常の事なれ。思慕さ添て思し嘆く事道理なり。暫にても後れ奉りて、世に在べきものとも思し習ぬ御心地どもにて、如何でかは後じと泣き沈み給ど、限ある道なりければ何の効なし。阿闍

梨年頃約束置き給ける隨に、後の御事も萬に仕奉る。亡き人に成り給らん御姿容をだに、今一度見奉んと思し宣へど、阿今更に何條然る事かは侍るべき。日來も又逢見給まじき事を聞え知せつれば、今は況て、互に御心留め給まじき御用意を、習ひ給べきなり」とのみ聞ゆ。在しける御有様を聞き給にも、阿闍梨の餘り猛き聖僧心を、憎く難面しとなん思しける。入道の御本意は、昔より深く在せしかど、斯う見讓る人なき御事どもの見捨て難きを、生る限は明暮得去ず見奉るを、世に心細き世の慰安にも思し離れ難くて過い給るを、限ある道には、先立ち給も慕ひ給ふ御心も、叶ぬ事なりけり。中納言殿(薰)には聞き給て、甚敢なく口惜く、今一度心閑にて聞へかりける事多う残たる心地して、大方世の有様思ひ續られて、甚う泣い給ふ。又逢見ん事難くやなど宣しを、仍常の御心にも、朝夕の隔知ぬ世の果敢さを、人より勝に思ふ給りしかば、耳馴て、昨日今日と思さりけるを、返すく飽す悲く思さる。阿闍梨の許にも、君達の御見舞も細かに聞え給ふ。斯る御見舞など、又訪れ聞る人だになき御有様なれば、物覺ぬ御心地どもにも、年來の御懇情の深切なめりしなどを、思知り給ふ。尋常の程の別だに、當面では又類なき

は
終
に
ゆ
く
道
と
は
か
ね
て
き
日
と
は
思
は
ざ
り
し
を

みづきやうな
布施のことな
涙の瀧も
日か明日か
待つかといひ
高の瀧といひ
山と峽といひ
ばきとをいひ
だれどいふは
だの意にいふ
たのべし用ほ
ほとけを
八宮の住み
をひ安置して
りを安んずる

やうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにて、如何やうなる御心地もし給らんと思し遣つ、後の御法事などあるべき事ども推量りて、阿闍梨にも見舞ひ給ふ。爰にも老人們に托せて、御誦經などの事も思ひ遣り聞え給ふ。明ぬ夜の心地ながら、九月にも成ぬ。野山の氣色況て袖の時雨を催し勝に、兎もすれば争ひ落る木葉の音も、水の響も涙の瀧も同物の如に昏惑て、斯では如何でか、限あらん御命も暫し廻ひ給んと、侍ふ女房は心細く、甚く慰め聞えつ、思ひ惑ふ。爰にも念佛の僧侍ひて、在し、方は佛を形身に見奉りつ、時々參り仕奉りし人々の、御忌に籠りたる限は、哀に勤行て過す。兵部卿宮(匂)よりも、度々見舞聞え給ふ。然様の御返事など聞ん心地もし給ず疎遠ければ、中納言(善)には斯うも有ざるを、我をば仍思ひ放ち給るなめりと、恨しく思す。紅葉の盛に、詩文など作せ給んとて準備給しを、斯く此邊の御道遙便なき頃なれば思し止りて口惜くなん。御忌も果ぬ。限あれば、涙も隙もやと思し遣て、甚多く書き續け給り。時雨勝なる夕つ方、

匂「男鹿啼く秋の山里如何ならん、

來ける
京を出て來
るは宇治へ
立寄りこそ
今宵御返り
又參るべし
なり

小萩が露のかゝる夕暮。

只今の空の氣色を思し知ぬ貌ならんも、餘り不愛くこそあるべけれ。枯行く野邊も分て眺らるゝ頃になんゝなどあり。大實に甚餘り思知ぬやうにて度々に成ぬるを、仍聞え給へ」など、中君を例の唆して書せ奉り給ふ。今日まで生存て、硯など近く取寄て見るべきものとやは思し。心憂くも過にける日數かなと思すに、又搔曇り物見ぬ心地し給は、押遣て、中仍得こそ書き侍るまじけれ。漸う斯う起居られなどし侍る、實に限ありけるにこそと覺るも疎しう心憂くて」と、可愛氣なる體に泣萎れて在するも、甚心苦し。夕暮の頃より來ける御使、宵少し過てぞ來たる。大如何でか歸り參らん。今宵は旅寢して一と言せ給ど、使立歸りこそ參りなめ」と急げば、最惜うて我猛う思ひ鎮め給にはあらねど、見煩ひ給て、

大「涙のみ霧塞れる山里は、

籬に鹿ぞ諸聲に啼く。」

黒き紙に、夜の墨次も辿々しければ、引粧ふ所もなく筆に任せて、押包て出し給つ。御使は、木幡山の邊も雨催に甚恐しげなれど、然様の物怖すまじき

「さよのくま
ひのくま川に
胸とめてし影
だに見ん」

友まどはせ
八宮ははなれ
を深く思ひや
立てなきぞ
しぬべき秋
せり友まどは
らねど

「あまは
意なり
月日のか
はなたより
めり日をば
かざし給ふ
きぞとなり
ゆく方もな
合點ゆかぬ
なり思ひや
なきの意な
たぐひなげ
ふなり
むかしさま
で八の宮へ
御志として

を「選出で給けん、煩げなる笹の隈を、駒引止むる程もなく打早めて、片時に参り着ぬ。御前に召ても、甚く濡て参りたれば祿賜ふ。先々御覽せしにはあらぬ手蹟の、今少し大人び増りて越づきたる書體などを、孰か孰ならんと打も措ず御覽じつ、疾にも大殿籠らねば、待とて起き在し、又御覽する間の久きは、如何ばかり御心に染む事ならんと、御前なる女房密語き聞て、憎み聞ゆ。眠たければなめり。未だ朝霧深き朝に、急ぎ起て奉り給ふ。

句「朝霧に友迷はせる鹿の音を、

大方にやは哀ともきく。

諸聲は劣まじくこそ」とあれど、餘り情立んも煩し。一所(父)の御蔭に隠へたるを頼み所にてこそ、何事も心安くて過しつれ。心より外に生存て、意外なる事の紛れ露にてもあらば、不安氣にのみ思し置めりし、亡き御魂にさへ疵や付け奉らんと、凡て甚憚しう恐うて聞え給す。此宮(匂)などをば、軽らかに一般の如にも思ひ聞え給す、苟の走り書い給る御筆使ひ、言の葉も美き體に優雅さ給る御氣色を、數多は見知り給ねど、是こそは愛たきなめれと見給ながら、其の趣致しく風情ある方に、言を交ぜ聞んも、似なき身の有様ともな

れば、何か只、斯る山伏立て過してんと思す。中納言殿の御返事はかりは、彼よりも質實なる體に聞え給ば、是よりも甚氣疎氣にはあらず、聞え通ひ給ふ。御忌(五十)果ても、自身參で給り。東の廂の下りたる方に裏れて在するに、近う立寄り給て、老人召出たり。闇に惑ひ給る御邊に、甚眩く香ひ満て入り在したれば、傍痛うて御答などをだに得し給ねば、薫斯様には遇い給て、昔の御心向に隨ひ給ん如ならんこそ聞え承る効あるべけれ。柔び氣色はみたる舉動を慣ひ侍ねば、人傳に聞え侍るは、言の葉も續き侍らず」とあれば、大「淺ましう今まで生存へ侍るやうなれど、思ひ覺さん方なき昔に惑れ侍りてなん、心より外に空の光見侍らんも憚しうて端近うも得身動き侍らぬ」と聞え給れば、薫事と言は限なき御心の深さになん。月日の影は、御心もて晴しう持出でさせ給ばこそ、罪も侍らめ。行く方もなく慥う覺え侍り。又思さるらん端々をも、明め聞えま欲くなん」と申し給ば、女實にこそ甚類なげなめる御有様御懇情の淺からぬ程」など女房聞え知す。御心地にも、然こそ言へ漸う心鎮りて萬思ひ知れ給ば、從前にて斯まで遙けき野邊を分入り給る志なども、思知り給へし。少し膝行寄り給へり。思すらん様、又宣ひ

契し事など、甚細やかに懐しう言て、憂て雄々しき氣色などは見え給ぬ人なれば、氣疎く漫はしくなどはあらねど、知ぬ人に斯く聲を聞せ奉り、漫に頼み貌なる事なども、過つる日来を思ひ續るも、有繫に苦うて憚しけれど、微に一言など答え聞え給ふ様子の、實に萬思ひ恍惚給る氣色なれば甚哀と聞き奉り給ふ。黒き几帳の透影の甚心苦しげなるに、況て在すらん體、微見し曉昏など思出られて、

薰色變る淺茅を見ても墨染に、

裏る袖を思こそすれ。」

と獨語の如に宣へば、

大「色變る袖をば露の宿にて、

我身ぞ更に置所なき。」

脱解る糸は」と、末は言消て、最甚しく忍び難き氣色にて入り給ぬなり。引留めなどすべき程にもあらねば、飽ず哀に覺ゆ。老人を此上なき御代りに出來て、昔今を掻集め悲き御物語ども聞る。有難く驚異しき事どもを見たる人なりければ、斯う奇う衰たる人とも思し捨られず、甚懐しう語ひ給ふ。薰幼

すみぞめに
服者の袖の露
を思ひやると
なり

色かける
露は我が袖を
宿りとはすれど
我身は置かんと
なり
はつる糸は
一藤衣はつる
の糸はわびる
とぞ成ぬる緒

母君も
辨のいとこな

稚かりし程に故院(源氏)に後れ奉りて、甚う悲きものは世なりけりと思ひ知にしかば、人と成行く齡に添て、官位、世中の榮華も何とも覺すなん。只斯う閑寂なる御住居などの心に適ひ給りしを、斯く果敢く見做し奉りつるに、愈甚じく、假初の世思ひ知る、心も催されにたれど、心苦しうて留り給る御事ども、絆など聞んは慮外しきやうなれど、永久ても彼(宮八)の御遺囑誤たず、聞え承らま欲きになん。然は意外き御古物語聞しより、甚ど世中に跡留んとも覺す成にたりや」と打泣つ、宣へば、此人は況て甚く泣て得も聞やらず。御様子などの只(柏木)かと肖え給ふに、年來打忘れたりつる古(柏木)の御事をさへ取重ねて、聞え爲ん方もなく涙居たり。此人(辨)は、彼の大納言(木)の御乳母子にて、父は此姫君達の母北方の母方の叔父、左中辨にて亡にけるが娘なりけり、年來遠き國に彷徨れ、母君(姫君)も亡せて後、彼殿(致仕)には疎くなり、此宮(宮八)には尋ね取て在せ給なりけり。人も甚貴からず、宮仕馴にたれど、心地なからぬ者に宮も思して、姫君達の御後見だつ人に爲し給るなりけり。昔の御事は、年來斯く朝夕に見奉り馴れ、心隔る限なく思ひ聞る君達にも、一言打出で聞る序なく忍び籠たりけれど、中納言の君(薰)は、老人の

推本

皆人のとはず
老のものは
がたりはあり
がちなものな
ればなり
もてはなれて
身の上をきか
し姫君たち
疎遠にはな
れどやはは
れ八月と九
月同
じ三秋の中
なり

かういと埋も
れたる
姫君達の心な
り

おくれ先だつ
一末の露も
の雫や世の中
の後れ先立つ
ためしなるら
ん

例見ぬ
八宮おはしま
さねば人の聲
するも恐ろし
きとなり

ありがたき
ありの切
などの説も
きよか
べしにか
何しにか
八宮なき
なり

不問語皆例の事なれば、一般て輕率しうなどは言擴すとも、甚憚しげなる御
心どもには聞置き給らんかしと推量るゝに、憾くも最惜くも覺るにぞ、又疎
隔ては止じと思ひ寄るゝ端にも成ぬべき。今は旅寝も漫なる心地して、歸り
給にも、是や限のなど宣しを、何か然しもやはと打頼みて、再見奉らず成に
けん秋やは異なる、數多の日數も隔ぬ間に、在しにけん方も知ず敢なき事な
りや。殊に例の人めいたる御装置なく甚簡略給めりしかど、甚物清げに搔き
掃ひ邊趣致く造作し給りし御住居も、大徳達出入り、此方彼方引隔つゝ、御
念誦の具どもなどぞ變ぬ體なれど、佛は皆彼の寺に移し奉りてんとすと聞る
を聞き給にも、斯る體(僧)の人影などさへ絶え果ん程、留りて思ひ給ん心地と
もを汲み聞え給も、甚胸痛う思し續ける。供「甚く暮れ侍りぬ」と申ば、眺め
止て立ち給ふに、雁啼て渡る。

薰秋霧の晴ぬ雲居に甚どしく、

此世をかりと言ひ知すらん。」

兵部卿宮に對面し給ふ時は、先づ此君達の御事を扱ひ種にし給ふ。今は然
とも心安きと思して、宮(匂)は懇に聞え給けり。些き御返事も聞え難く憚し

き方に、女方は思ひたり。世に最甚う好色給る御名の廣ごりて、好しく艶に
思さるべかめるも、斯う甚理れたる葎の下より差出たらん手容も、如何に初
初しく古めきたらんなど、思ひ屈し給り。扱も淺ましうて、明暮さるゝは月
日なりけり。斯く頼み難かりける御壽を、今日明日とは思で只大方定なき果
敢さばかりを、明暮の事に聞き見しかば、我も人も、後れ先立つ程しもやは
經んなど打思けるよ。過去を思ひ續るも、何の頼もしげなる世にもあらざ
りけれど、只何時となく悠閑に眺め過し、物怖しく憚しき事もなくて經つる
ものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影も打連れ聲作れば、先づ胸潰れて物
怖しく佗しう覺る事さへ添にたるが、甚う堪へ難き事と、二所打話つゝ、
干す世もなく過し給に、年も暮にけり。雪霰降頻く頃は、何處も斯こそは
ある風の音なれど、今初て思ひ入たらん山住の心地し給ふ。女們など、女噫
年は更りなんとす。心細く悲き事を、改るべき春待出てしがな」と、心を消
す言ふも、有難き事かなと聞き給ふ。向の山にも、時々御念佛に籠り給し
故こそ、人も參り通しか、阿闍梨も如何と、大方に稀に訪れ聞れど、今は何
しにかは仄さ參らん。甚ど人眼の絶え果るも然べき事と思ながら、甚悲くな

ん。何とも見ざりし山賤も、在さで後邂逅に差覗き参るは、珍く覺え給ふ。此頃の事とて、薪木の實拾て参る柚人どもあり。阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて、阿年来に慣ひ侍りにける奉仕の、今はとて絶え侍んが心細きになん」と聞たり。必ず冬籠る山風防つべき綿衣など遣し、を思し出て遣り給ふ。法師們童などの登り往くも見み見ずみ甚雪深きを、泣々立出て見送り給ふ。「御髪など剃い給ても、然る方にて在さましかば、斯様に通ひ参る人も自然繁からまし。如何に哀に心細くとも、逢見奉る事絶て止ましやは」と語り給ふ。

大「君なくて岩の岨道絶しより、

松の雪をも何とかは見る。」

中「奥山の松葉に積る雪とだに、

消にし人を思ましかば。」

羨しくぞ又も降添ふや。中納言の君(薫)は、新き年は、偶としも得訪ひ聞ざらんとおぼして、在したり。雪も甚ど白きに、一般き人だに見ず成にたるを、尋常ならぬ氣色して軽らかに在じ給る懇情の、淺うはあらず思ひ知れ給れば、

いかにあはれに宮の山居しておはしまさば

八宮をいへり山へ人を通はし給ふこと

のまれのなるはなれ給ふこと

なり宮の松の雪は

故宮の松の雪は

し宮の松の雪は

は宮の松の雪は

君は宮の松の雪は

奥山の松の雪は

落ちては雪は

きもなれど

又ふりそふ

とあり消え

し人の歸り

ざるを打わり

たるなり

すみぞめなら

ぬ者の具は

服も黒塗の

無地なれば

ならぬを

つれなき

姫君たちの

まなり

さとのしる

一海士の住

里のしるべ

あらなくに

らみんと

人のいふ

例よりは見入て御坐など引粧せ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取出て塵搔き掃などするに就ても、宮(八)の待ち悦び給し御氣色などを、女房も聞え出づ。對面し給ふ事をば憚しくのみ思たれど、同情なきやうに人(薫)の思ひ給れば、如何はせんとして聞え給ふ。打解くとはなけれど、前々よりは少し言葉續て物など宣る體、甚見易く尊貴けなり。斯様にてのみは得過し果まじと思成り給も、甚現當なる心かな。仍移ぬべき世なりけりと思ひ居給り。薫(宮)の甚奇く恨み給ふ事の侍るかな。哀なりし御一言を承り置し事など、事の序にもや洩し聞たりけん。又甚隈なき御心の性にて推量り給ふにや侍ん。爰(薫)になん兎も角も聞させ做べきと頼むを、強面き御氣色なるは、妨碍ひ聞るぞと度々怨じ給ば、心より外なる事と思ひ給れど、里の案内甚此上なうも得争ひ聞ぬを、何かは甚然しも冷遇し聞え給らん。好色給るやうに人は聞え做すべかめれど、心の底奇う深う在する宮なり。等閑言など宣ふ邊の、心輕うて靡き易なるなどを珍からぬものに思ひ貶し給にやとなん、聞く事も侍り。何事にも有に隨て我意を立る方もなく寛濶たる人こそ、只世の待遇に從て、兎あるも角るも普通に見做し、少し心に違ふ節あるにも如何はせん

くづれそめて
おほどかなら
ぬ女のさまを
いへり些か心
にかなはぬ事
ありとて男を
恨みて背くこ
とあればなき
と神なびのみ
むろの岸やみ
づるの立田濁
の川の水の濁
れる事多くな
ど背く事多くな
たれにも従ひ
て背かぬとい
ふ人はなけれ
ば背くこと多
かりぬといへ
人の見奉りし
らぬ見奉りし
親しければ人
のしれぬ句の
性格もよくし
りたりとなり
人の親めきて
こゝ上の一さ
りとして一の意
かけくしげ

然べきぞなども思はずべかめれば、却々心長き例に成る様もあり。毀れ初ては立田の川の濁る名をも汚し、言ふ効なく名残なきやうなる事なども皆打交るめれ。心の深く染み給へかめる御性格に適ひ、殊に背く事多くなど在し給ざらんをば、更に軽々しく始終違やうなる事など、見せ給まじき氣色になん。他の見奉り知ぬ事を、甚熟う見聞たるを、若し似合しく、然もやと思し寄ば、其媒介などは心の限盡して仕奉りてんかし。御媒の程、往返足こそ痛からめ」と、甚深切にて言續け給ば、我御自身の事とは思しも懸ず。人の親めきて答んかしと、思し廻し給ど、仍言べき言葉もなき心地して、大い如何にとかは、意外しげに宣ひ續るに、却々聞ん事も覺え侍らで」と、打笑ひ給るも、穩なるもの乍氣色可憐う聞ゆ。薫必ず御自身聞召し負べき事とも思ひ給ず。其は雪を踏分て、參り來たる志ばかりを御覽し分ん御兄心にて、過ぎさせ給てよかし。彼(句)の御心寄は、又殊(中)にぞ侍かめる。微に宣ふ體も侍めりしを、否や其も人の分き聞え難き事なり。御返事などは、何方にかは聞え給ふ」と、申し給ふに、好ぞ戯れにも聞ざりける。何となけれど斯う宣ふにも、如何に恥う胸潰れましと思ふに、得答へやり給ず、

に思ひもよらぬ
事なり
それなり
姉君へか妹君
へか知り得ず
とたり
何方にかは
いづれより句
へ御返事はあ
りしぞとなり
たはぶれにて
も中君に返事せ
させしをよう
ぞせしと大君
の思はるゝ大
ふみ通ふ
文かよふに
けたり君なら
でとは薫へば
かり書きて參
らするとなり
おんものあら
がひは文もか
句へはぬと大
よはぬと大君
の申さるゝを
まづや
句をしるべが

大、雪深き山の棧君ならで、

又踏通ふ跡を見ぬかな。

と書て差出で給れば、薫御辨解こそ却々心隔れ侍ぬべけれ」ととて、

薫「氷柱閉ぢ駒踏荒く山河を、

嚮導しがてら先や渡らん。

然ばしも、影さへ見る驗も淺うは侍らじ」と聞え給ば、意外に不快うなりて殊に答へ給ず。顯著に甚物遠く縮みたる體には見え給ねど、今様の若人達の如に艶氣にも舉止で、甚見易く悠揚なる性格ならんとぞ、推量れ給ふ人(大)の御様子なる。斯こそは有ま欲けれど思に違ぬ心地し給ふ。事に觸て氣色ばみ寄るも、不知貌なる體にのみ應對し給ば、心恥しうて、昔物語などをぞ懇切に聞え給ふ。供「暮れ果なば雪甚ど空も閉ぬべう侍り」と、御供の人々聲作れば、歸り給なんとして、薫心苦う眺め暮さるゝ御住居の體なりや。只山里の如に甚閑なる所の人も往交らぬ所に侍るを、然も思し懸ば如何に嬉しく侍らんしなど宣ふも、甚愛たかるべき事かなと、片耳に聞て打笑ひ女們のあるを、中君は甚見苦う、如何に然様には有べきぞと見聞き居給へり。御菓物趣ある

てらこの檢し
き道を分けて
先づ河をわ
たり河をわ
たるとは人
逢ふことはい
かげさへ見ゆ
る
「浅香山か
さへ見ゆる山
の井のあさき
心はわが思は
なく思はるは
句宮のためは
すなり浅くは
侍らじとなり
た山里のや
うに
薫の京の住居
のさまを申さ
るなり
かづらひけ
かづらひけ
たる如きひげ
をいふひげの
多きなるべし
立よらん
この歌を以て
巻のなをす

體にて参り、御供の人々にも肴など見易き程にて、土器差出させ給けり。彼の御移香評判れし宿直人ぞ、鬢鬚とかいふ面容、厭くてある。些な御頼し人やと見給て、召出たり。薫如何にぞ在さで後、心細からん」など問ひ給ふ。打鬘つゝ心弱氣に泣く。宿中頼む寄邊も侍らぬ身にて、一所(宮)の御蔭に隠て、世余年を過し侍にければ、今は況て野山に交り侍んも、如何なる木の下をか頼むべく侍ん」と申て、甚ど外観悪げなり。在し、方啓させ給れば、塵甚う積りて、佛のみぞ花の飾、衰ず。誦經ひ給けりと見る御床など、取破て掻き拂たり。本意をも遂ばと契り聞し事思出て、
薫 立寄ん蔭と頼し椎が本、
空き床に成にけるかな。」

ふ。聖僧の坊より、阿雪消に摘て侍るなりとて、澤の芹、峯の蕨など奉りたり。齋の御台に参れる。女所に就ては斯る草木の氣色に隨て、往交ふ月日の證も見るこそ興しけれ」など女房の言ふを、何の興しきならんと聞き給ふ。
大「君が折る峯の蕨と見ましかば、
知れやせまし春の證も。」
中「雪深き汀の水誰が爲に、
摘か映さん親なしにして。」

とて柱に寄り居給るをも、若き女房は視て見奉る。日暮ぬれば、近き處々に御莊など仕奉る人々に、御秣取りに遣ける。君(薫)も知り給ぬに田舎びたる人、夥しく引連れ参りたるを、奇う顯露き事かなと御覽すれど、老人に紛し給つ。大方斯様に仕奉るべく仰せ置て出で給ぬ、年更りぬれば、空の氣色麗なるに、汀の氷解け渡るに就ても、斯まで生存けるも有難くもと咄め給

行ふ山の推が
もとあなそ
しあらねど
の本歌につ
てのうばそ
宮の在せし
を頼みし給
出家し給は
と頼みし給
ありしを空
きよとなり
みまこに
今宵ここに
留まる人御
御所の人御
行所の人御
とり馬の秣
なりやりに
なべし
はしな
れのしな
れの人を
くの人を
れの人を
おのし
辨に
て来し
紛はさ
り来し
以方か
以來も
かかく
御に

など微き事を打語つゝ、明暮し給ふ。中納言殿(薫)よりも宮(匂)よりも、打過さず見舞ひ聞え給ふ。煩く何となき事多かるやうなれば、例の書き洩したるなめり。花盛の頃、宮(匂)挿頭を思し出て、其折見聞き給し君達なども、甚趣ありし親王の御住居を再も見ず成にし事など、大方の哀を口々聞るに、甚床しう思されたり。
匂「傳に見し宿の櫻を此春は、
霞隔ず折て挿頭む」
と心を満て宜へりけり。有まじき事かなと見給ながら、甚徒然なる程に、見

所ある御女の表面ばかりを持て消じとて、

中「何處とか尋て折ん墨染に、

霞籠たる宿の櫻を。」

用の折は參れ
とたり
ありがたくも
姫君達の心な
り宮に後れて
片時もながら
ふべきもの
も思はざりし
を思の外にと
なりふしぎと
いふほどの
意、今の悉し
れり
君が折る
八宮の在世に
てそなたより
給へらばいか
にかひあらま
しとなり
つみかはやさ
ん
井をも親に奉
ける爲につむ
爲にとなり
君たち
句宮の御供に
参りし人たち
をりてかざ
む
中君を我がも

仍斯く差放て難面き御氣色の見れば、眞に心愛しと思し渡る。御心に餘り給ては、只中納言(薫)を右方左方に責め恨み聞え給ば、可笑と思ながら、甚確保たる後見顔に打答へ聞て、仇めいたる御心體をも見顯す時々は、薫如何でか斯らんには「など申し給ば、宮も御注意し給ふべし。句心に適ふ邊を未だ見付ぬ間ぞや」と宣ふ。大殿(霧)の六の君を、思し入ぬ事、生恨しげに大臣(霧)も思したりけり。然ど床しげなき間なる中にも、大臣(霧)の事々しく煩しくて、何事の紛をも見答られんが煩しきと、内密には宣ひて角力以給ふ。其年三條宮焼て、入道宮(女)も、六條院に移ひ給ひ、何彼と物騒しきに紛て、宇治の邊を久う訪れ聞え給す。實體なる人の御心は又甚殊なりければ、甚悠閑に己がものとは打頼みながら、女の心緩び給ざらん限は、戯ればみ情なき體に見じと思つ、昔の御心忘ぬ方を、深く見知り給へと思す。其年例よりも暑きを入々侘るに、河面涼からんはやと思出で、俄に參で給り。朝涼の程に

のにとなり
すみぞめ
へり霞隔てず
とありしにむ
かへて霞こめ
がたきよしを
いへり
ゆかしげなき
余りよく知悉
しあひたる親
族間の義なり
六の君は句の
宮の母方にこ
きたるいとこ
なり
まめやか
このまめやか
さより大君を
も取外さるゝ
なり句のさる
方にいち早き
に對へ書きた
昔の御たの
みありしこと
を忘れぬさま
をだけ見せて
好色の方とは
見えぬやうに
用意あるなり

出で給ければ、生憎に射來る日影も眩くて、宮(宮)の在せし西の廂に、宿直人召出で在す。其方の母屋の佛の御前に君達(達)在し給けるを、氣近からしとて我御方に渡り給ふ御氣息忍たれど、自然打身動き給ふ程近く聞ければ、仍有じに、此方に通ふ障子の端の方に鏝したる所に、穴の少し明たるを見置き給りければ、外に立たる屏風を引遣て見給ふ。爰許に几帳を添へ立たる。噫口惜と思て引返る折しも、風の簾を甚う吹き上べかめれば、女「顯著にもこそあれ。其几帳押出でこそ」といふ女房あなり。愚がましきもの、嬉うて見給ば、高さも短さも几帳を二間の簾に押寄せて、此障子に對て、啓たる障子より彼方に通ふとなりけり。先づ一人(中)立出で、几帳より差覗て、此御供の人の兎角往違ひ涼み合るを見給ふなりけり。濃き鈍色の單衣に、萱草の袴の映發たる、却々體異りて花やかなりと見るは、着做し給る人柄なめり。帯些げに爲做て、珠數引隠て持給り。甚聳然に容體美しげなる人の、髮桂に少し堪ぬ程ならんと見て、末まで塵の亂雑なく、艶々と過多う美しげなり。側面など噫可愛氣と見て、艶麗氣に柔婉に寛濶たる様子、女一宮も如斯に在すべきと、微見奉りしも思ひ較られて打嘆息る。又膝行出で、大「彼の障子は

總角

ぬぎすて給ふ
喪服を脱が
るとぶらひ
る名香の糸
を紙につみ
て五色の糸
に結びかけ
佛に奉るな
りかてても
一身を愛し
思ふにきえ
ものなれは
もくもへぬ
けるにぞぬ
は經ぬるに
の縁なる糸
をかけたる
るは糸をあ
せよること
な

數多年耳馴れ給にし川風も、此秋は、甚頼なく哀愁しくて、御周忌の事準備せ給ふ。大方の有へかしき事どもは、中納言殿、阿闍梨などを仕奉り給ける。爰(姫)には、法服の事、經の飾、細なる御扱ひを、人の聞るに隨て營み給ふも、甚物果敢く哀に、斯る他の御後見なからましかばと見たり。自身も參で給て、今はと脱捨て給ふ程の御見舞、淺からず聞え給ふ。阿闍梨も爰に參れり、名香の糸引亂りて、斯ても經ぬるなど打語ひ給ふ程なりけり。結び上たる絲柱の、簾の端より几帳の綻に透て見ければ、其事と心得て、薰「我泪をば玉に貫なんと、打誦し給る伊勢の御も、斯こそは有けめ」と興しう聞るも、内の人(姫)は聞知り貌に差答へ給んも憚しくて、物とはなしにとか、貫之が此世ながらの別をだに、心細き筋に引懸けんをなど、實に故事ぞ、人の心を述る便なりけるを思出で給ふ。御願文作り、經佛供養せらるべき用意など、書出で給る硯の序に、客人、

薰「總角に長き契を結び籠め、

同じ所によりも合なん。」

と書て見せ奉り給ば、例のと頼ければ、

大君「貫も敢ず脆き涙の玉の緒に、

長き契を如何結ん。」

とあれば、薰逢ずば何を」と恨しげに眺め給ふ。自身(薰)の御上は、斯く何となく持消て憚し氣なるに、早速とも得宣ひ寄で、宮(匂)の御事をぞ懇に聞え給ふ。薰然しも御心に入まじき事を、斯様の方に少し進み給る御本性にて、聞え初め給けん負し魂にやと、右方左方に甚熟なん御氣色見奉る。眞に不安うは有まじげなるを、何ど斯う強ちにしも疎隔れ給らん。世の有様など思し分まじくは見奉らぬを、憂て遠々しくのみ遇せ給ば、斯ばかり二心なく頼み聞る心に違て恨しくなん。兎も角も思し分らん體などを明瞭に承りにしがな」と、甚懇立ちて聞え給ば、大「違へ聞じの心にてこそは、斯まで微き世の例なる有様にて隔意なく遇し侍れ。其を思し分ざりけるこそは、淺き事も交りたる心地すれ。實に斯る住居などに、心あらん人は思ひ残す事あるまじきを、何事にも鈍れ初にける中に、此の宣める筋は、古も更に決て兎あらば角らばなど

總角

我が涙をば
用給へる香
と齋の心得
申さるゝなり
てを糸にして
が涙をば玉に
貫かなん七
給へる時伊勢
ば伊勢がそれ
やありけん
後とはなしに
別れ路の心細
かにも思ほゆる
此世ながらの
貫之は生別を
さへひしやう
宮に死別なれ
ばと死別なれ
よりも
寄り糸を結

この歌にかけたり
大君をあげま
り健馬樂にいへ
「あげまき八
尋ばかりや退
りて寝たれど
もまろび合ひ
にけりか寄り
合ひにけり
や「糸のさが
りたるを人の
さがりて寝た
るにかけた
るにかけた
（か寄るの
は發語にて意
味なし）
あはれをこな
一片糸をこな
たかかたによ
りかかてあは
ずば何を玉の
緒にせん一糸
の縁にとり出
でたるべし命
ありても逢は
ずは詮なしと
なり
さしも御心に
入るまじきこ

行末の希望事に取交て、宣ひ置く事もなかりしかば、仍斯る體にて情付たる
方を思ひ絶へく思し掟てげるとなん思合せ侍れば、兎も角も聞ん方なくて。
然は少し世籠りたる齡にて、深山隠れには心苦う見え給ふ人（中）の御上を、甚
斯く朽木には成し果すもがなと、人知ず扱はしう覺え侍れば、如何なるべき
世にかあらん」と打嘆息て、煩悶れ給ける程の氣色、甚哀げなり。顯著に
大人びても、如何でかは賢しがり給んと道理にて、例の老人（辨）召出てぞ語ひ
給ふ。薰年來は、只後世方の交情にて進み参り初しを、物心細氣に思し成め
りし御末の頃ひ、此御事どもを、心に任せて扱し聞へくなん宣ひ契りてし
を、思し掟て奉り給し御有様どもには違て、御意思どもの甚生憎に物強げな
るは、如何に思し遺つる方の事なるにやと、疑しき事さへ添てなん。自然聞
き傳へ給やうもあらん。甚奇き本性にて、世中に心を染る方なかりつるを、
然べきにてや斯までも聞え馴にけん。世人も漸う言做す様あるべかめるに、
同うは昔（八）の御言も違へ聞ず。我も人も尋常に心解て聞え通ばやと思寄る
は、似なかるべき事にても然様なる例なくやはある」など宣ひ續けて、薰宮
（句）の御事をも斯う聞るに、不安うはあらじと打解け給ふ體ならぬは、内々に

とを
句の宮の好色
の方に進みた
る心のさまな
り
萬事燕の深き
ありさまなが
らの意なり
かゝる住居
たる閑なる
居には萬を思
ひしるべきと
宣ふめる筋
縁邊の事なり
「山がくれ
みかたがくれ
の朽木なれ心
は花になさば
上の句をと
たり
さかしが
俗に「せわを
や「御事
御縁邊のこと
をな
御有様
八宮のなり

然とも思し向たる事の様あらん、仍如何に如何に」と打眺つ、宣へば、辨例
の悪びたる女房などは、斯る事には憎き賢ら言交て、事依がりなども爲める
を、甚然はあらず。心（辨）の中には、有ま欲かるべき御事どもをと思ど、辨元
より斯く人に違ひ給る御癖どもに侍はにや、如何にも「普通に、何や彼や
など思ひ寄り給る御氣色になん侍ぬ。斯て侍ふ是彼も、年來だに何の頼しげ
ある木の下の隠へも侍ざりき。身を捨て難く思ふ限は、分際々々に就て罷出
散り、昔の古き由縁なる人も多く見奉り捨たる邊に、況て今は暫時も立留り
難げに佗び侍りつ、在し、世にこそ、限ありて、不充分ならん御有様は最
惜くもなど、古代なる御嚴格さに思しも滞りつれ。今は斯う又頼みなき御身
どもにて、如何にも「世に靡き給らんを、強ちに非り聞ん人は、却りて物
の意をも知す言ふ効なき事にてこそはあらめ。如何なる人か、甚斯て世をば
過し果て給へき。松の葉を食て勤むる山伏だに、生る身の捨て難さによりて
こそは、佛の御教をも、道々分ては行ひなすなれなどやうの、良らぬ事を聞
え知せ、若き御心ども擾れ給ぬべき事多く侍るめれど、撓むべくも在し給ず。
中の君をなん、如何で人めかしうも扱ひ做し奉らんと、思ひ聞え給へかめる。

總角

せかしら
 ことより
 任の事なれば
 もどかしが
 てとりまかな
 はむしするな
 るべし
 らまほしか
 八君を薫へ中
 君を匂宮へと
 たり
 たるもしげあ
 一侘人のわき
 下は頼むか
 なくならにけ
 るかな
 八宮のなりし
 限ありてかた
 賑はしくとも
 方領などの北
 思されしなり
 道々分れては
 世捨人といへ

斯く山深う尋ね聞させ給める御志の、年経て見奉り馴れ給る氣色も、疎な
 らず思ひ聞させ給ひ、今は右方左方に、細なる筋に聞え通ひ給めるに、彼の
 御方(中)を、然様に赴けて聞え給はとなん思すべかめる。宮(匂)の御文など侍
 るめるは、更に眞實しき御事ならじと侍るめる」と聞れば、薫、哀なる御一言
 を聞き置き奉りにしかば、露の世に繋はん限は聞え通ん心あれば、何方に
 も見え奉ん同事なるべきを、然まで將た思し寄るなる、甚嬉き事なれど、
 心の引く方なん、斯ばかり思ひ捨る世に、仍留りぬべきものなりければ、改
 て然は得思ひ直すまじくなん。普通に艶治なる筋にもあらずや。只斯様に物
 隔て、事残いたる體ならず對座て、兎に角に定なき世の物語を隔なく聞て、
 憚み給ふ御心の隈残す遇し給んなん。同胞などの然様に、睦き齡なるもなく
 て、甚淋々しくなん。世中の思ふ事の、哀にも興しうも憂しうも、時に就た
 る有様を心に籠てのみ過る身なれば、有繋に便なく覺るに、疎かるまじう頼
 み聞る後の宮(明石)將た、馴々しう然様に何となき、思の儘なる冗煩しさを、
 聞え觸べきにもあらず。三條宮(女)は、親と思ひ聞べきにもあらず御若々しさ
 なれど、限あれば容易く馴れ聞させずかし。其他の女は、惣て甚疎く憚しう

ども皆身命の
 捨てがたきに
 なほ名利を貪
 りて佛の教へ
 をも我が道々
 を立て行ふ
 となり
 かの御方を
 中君をと薫の
 望み給はす大
 君の許し申す
 べきとなり
 心のひく方
 大君を思ふ心
 なり
 改めて
 大君をさし心
 を移すことな
 り
 能はずとな
 り
 もてなし給は
 るん
 うれしかるべ
 きの意をこめ
 たり
 打かしてやは
 まへなり見た
 ざ
 あざやかなら
 ず
 薫のさだかに
 は申されねど

恐う覺て、心から所縁なく心細きなり。等閑の戯にても、懸想立ちたる事
 は甚眩く有着ず不合せ骨々しさにて、況て心に染たる方の事は打出る事も難
 くて、恨しうも恨くも思ひ聞る氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なく
 頑しき事なれ。宮(匂)の御事をも、然とも惡方には聞じと、任せてやは見給
 ぬ」など言ひ居給り。老人(辨)將た斯許心細きに、有ま欲げなる御有様を、甚
 切に然も有せ奉らばやと思と、何方(大君)も尊貴げなる御有様どもなれば、
 思の隨には得聞す。今宵は宿り給て物語など悠閑に聞ま欲うて、猶豫ひ暮し
 給つ。鮮ならず物恨み勝なる御氣色、漸う理なく成り行ば煩しうて、打解て
 聞え給ん事も愈苦しけれど、大方にては有難う、懇篤なる人の御心なれば、
 此上なうも遇し難うて對面し給ふ。佛の在する中の戸を啓て、御燈明の燈顯
 著に掲させて、簾に屏風を添てぞ在する。外にも大殿油參すれど、薫、惱しう
 て無禮なるを、顯露に「など拒止て、側臥し給り。御菓物など、殊とはなく
 爲做て參せ給り。御供の人々にも趣致しき肴などして出させ給り。廊めいた
 る方に集りて、此御前は人氣遠く用意して、静寂と物語聞え給ふ。打解く可
 うもあらぬもの乍、懐しげに愛嬌付て物宜へる體の、斜ならず心に入て思ひ焦

總角

も事のほづれはづれに恨め
 しがなれる心
 ことなり
 外にも
 薫の居らるゝ
 處なり
 へだてなきと
 隔心なきやう
 と度々申され
 てたゆめおき
 られたち事さ
 らるゝ大君の
 恨まるゝなり
 珍かなりとも
 なりともはな
 りとはの意な
 ちかごととも
 必ず無理わざ
 はせじとなり
 世にたがへる
 しかくばかり
 もなきは世親
 たがへるしれ
 ものとなり

るゝも果敢し。斯く程もなき物の間隔ばかりを障碍所にて、疎遠く思つゝ過
 す心遅さの、餘り愚がましうもあるかなと思ひ續らるれど、冷静て、大方の
 世中の事ども哀にも興しうも、種々聞所多く語ひ聞え給ふ。内には、大「女房
 近う」など宣ひ置つれど、然しも疎隔れ給さならんと願ふべかめれば、甚し
 も目成り聞ず。差退きつゝ皆倚臥て、佛の御燈火も搔上る人もなし。危惧う
 て、忍て人召せど覺眠す。大「心地の搔き亂り惱う侍るを、休息て曉方にも又
 聞ん」とて、入り給なんとする氣色なり。薫山路分け侍つる人(身)は況て甚苦
 けれど、斯う聞え承るに慰めてこそ侍れ。打捨て入せ給なば、甚心細から
 ん」とて、屏風を徐ら押啓て入り給ぬ。甚怖うて、半ばかり入り給るに引留
 められて、甚う憾う心愛ければ、大「隔心なきとは斯るをやいふらん。珍なる
 事かな」と詆め給る體の愈美しければ、薫「隔ぬ心を更に思し分ねば、聞え知
 せんとぞかし。珍なりとも、如何なる方に思し寄るにかはあらん。佛の御前
 にて誓言も立て侍らん。轉な怖させ給そ。御心破じと思ひ初て侍れば、人は
 斯しも推量り思まじかめれど、世に違る痴者にて過し侍るぞや」とて、奥床
 き程なる灯影に、御髮の零れ垂りたるを搔遣つゝ見給ば、人の御姿容思ふ如

さはり所
 かゝる處に近
 よる人あらば
 我が如き者に
 あらぬ限りは
 ありふしとな
 見あらはし
 けてなり
 開えさせん方
 薫のなり
 袖の色を見せ
 らはされしな
 ど申されしを
 いかへり
 なかくなる
 御わきまへ心
 自らのいふか
 ひなきも思ひ
 しらすと大
 君の申されし

に風情美しげなり。薫斯う心細う淺ましき御住處に、好色たらん人は障碍所
 あるまじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、然でや止なまし。
 如何に口惜き事ならまし」と、過去の心の猶豫さへ危く覺え給と、言ふ効な
 く憂しと思て泣き給ふ氣色の甚最惜ければ、斯くはあらで、自然心緩びし
 給ふ折も有なんと思ひ渡る。理なきやうなるも心苦しくて、體好く嘆へ聞え
 給ふ。大「斯る御心の程を思ひ寄で、奇きまで聞え馴にたるを、忌々しき袖の
 色(鈍)など見現し給ふ浮薄さに、自身の言効なさも思ひ知るゝに、種々慰む
 方なく」と恨て、用意もなく妻れ給る墨染の灯影を、甚耻く佗しと思ひ惑
 ひ給り。甚斯しと思さるゝやうこそはと憚しきに、聞させん方なし。薫袖の
 色を引掛させ給はしも道理なれど、許多御覽し馴ぬる志の効には、然ばか
 りの嫌忌置べく、今初たる事めきてやは思さるべき。却々なる御辨別心にな
 ん」とて、彼の物の音聞し有明の月影より初て、折々の思ふ心の忍び難く成
 行く體を、甚多く聞え給ふに、耻うもありけるかなと疎しう、斯る意志なが
 らつれなく懇だち給けるかなと、聞き給ふ事多かり。御傍なる短き几帳を佛
 の御方に差隔て、假初に倚臥し給り。名香の甚香しく香ひて、櫛の甚花やか

こゝろいられ
短氣なるやう
思ひそめしに
初めの志にな
皆入りぬ
薫と二人居ら
るれば遠慮し
て奥へ入りた
るべし
その音に流れ
「邊風吹驟秋
心緒、瀧水流
添夜涙行、大
江匡衡、宇治
の山里のさま
思ふべし
馬どものいば
ゆる
「征馬連嘶行
人出、白氏文
集、
旅の宿
驛路のさまな

に香れる様子も、人よりは勝に佛をも思ひ聞え給る御心にて煩しく、墨染の、
今更に折節焦躁したるやうに輕率しう、思ひ初しに違べければ、斯る忌な
らん程に、此御心にも然とも少し撓み給なんなど、切て悠長に思做し給ふ。
秋の夜の風情は、斯らぬ所だに自然哀多るを、況て峯の嵐も籬の虫も、心
細氣にのみ聞き渡さる。常なき世の御物語に、時々應答へ給る體、甚見所多
く見易し。貪睡りつる女房は、斯なりけりと氣色取て皆入ぬ。宮(八)の宣し事
など思し出るに、實に生存は意外に、斯く有まじき事も見るべき事にこそは
と、物のみ悲うて、水の音に流れ添ふ心地し給ふ。果敢く曉方に成にけり。
御供の人々起て聲作り、馬どもの嘶るをも、旅の宿の有る様など人の語るを
思し遣れて、興しう思さる。光見つる方の障子を押啓け給て、空の哀なるを
諸共に見給ふ。女も少し膝行出で給るに、程もなき軒の近さなれば、葱の露
も漸う光見えもて行く。互に甚艶なる容姿どもを、薫何とはなくて只斯様に、
月をも花をも同心に弄び、果敢き世の有様を聞え合せてなん過さまほしき
と、甚懐しき體して語ひ聞え給ば、漸う恐さも慰みて、大「斯う甚顯露からで物
隔てなど聞えば、眞に心の隔は更に有まじくなん」と答へ給ふ。明く成り行

今だに
明かにはて
いかにばづ
しからんと
るにたがひ
夫婦のやう
ばなりなれ
あながちな
實體なるな
哀れと思し
らぬこそと
りし答へな
村々羽立さ
まよふ朝風
夜ぶかき朝
かねの音、何
はかありも
にひて次第
さまをとり
つめとはい
り後成卿歌
千鳥よりの
の羽播きと

き、群鳥の立翔ふ羽風近う聞ゆ。夜深き晨の鐘の音微に響く。今だに甚見苦
きをと、甚理なう恥しげに思したり。薫事あり貌に朝露も得分け侍るまじ。
又人は如何推量り聞ゆべき。例の如に平穩に舉止せ給て、只世に違たる事
に、今より後も只斯様に爲做せ給てよ。世に不安き心はあらじと思せ。斯ば
かり強ちなる心の程も、哀と思し知ぬこそ効なけれ」とて、出で給んの氣色
もなし。淺ましう醜ならんとて、大「今より後は然ばこそ舉動給ん隨にあらん。
今朝は又聞るに隨ひ給へかし」とて、甚術なしと思したれば、薫噫苦しや。
曉の別や未だ知ぬ事にて、實に惑ぬべきを」と嘆息勝なり。鶏も、何方に
かあらん微に音ふに、京思出らる。
薫「山里の哀知る、聲々に、
とり集たる朝朗かな。」

女君

大「鶏の音も聞ぬ山と思しを、

障子口まで送り奉り給て、昨夜入し戸口より出て臥し給れど、交睫れず。名
世に憂き事は訪ね來にけり。」

總角

をかけたたり
障子の口まで
大君の薫へ對
面の爲出で居
られしをわが
御方へかへら
るゝを薫の送
りてなり
名残こひしう
て
一夜もすがら
たづさはりつ
る妹が袖名残
こひしく思ほ
ゆるかな
よからぬこと
他の戀想人の
ことを縁にし
たがひつゝ取
水ぎいふなり
人の上になし
ては
中君を薫に合
せてはいかば
せんと後見を
せんとなり
御そりせ
中君の衣のう
まを姉君にう
ちきせらるゝ
とのみ人か

殘戀しうて、甚斯く思ましかば、月來も今まで心閑ならましやなど、歸ん事も物憂く覺え給ふ。姫君(大)は人の思らん事の憚しきに、疾にも打臥れ給て、頼もしき人なくて世を過す身の心憂さを、在る女房們も、良らぬ事何や彼やと、縁々に随つゝ言出めるに、意より外の事ありぬべき世なめりと思し廻すには、此人(薫)の御氣色有様の疎しくはあるまじく、故宮(宮)も然様なる意志あらばと折々宣ひ思すめりしかど、自身は仍斯くて過してん。我よりは容姿も盛に可憐しげなる中の君を、人並に見做たらんこそ嬉しからめ。人の上に爲しては、心の至らん限り思ひ後見てん。自身の上の舉措は、又誰かは見扱ん。此人(薫)の御態の、尋常に打紛たる程ならば、斯く見馴ぬる年來の効に打緩べ心も有ぬべきを、尊貴氣に見え難き氣色も却々甚う憚しきに、我世は斯て過し果てむと思續けて、音泣勝にて明し給るに、名残甚惱しければ、中君の臥し給る奥の方に添臥し給ふ。例ならず人の密語し氣色も奇しと、此君(中)は思しつゝ寝給るに、斯て在したれば嬉くて、御衣引着せ奉り給ふに、所狭き御移香の紛るべくもあらず、燻り懸る心地すれば、宿直人が困惑けん思合せられて、眞なるべしと最惜うて、寝ぬるやうにて物も宣す。客人(薫)は辨の

橋姫の給に薫
の衣の給に薫
移香の高きを
もてわづらひ
しことなり
あげまきを
前に薫のあげ
まきに永まき
まきとよまき
しを大君たは
ぶれにぬきも
あへぬもろき
涙のなれしも
は薫に心あり
の隔つてか
ありしと中君
の思はれんか
となり
常は金にてう
ちたるものを
は糸に結ぶ心
葉なるべし給
つゝみ聞え給
ひし
中夜大君の藤
のやつれを見
あらはされし
を憚み給ひし

御許呼出で給て細に談ひ置き、御消息淡々しう聞え置て出で給ぬ。總角を戯れに取做しも、心もて尋ばかりの隔も對面しつるとや此君(中)も思すらんと、甚う耻しければ、心地悪しとて惱み暮し給つ。女房 女、祥日は殘なく成り侍りぬ。抄々しう些き法事をだに又仕奉る人もなきに、折悪き御病惱かな」と聞ゆ。中君組など爲果て給て、中「心葉などは得るそ思寄り侍らね」と、切て聞え給ば、暗う成ぬる紛に起き給て、諸共に結びなどし給ふ。中納言殿(薫)より御文あれど、大「今朝より甚惱うなん」とて、人傳にぞ聞え給ふ。女「然も見苦う若々しう在す」と、女房呟き聞ゆ。御服など果て脱ぎ捨て給るに就ても、片時も後れ奉らんものと思ざりしを、果敢く過にける月日の程を思すに、甚う思の外なる身の憂さと泣き沈み給る御體ども、甚心苦げなり。月來黒う慣し給る御姿、薄鈍にて甚優雅しうて、中君は實に甚盛にて美げなる匂増り給り。御髪など洗し粧せて見奉り給に、世の愛悶忘る心地して愛たければ、人知らず思ふ様に叶て人に見え給んに、然とも近劣しては思はずあらんと頼もしう嬉うて、今は又見讓る人もなく、親心に冊き立て見聞え給ふ。彼人(薫)は憚み聞え給し藤の衣も、改め給つらん長月も靜心なくて又在したり。例の如

ことなり
長も
八月に
れしを
とせど
久しに
月に来
となり
心あや
心地指
たゞ入
薫を姫
心もて
大方昔
なども
さまは
とはあ
なり
心なめ
薫の深
まなり
言に出
が代り
申さひ
うけひ
じさは
して中
君を合

せんさ
の中君
らに移
らば
しらせ
ばら給
中君の
御存じ
なくば
宮の遺
心細く
りて愛
果んと
心細く
ぬを思
やうの
同じや
君も在
いかい
一所を
大君は
かくて
せとは
かれざ
るべし
はかん
もあら
大君は
うしろ
数も添
やうに

に聞くと又御消息あるに、大「心過りして、煩しう覺れば」と、兎角聞え角力
て、對面し給ず、薫思の外に心憂き御心かな。人も如何に思ひ侍ん」と、御
文にて聞え給り。大「今はとて、脱ぎ捨て侍りし程の心惑ひに却々沈み侍てな
ん、聞ぬ」とあり。恨み侘て、例の人(辨)召て萬に宣ふ。世に知ぬ心細さの慰
安には、此君(薫)をのみ頼み聞たる人々なれば、思に叶ひ給て、普通の住家に
移ひなどし給んを、甚愛たかるべき事に言合せて、女「只入れ奉らん」と皆談
ひ合せけり。姫君其氣色をば、深う見知り給ねど、斯う取分て人めかし懐け
給めるに、打解て不安き心もやあらん。昔物語にも心もてやは兎ある角る事
も有める。打解まじきは人の心にこそ有めれと思寄り給て、切て怨言深く
ば此君(中君)を押出ん。劣り體ならんにてだに、然ても見初ては淺薄には遇す
まじき心なめるを、況て微にも見初ては慰みなん。言に出ては如何でかは、
偶と然る事を待取る人のあらん。本意になんあらぬと承引く氣色の無んなる
は、半は人の思ん事を、愛なう淺薄き方にやなど憚み給ならんと思し構るを、
氣色だに知らせ給ずば、罪もや得んと身を摘て最惜ければ、萬に打語ひて、
大「昔の御教訓も、世中を斯く心細うて過し果とも、却々胡盧に輕々しき心用

ふな、ど宣ひ置しを、在せし世の御絆にて、勤行の御心を擾りし罪だに甚か
りけんを、今はとて然許宣し一言をだに違じと思ひ侍れば、心細くなども殊
に思ぬを、此女房の奇う心強き者に憎むめるこそ甚理なけれ。實に然のみ
様の者を過し給んも、明暮る月日に添ても、御事(中君)をのみこそ可惜しう、心
苦う悲きものに思ひ聞るを、君だに尋常に處し給て、斯る身の有様も面目し
く慰むばかり、見奉り做ばや」と聞え給ば、如何に思すにかと心憂くて、
中「一所をのみやは、然て世に果て給へとは聞え給けん。抄々しくもあらぬ身
の不安さは、數添たるやうにこそ思されためりしか。心細き御慰安には、斯
う朝夕に見奉るより如何なる方にか」と生恨しく思ひ給れば、實にと最惜う
て、大「仍是彼(女房)愛て僻々しき者に言ひ思へかめるに就て、思ひ亂れ侍るぞ
や」と言措し給つ。暮行くに、客人(薫)は歸り給す。姫君(大君)甚煩しと思す。
辨參りて、御消息ども聞え傳て、恨み給ふを道理なる由を咄々と聞ゆれば、
答もし給ず打嘆息て、如何に處すべき身にかは。一所在せましかば、兎も角
も然べき人に扱れ奉りて、宿世といふなる方に就て、身を心ともせぬ世な
れば、皆例の事にてこそは、胡盧なる咎をも隠すなれ。有る限の人は、年積

雲霞をやはらぐは、
 雲のなれど世の
 ものなきことぞ
 よそなるてぞ
 ふの業平の
 歌の上の句を
 とりて本意を
 とげ給ふとも
 雲霞を分けて
 うき世の外に
 もといひのこ
 べしたる詞なる
 なよよかに
 薫の來給は、
 中君を合せん
 の心なり
 常なきものに
 世の無常をな
 うしるめたし
 辨が心なり

の外に有まじき體に流浪ふ類だにこそ、多く侍るめれ。其れ皆例の事なめれば、誹き言ふ人も侍す。況て斯ばかり、殊更にも作り出ま欲げなる人の御有様に、志深う有難げに聞え給を、強ちに拒絶れさせ給て、思し置つるやうに勤行の本意を遂げ給とも、然とて雲霞をやはらぐなど、惣て言多く申し續れば、甚憎く厭く思して、平伏し給り。中君も効なく最惜き御氣色かなと見奉り給て、諸共に例の如に大殿籠りぬ。不安う加何に舉措んと覺え給と、殊更めきて閉籠り隠へ給へき物の隈だになき御住居なれば、柔軟に美しき御衣上に引被せ奉り給て、未だ氣色暑さ程なれば、少し轉び退て臥し給り。辨は、宣つる事を客人に聞ゆ。如何なれば、甚斯しも世を思ひ離れ給らん。聖僧だち給りし邊にて、常なき物に思ひ知り給るにやと思すに、甚ど我心に肖て覺れば、賢しだち憎くも覺えず、薫然ば物越などにも、今は有まじき事に思し成にこそは有なれ。今夜ばかり大殿籠るらん邊に、忍て謀れと宣へば、用意して人疾く鎮めなど、事體知る同志は思ひ構ふ。宵少し過る程に、風の音荒らかに打吹くに、些き體なる薔などは聾々と紛る音に、人の忍び給る舉動は、得聞付け給じと思て、徐ら導き入る。同所に大殿籠れるを不安しと思

御けはひをも
 大君と中君と
 の二人のさま
 をよく見られ
 てなり
 大君の心なり
 大君ならぬと
 中君のさまな
 り
 いといとほし
 くも
 薫の心になり
 かくれ給へら
 大君のなり
 大君のなり
 妹君なれば大
 君をよそなら
 ぬとは思へど
 なり
 あさかりけり
 いづ方にても
 よきやうに淺
 き心には見ら
 れじなり

ど、例の事なれば、他所にとも如何聞えん。御氣色をも迎々しからず見奉り給つらんと思けるに、打も交睫み給ねば偶と聞き給て、徐ら起出で給ぬ。甚疾く這隠れ給ぬるに、何心もなく寝入り給るを、甚最惜く如何にする事ぞと胸潰れて、諸共に隠れなばやと思ど、然も得立ち歸られで、戦々々々見給は、灯の微なるに、桂姿にて、甚馴顔に几帳の帷子を引上げて入ぬるを、甚う最惜く、如何に覺え給んと思ながら、奇き壁の面に屏風を立てる後の陋しげなるに居給ぬ。豫期事にてだに、憂しと思ひ給るを、況て如何に珍かに思し疎んと甚心苦きにも、惣て涉々しき後見なくて落留る身と、物悲きを思ひ續け給に、今はとて山に上り給し夕の御様子など只今の心地して、甚く戀しく悲く覺え給ふ。中納言(薫)は、一人臥し給るを、用意しけるにやと嬉くて、心動さし給ふに、漸う否りけりと見る。今少し美しく可愛げなる氣色は、勝りてやと覺ゆ。淺ましげに憫れ惑ひ給るを、實に事情を知ざりけりと見れば、甚最惜くもあり、又押返して、隠れ給らん難面の眞實に心憂く憾ければ、是をも他の物とは得思ひ離れまじけれど、仍本意の違ん口惜くて、露骨に淺かりけりとも覺え奉らじ。此一節は仍過して、終に宿世免れずば、此方方に成んも、

さりともある
 仔細あるべし
 何かこれなり
 俗に「何なり
 恐しき神は
 ならぬ木には
 ちかはぶる神
 ぞつくといふ
 ならぬ實ごと
 べし女の時過
 れば時分過ぐ
 の領して妨ぐ
 るといふ
 いづれとわく
 中君も大君に
 かはらぬ美人
 となり
 あふ人からに
 一ながしとも
 思ひぞ果ぬ昔
 より逢ふ人な
 らば秋の夜な
 らねば本意な
 らねども心な
 をいへり

何かは他人の如にやはと思ひ冷して、例の雅しく懐き體に語ひて明し給つ。
 老人們は、爲損じつと思ひ、老中君は何處にか在すらん。奇き事かな」と、
 探り合ひ。老然とも有る様あらん」など言ふ。老大方例の見奉るに、皺延る
 心地して、愛たく可憐に見ま欲き御容貌有様を、何て甚疎隔ては聞き給らん。
 何か是は世人の言める、恐き神を憑き奉りつらん」と、齒は打透て愛嬌なげ
 に言做す女あり。又老噫禍々し。何ぞの物か憑せ給ん。只人に遠くて生出
 させ給めれば、斯る事にも、似々しげに遇し聞え給ふ人もなく在すに、恥
 く思さるゝにこそ。今自然見奉り馴れ給なば、思ひ聞え給てん」など語ひ
 て、老疾く打解て思ふ如にて在さなん」と、言ふく寝入て、軒など傍痛く
 するもあり。逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明ぬる心地し
 て、孰と分べうもあらず優雅しき御様子を、人爲ならず飽ぬ心地して、薫相
 思せよ。甚心憂く難面き人(大)の御所作、見習ひ給ふなよ」など、後瀬を契て
 出で給ふ。我ながら奇く夢の如に覺れど、仍難面き人の御氣色、今一度見果
 んの心に思ひ閑めつゝ、例の出で臥し給り。辨參りて、辨甚奇く、中君は何
 處にか在すらん」といふを、甚恥しく思ひ懸ぬ御心地に、如何なりけん事に

かたみ中君と
 大君と中君と
 なり
 こゝろゆるび
 すべくも
 女房たちのな
 すさまじなり
 身を投つべき
 一尋ねはる身
 をしとはずば
 よきの海に身
 も投げつべき
 心地こそす
 れ一與謝の湖
 は丹波にあり
 ずて難く
 八宮のなり
 身を自らな
 薫の自身をな
 何方にも
 中君は本意に
 あらず人君は
 つれなけれは
 何れにも思ひ
 けるべしとな
 り
 うきもつらき
 も
 たい大君のつ
 まれなきは忘
 る

かと思ひ臥し給り。昨日宣し事を思し出て、姫君(大)を憂しと思ひ聞え給ふ。
 明にける光に付てぞ、壁の中の蟋蟀這出で給る。思すらん事の甚最惜ければ、
 互に物も言れ給す。床しげなう心憂くもあるかな。今より後も、油断すべう
 もあらぬ世にこそと、思ひ亂れ給り。辨は彼方(薫)に參りて、淺ましかりける
 御心強さを聞き顯して、甚餘り深く人憎かりける事と、最惜く思ひ毫れ居た
 り。薫過去の難面は、仍殘ある心地して萬に思ひ慰めつるを、今夜なん眞に恥
 しく、身も投つべき心地する。捨て難く遣し置き奉り給りけん心苦さを、思
 ひ聞の方こそ、又一向に身をも得思ひ捨まじけれ。慮外しき筋は、何方にも
 思ひ聞じ。憂も辛きも、方々に忘れ給まじくなん。宮(句)などの憚しげなく聞
 え給めるを、同くは、高くと思ふ方ぞ殊に在し給らんと心得果つれば、甚ど
 道理に恥しくて、又參りて人々に見え奉らん事も憾くなん。縦し斯く愚がま
 しき身の上、又人にだに洩し給な」と怨じ置て、例よりも急ぎ出で給ふ。誰
 が御爲も最惜くと密語さ合ひ。姫君(大)も如何にしつる事ぞ。若し疎なる心
 も在し給ばと、胸潰れて心苦しければ、惣て打合ぬ女房の韓旋を憎しと思
 す。種々思ひ給ふに、御文あり。例よりは嬉しと覺え給ふも半は奇し。秋

總角

薰霧深き朝の原の女郎花、

心を寄て見る人ぞ見る。

見る人ぞ
志の深き人
らでは見たま
ふまじきとな
り
なべてやは
大方の志にて
は見せ申さじ
となり
ねたまし
激さするなり
内々に思ひた
ば君の中君を
薫にとはかり
るゝことなり
ひがんの日は
時正とも天正
ともいひて吉
日なり

凡てやは「など妬まし聞れば、噫喧しと果々は腹立ち給ぬ。年來斯く宣へど、人(姫)の御有様を如何ならんと不安く思しに、容貌なども見劣し給まじく、推量るゝ性質の近劣するやうもやなどぞ、危く思ひ渡しを、何事も口惜くは在し給まじかめりと思は、彼の最惜く内々に思ひ謀り給ふ有様も、違ふやうならんも情なきやうなるを、然とて然將た、得思ひ改むまじく覺れば、先づ譲り聞えて、何方の恨をも負じなど内心に思ひ構る心をも知り給て、心狭く取做し給ふも可笑けれど、例の輕浮なる御性質に物思せんこそ、心苦しかるべけれなど、親方になりて聞え給ふ。句、縦し見給へ。斯ばかり心に留る事なん未だ無りつる」など、甚熱心に宣へば、薫彼の心どもには、然もやと打靡ぬべき氣色は見ずなん侍る。仕奉り難き奉仕にこそ侍れや」とて、在すべき様など、細に聞え知せ給ふ。廿六日彼岸の終にて吉き日なりければ、人知らず用意して、甚く忍て奉て奉る。後の宮(明石)など聞召し出ては、斯る御外出甚く制し聞え給は甚煩しきを、切に思したる事なれば、然氣なくと斡旋ふも理

句の初瀬詣で
わたれし時給
て夕霧の大
の領する所
に中宿りせ
れしをそれ
事々しけれ
橋より此方
薫の領地に
し申さるゝ
とある人
とのみ人の
調りなるべ
などもあれ
歩くかにも
の意にをは
べし
うつらふ方
大君の薫の
は中君に移
ひさまりし
なり
思ふ殊なめ
薫の心は大
り外にうつ

なくなん。舟渡なども所狭ければ、事々しき御宿なども借り給ず、其邊甚近き御莊の人の家に、甚忍て宮(句)をば下し奉り給て在しぬ。見咎め奉るべき人もなければ、宿直人は僅に出て歩くにも、氣色知せじとなるべし。例の中納言殿在すとて、經營し合ひ。君達生煩しく聞き給と、移ふ方殊に香し置てしかばと、姫君(大)は思す。中君は思ふ方殊なめりしかば、然ともと思ひながら、心憂かりし後は、往しやうに姉君をも思ひ聞え給ず、心隔れて在し給ふ。何や彼やと御消息のみ聞え通ひて、如何なるべき事にかと女房も心苦しがる。宮(句)をば御馬にて、暗き紛に在させ給て、辨召出で、薫「爰許(大)に只一言聞えさすべき事なん侍るを、思し放つ體見奉りてしに甚恥しけれど、直家籠りにて得止むまじきを、今暫し更してを。過し様には導き給てんや」など、二心もなく談ひ給へば、何方にも同事にこそはと思て參りぬ。然なんと聞れば、然ばよ思ひ移りにけりと嬉くて、心安堵で、彼の入り給へき途にはあらぬ障子を甚固く鎖て、對面し給り。薫「一言聞えさすべきが、又他聞くばかり騒らんは理なきを、些啓させ給へ。甚愜し」と聞え給と、大斯ても甚熟く聞ぬべし」とて啓け給す。今はと移ひなんを、無心ならじとて言べきにや。何かは

るまじく見た
ればと申君の
心やすら思は
るなり
さりとも
安心とは思は
れなかりし後
心うかりし後
たばかりと
に逢はせんと
されし事なり
御消息のみ
薫より大君へ
思奉りてし
此下には是非
意なれば一
さて申君へ
どは君の意に
任すべしと
言姉君に申し
た方へは今少
の更か夜に如
く先君の方へ
先づ案内して
何方にも同じ

例ならぬ對面にもあらず、外観悪く答へて夜も更さじなど思て、斯ばかりも
出で給るに、障子の中より、御袖を捉て引寄て甚う恨れば、甚憂てもある事
かな、何に肯き入つらんと悔う煩しけれど、嫌へて出してんと思して別人と
思ひ分き給まじき體に微めつゝ、語ひ給る用意など甚哀なり。宮(句)は教へ聞
つる隨に、前夜の戸口に倚て扇を鳴し給ば、辨も参りて導き聞ゆ。先々も馴
にける道の案内、興しと思しつゝ入り給ぬるをも、姫君(大)は知り給で、欺へ
入てんと思したり。興しうも最惜くも覺て、内々に事由も知ざりける恨置れ
んも罪避所なき心地すべければ、薫宮の慕ひ給つれば得聞え辭で爰に在しつ
る、音も爲でこそ紛れ給ぬれ。此の賢し立つめる人や語れ奉りぬらん。中
空に胡盧にも成り侍りぬべきかな」と宣ふに、今少し思ひ寄ぬ事の眼も眩に
厭うなりて、斯う萬に珍なりける御心の程を知で、言ふ効なき心幼さも
見え奉りにける怠りに、思し悔るにこそはと、言ん方なく思ふ給り。薫今は
言ふ効なし。道理は返すく聞させても餘りあらば、罪も捻らせ給へ。貴
き方(句)に思し寄るめるを、宿世などいふめるもの、更に心に叶ぬものに侍る
めれば、彼の御志は他(中)に侍けるを、最惜く思ひ給るに、叶ぬ身こそ置所

辨が心なり初
めは君への
志なりしを今
宵中君にと申
さるゝをなり
入り給ふべき
中君の方へ入
らるゝ道なら
ぬ方に大君
薫に對面ある
出で給へるに
大君のなり
こと人と
中君も同じ事
づらると薫に
辨も参りて
句と思ひてな
り薫と思ひて
さき案内しな
すなかり道と
こしらへ入れ
てん中君方へ
薫をかしうも
薫の心なり
中空に

なく心憂く侍りけれ。仍如何はせんと思し弱りぬ。此御障子の鎖ばかり甚強
きも、眞に潔白く推量り聞る人も侍らじ。案内と誘ひ給る人(句)の御心にも、
正に斯く胸塞りて明すらんとは思しなや」とて、障子をも引破つべき氣色
なれば、言ん方なく厭けれど、嫌んと思ひ鎮て、大此の宣ふ宿世といふら
ん方は、眼にも見ぬ事にて、如何にも如何にも思ひ辿れず、知ぬ涙のみ霧塞
る心地してなん。此は如何に舉動し給ぞと、夢の如に淺ましきに、後世の
例に言出る人もあらば、昔物語などに、殊更に戲めきて作り出たるもの、譬
にこそは成ぬべかめれ。斯く思し構る心の程をも、如何なりけるとかは推量
り給ん。仍甚斯く甚しう、心憂くな取集め感し給そ。心より外に生存ば、
少し思ひ閑りて聞ん。心地も更に搔昏すやうにて甚惱きを、爰に打休まん。
釋し給へ」と甚く佗び給ば、有繋に道理をば甚好く宣ふが、憚しく可愛く
覺て、薫「吾君御心に隨ふ事の類なればこそ、斯まで頑しく成り侍れ。言知
す、憎く疎しきものに思し做めれば聞ん方なし。甚ど世に跡留へくなん覺ぬ」
とて、薫「然ば障子ながらも聞させむ。一向に勿打捨させ給そ」とて、釋し奉
り給れば、這入て有繋に入も果て給ぬを、甚哀と思て、薫「斯ばかりの御氣色

總角

を慰安にて明し侍らん。努々」と聞て、打も交睫す、甚どしき水の音に眼も
覺て、夜半の嵐に山鳥の心地して明し難給ふ。例の明行く氣色に、鐘の聲な
ど聞ゆ。貪眠て出で給へき氣色もなきよと、嫉しく聲作り給も、實に奇き
事なり。

薫案内せし我や反りて惑べき、

心も満ぬ曉昏の路。

斯る例世に有けんや」と宣へば、

大「方々に昏す心を思ひやれ、

人為ならぬ道に惑は。」

と微に宣ふを、其飽ぬ心地すれば、薫如何に此上なう隔りて侍るめれば、甚
理なうこそ」など萬に恨つ、微々と明け行く程に、昨夜の方より出で給ふ
なり。甚柔婉に舉動し給る匂など、艶なる御心懸想には言知ず占め給り。老
人們は、甚奇く心得難く思ひ惑れけれど、然とも悪様なる御心あらんやはと、
慰めたり。暗き程にと急ぎ歸り給ふ。路の程も歸途は甚遙く思されて、心易
くも往き通ざらん事の豫て甚苦きを、夜をや隔んと思ひ惱み給なめり。未だ

「行先を知らぬ涙の悲きは
おつるなりけり」
はひ入て
薫の袖を釋せ
中に這ひ入り
てなり
ゆめより亂れ
これよりあら
じとなり
川鳥の心地し
て「あふ事は遠
山どりの眼も
あはずあはず
て今宵明しつ
るかな」
例のあけゆく
取あつめたる
朝ぼらけかな
とよめる心な
りさて例のと
はいへり
あけぐれのみ
「曉ぐれの道
にぞわれはま

人騒しからぬ朝の程に在し着ぬ。廊に御車寄て下り給ふ。異様なる女車の體
して隠へ入り給ふに、皆笑ひ給て、薫疎ならぬ宮仕の御志となん思ひ給る」
と申し給ふ。嚮導の愚がましさをば、甚憾くて憂も聞え給す。宮(匂)は早急と
御文奉り給ふ。山里には誰もく現の心地し給す、思ひ亂れ給り。種々に
思し構けるを、色にも出し給ざりけるよと、疎しう辛う姉君をば思ひ聞え
給て、眼も見合せ奉り給す。知ざりし體をも、明白とは得辨解給て、道理に
心苦く思ひ聞え給ふ。女房も如何に侍り事になど御氣色見奉れど、思し
毫たる如にて頼し人(姉)の在すれば、奇き事かなと思ひ合り。御文も引解て
見せ奉り給と、更に起上り給ねば、甚久く成ぬと御使忙けり。
匂「普通に思やすらん露深き、

道の符原分て來つるも。」

書き馴れ給る墨付などの殊更に艶なるも、大方に就て見給しは、興しう覺し
を、不安う物思しうて、我賢し人にて聞んも、甚憚しければ、懇切に有べき
やうを、甚く促て書せ奉り給ふ。紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴具して
給ふ。御使苦げに思たれば、包せて、供なる人になん送せ給ふ。事々しき御

どひぬる思ふ心のゆかぬまにに(能宣)方々に中君の事を思ひ又我が歎きをも方々に物思ひは皆薫自身ひ給へとな思ひ給へとな

障子のことを甚しく言はるゝなり

夜をやへだて

一人若草の新手枕をまきそめて夜をまきそめて

人憎からなくに(まきは)纏ふ心なり

おはしつきぬ六條院になり

女車なり

網代車なり

宮仕へ

句の字治へ在せしをいはる

使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。殊更に人に氣色洩さじと思しければ、昨夜の賢しがかりし老人の所爲なりけりと、物しくなん聞召ける。其夜も彼の嚮導誘ひ給ど、薫冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば」とて、止り給ふ。例の事に觸て、荒涼氣に世を扱すと憎く思す。如何はせん、本意ならざりし事とて疎にやはと思ひ弱り給て、室飾など打合ぬ住家の體なれど、然る方に趣致く爲めて、待ち聞え給けり。遙なる御中道を急ぎ在したりけるも、嬉し事なるぞ半は奇き。正身は我にもあらぬ體にて、粧はれ奉り給ふ隨に、濃き御衣の甚く濡れば、幹旋人(君)も打泣つゝ、大「世中に久くもと覺え侍ねば、明暮の眺にも、只御事をのみなん心苦う思ひ聞るに、此女房も好るべき方の事と、聞き憎きまで言知すめれば、年経たる心どもには然とも世の道理をも知たらん。抄々しくもあらぬ心一つを立て、斯でのみやは見奉らんと思ひ成る様もありしかど、只今斯く思も敢ず恥き事どもに亂れ思へくは、更に思ひ懸け侍ざりしに、是や實に人の言める、免れ難き御宿縁なりけん、甚こそ苦しけれ。少し思し慰みなんに、知ざりし事情をも聞ん。憎しとな思し入そ。罪もぞ得給ふ」と、御髪を撫粧ひつゝ聞え給は、答もし給ねど、有繫に斯く思

るなり

皆笑ひ

句と薫と共に

笑ひてなり

大方につけて

今まで大方に

て見し時は風

雅に美しと

雅に美しと

君に逢はれて

後には末と給

不安なるなど

紫苑色、裏萌

表蘇芳、裏萌

細長、桂着

桂の上に着る

もの上に桂着

如く大に桂着

見ゆれば細長

へり

三重がさね

裏表ありて中

倍ありといふ

今日初めといふ

にははさるゝ故

に祿を出せる

上童

童殿上したる

し宣ふが、實に不安く悪かれとも思し掟てじを、胡盧に見苦き事添て、見披れ奉らんが甚きを、萬に思ひ居給り。然る心もなく、惘れ給りし氣色だに、凡ならず風情かりしを、況て少し普通に嫺び給るは、御志も増るに、容易く通ひ給ざらん山道の遙けさも、胸痛きまで思して、心深げに語ひ頼め給ど、哀れも如何にも思ひ分き給ず。言知ず冊くもの、姫君も、少し普通の人氣近く親兄など言つゝ、人の生活をも見慣れ給るは、物の恥しさも、普通にやあらん。家に崇め聞る人こそなけれ、斯く山深き御邊なれば、人に遠く物深くて慣ひ給る心地に、思掛ぬ有様の、憚しく耻しく、何事も世人に似ず、奇う田舎びたらんかすと、些々御答にても言ひ出ん方なく憚み給り。然は此君(中)しもぞ、藤々しく才ある方の風情は増り給る。三日に當る夜は、餅なん奉ると女房の聞れば、殊更に然べき祝の事にこそはと思して、御前にて爲させ給ふも不案内しう、半は成人に成て掟て給ふも、人の見るらん事憚られて、面打頼めて在する體甚美しげなり。兄心にや、悠閑に氣高きもの乍、人の爲哀に情々しうぞ在しける。中納言殿より、薫昨夜參んと思ふ給しかど、宮仕の勞も効なげなめる世に、思ふ給へ恨てなん。今夜は雜役もやと思ふ給れど、

人なり
 事辨の君のし
 わざと思さる
 るなり
 うれしき
 大君の心なり
 こき御衣
 紫にも多く紅
 へりこれ紅
 なるべし
 たい今かく思
 ひもあへず
 薫へとも思
 ひしこともあ
 り早急にか
 句宮へとは思
 はざりしとな
 はづかしきこ
 と
 句宮には薫の
 やうにはあら
 らず耻ぢらる
 心なり
 ひとわらへに
 句宮にもし見
 捨てらればな
 り
 ひ人のたゞずま

夫婦間のあり
 さまなど見
 れたるはなり
 するしなげ
 自身には何の
 報謝もなしと
 なり大君のつ
 れなきをいへ
 り
 おひつぎ
 ちらしなどに
 も書かれざる
 なり
 まふけのもの
 三日の夜の御
 用になり
 かけごと
 重々に入れた
 るなるべし
 染めも練りも
 せざるなり
 古代のことな
 り
 小夜衣など古
 めかしきこと
 ばなれどもな
 り
 かごとばかり
 大君も中君も
 實に逢ひたり

宿直所の耻げに侍りし亂り心地、甚ど安からで躊躇れ侍る」と檀紙に、追
 繼ぎ書き給て、設の衣ども細やかに、縫なども爲ざりける色々押卷きなどし
 つ、御衣櫃數多懸子に入て、老人の許に、女房の料にとて給り。宮(女)の御
 方に侍けるに隨ひて、甚多くも得取集め給ざりけるにやあらん、素なる絹綾
 など、下には入れ隠しつ、御料(大君)と思しき二領、甚美麗にしたるを、單
 衣の御衣の袖に、古代の事なれど、
 薫小夜衣着て馴きとは言ずとも、

と嚇し聞え給り。此方彼方床しげなき御事を、耻しう甚ど見給て、御返事も
 如何聞んと思し煩ふ程、御使一半は逃げ隠にけり。賤き下人を控てぞ、御返
 事給ふ。
 大「隔なき心ばかりは通ふとも、
 馴し袖とは被じとぞ思ふ。」

心慌しく思ひ亂れ給る名残に、甚と撲しきを、思しけるまゝと待ち見給ふ
 人(薫)は只可憐にぞ思ひ做れ給ふ。宮は其夜内裏に參り給て、得罷出給まじけ

なるを、人知ず御心も空にて思し嘆きたるに、中宮、明「仍斯く獨在して、
 世中に好色給る御名の漸う聞る、仍甚惡き事なり。何事も物好しく立たる心
 な用ひ給そ。主上も不安氣に思し宣ふ」と里住勝に在すを、戒め聞え給ば、
 甚苦しと思して、御宿直所に出で給て、御文書で奉れ給る名残も甚く打眺め
 て在すに、中納言の君(薫)參り給り。其方の最負を思せば例よりも嬉うて、
 句「如何すへき。甚斯く暗く成ぬめるを、心も亂れてなん」と、嘆かしげに思
 したり。熟く御氣色を見奉らんと思して、薫「日頃經て斯く參り給るを、今宵
 侍せ給て、急ぎ罷出給ひなん、甚ど良しからぬ事にや思し聞させ給ん。臺
 盤所の方にて承りつれば、人知ず煩しき宮仕の効に、あいなき勘當や侍ん
 と、顔の色違ひ侍りつる」と申し給は、句「甚聞憎くぞ思し宣ふや。多くは人
 の取做す事なるべし。世に咎あるばかりの心は何事にかは用ふるん。惣て所
 狭き身の際こそ却々なる事なりけれ」とて、眞に厭しくさへ思したり。最惜
 う見奉り給て、薫「同じ御煩悶にこそは在すなれ。今宵の罪には代り聞させて、
 身をも徒に成し侍りなんかし。木幡の山に馬は如何侍るべき。甚ど物の風評
 や障り所なからん」と聞え給は、只暮に暮て更にける夜なれば、思し佗て、

御手つきの細
やかに
此巻の末に煩
ひて終に亡せ
給ふべき伏線
なり

あとの白浪
宇治の境地の
面白しとなり
一世の中を何
にたへむ朝
ぼらけあとの
く舟のあとの
白浪
思ひなしのわ
が方さま
后腹なる妹の
ふ君たちをい

はしてこよな
句は薫より又
一段と思ひし
となり

中絶えん
「忘らるる身
を宇治橋の中
絶えて人も通
はぬ年ぞむし
ける衣かたし
ろに宵もや我
き待つらん宇
治の橋原に
わが頼みぬや
と申さるれど
そはそれらど
我はそれらど
なりにするの
意

類齡げなる身の有様をと、御手容の細やかに纖弱く、可憐なるを差出ても、世中を思ひ續け給ふ。宮(句)は有難かりつる御暇の程を思し廻すに、仍容易かるまじき事にこそはと、甚胸塞りて覺え給ける。大宮(中宮)の聞え給し事など語り聞え給て、句「思ながら途絶あらんを、如何なるにかと思すな。夢にても疎ならんに斯までも參り來まじきを、心の程や如何と疑て、思ひ亂れ給んが心苦しさに、身を捨てなん。常に斯は得惑ひ歩かじ。然べき體にて近く渡し奉ん」と、甚深く聞え給ど、絶問あるべく思さるらんは、音に聞し御心の程著きにやと心隔れて、我が御有様から種々物歎しくてなんありける。明行く程の空に、妻戸押啓け給て、諸共に誘ひ出て見給ば、霧渡れる態、所がらの哀多く添て、例の柴積む舟の微に往交ふ跡の白浪、眼慣ずもある住居の體かなと、色なる御心には興しく思し做る。山の端の光漸う見るに、女君の御容貌の正に美しげにて、限なく齋き据たらん姫君も、斯ばかりこそは在すべかめれ、思做の我が方々の甚嚴しきぞかし。濃なる句など打解て見ま欲う、却々なる心地す。水の音懐しからず、宇治橋の甚物古りて見え渡さるゝなど、霧晴行けば、甚と有ま欲き岸の邊を、句「斯る處に如何で年を経給らん」

など、打涙含れ給るを、甚耻しと聞き給ふ。男の御様子、限なく優雅しく美麗にて、此世のみならず契り頼み聞え給ば、思ひ寄らざりし事とは思ながら、却々彼の眼慣たりし中納言の憚しきよりはと覺え給ふ。彼(薫)は思ふ方殊にて、最甚く澄たる氣色の、見え難く憚しげなりしに、他に思ひ聞し(句)は況て此上なく遙に、一行書き出で給ふ御返事だに憚しく覺しを、久く途絶給んは心細からんと思ひ成るゝも、我ながら憂てと思ひ知り給ふ。人々甚く聲作り催し聞れば、京に在さん程、顯著なからぬ程にと、甚心慌しげにて、心より外ならん夜離を返すゝ宣ふ。
句「中絶ん物ならなくに橋姫の、片敷く袖や夜半に濡さん。」
出難に立歸りつゝ猶豫ひ給ふ。
中「絶せじの我が頼みや宇治橋の、遙けき中を待ち渡るべき。」
言には出ねど、憂悶しき御氣色限なく思されけり。若き人の御心に染ぬべく、類少げなる朝氣の姿を見送りにて、名残留れる御移香なども、人知す哀愁な

見君の思ひし
かゝる心なり
じと思ひし
のを中君のこ
ととなりては
又身の苦し
まさりて苦し
となり

ふ初時の山里
の山雨ふる
へん住むか
らん袖のぬさ
に雨上ぬさ
と時雨めきて
て字治をとり
なしたるなり

るは、戯たる御心かな。今朝を物の黒白も見る頃にて、女房覗て見奉る。女中納言殿は、懐しく尊貴氣なる態を添ひ給りける。思做の今一際にや、此御態は、甚殊に「など愛で聞ゆ。途次、心苦しかりつる御氣色を思し出つ、立も歸りなま欲く體悪きまで思せど、世の風評を忍て歸せ給ふ程に、得容易くも紛れさせ給す。御文は翌日毎に數多反奉せ給ふ。疎にはあらぬにやと思ながら、待遠き日數の積るを、甚悶々に見しと思しものを、身に増りて心苦しくもあるかなと、姫君(大)は思し歎かるれど、甚ど此君(中)の思ひ沈み給んに依り、淡く擬して、自身だに仍斯る事思ひ加へしと愈深く思す。中納言の君(薰)も、待遠にぞ思すらんかしと思ひやりて、我が過失に最惜くて、宮(匂)を聞え驚しつ、絶す御氣色を見給ふに、最甚く思し入たる體なれば、然ともと安心かりけり。九月十日の程なれば、野山の景色も思ひやらるゝに、時雨めきて搔昏し、空の叢雲恐しげなる夕暮、宮(匂)甚ど靜心なく眺め給て、如何にせんと御心一つを出立ち難給り。推量りて參り給へり。ふるの山里如何ならんと驚し聞え給ふ。甚嬉しと思して、諸共に誘ひ給ば、例の同車にて在す。分入り給ふ隨にぞ、況て眺め給らん心の中甚ど推量れ給ふ。途の程も、

あはれと思ふ
人のよそにてはあ
はれなる人もあ
は辛きふしにて
なれることゝ
なりなれり
かすめつゝ
大君の答への
さまなり薫の
推量の如くさ
ればよ待遠に
り思しけりと

只此事の心苦しきを語り聞え給ふ。黄昏時の甚く心細げなるに、雨は冷かに打濺て、秋果る氣色の凄きに、打濕り濡れ給る艶麗どもは、世の物に似ず艶にて打連れ給るを、山賤們は如何喫驚もせざらん。女們日來打咳きる名残なく笑み榮つ、御坐引粧ひなどす。京に然べき所々に行散たる娘ども、姪だつ二三人尋ね寄て參せたり。年來悔り聞ける心淺き女房珍なる賓客と驚きたり。姫君(大)も時宜嬉しく思ひ聞え給ふに、幹旋人(薰)の添ひ給るぞ、憚しくもありぬべく、生煩しう思と、性格の悠閑に物深く在し給ふを、實に他(匂)は斯は在せざりけりと見合せ給に、有難しと思ひ知る。宮を所に就ては甚殊に冊き入れ奉りて、此君(薰)は主人方に心易く遇し給もの乍、未だ賓客居の假初なる方に出し放ち給れば、甚辛しと思ひ給り。怨み給ふも有繋に最惜くて、物越に對面し給ふ。薫戯れ難くもあるかな。斯てのみや」と甚く恨み聞え給ふ。漸う道理知り給にたれど、人(中)の御上にても、物を甚く思ひ沈み給て、甚ど斯る方を憂きものに思ひ果て、仍一向に、如何で斯く打解じ。哀と思ふ人の御心も、必ず辛しと思ぬべき事にこそ有めれ。我も人も見劣さず心違で止にしがなと思ふ用意深くし給り。宮(匂)の御有様なども問ひ聞え給ば、微め

總角

たゞ今は御心のあだ未はしられずた
 だ今ははらばた
 句宮も中君も
 女三に申され
 てなり
 かべし
 夏生絹冬は
 練絹を一重に
 くるなり
 句を薫のなり
 紅葉御す
 一字治山の紅
 葉を見ずば長
 月をもしらば
 日あらまし
 中やどり
 句宮の紅葉御
 覽まじにおは
 して必す宿し
 治宮に中宿し
 たり
 なるべきさま

宮人ども、殿上人の睦く思す限り、甚忍てと思せど、所狭き御威勢なれば、自然事弘ごりて、左大殿の宰相中將(夕霧)も参り給ふ。扱は此中納言殿ばかりぞ、上達部は仕う奉り給ふ。殿上人は多かり。彼處には、薫論なう中宿し給んを、然べき様に思せ。先年の春も花見に尋ね参り來し是彼、斯る便に托せて、時雨の紛に見奉り顯すやうもぞ侍る」など、細かに聞え給へり。御簾懸替へ、此處彼處搔拂ひ、岩隠れに積れる紅葉の朽葉少し掃け、遣水の水草掃はせなどぞし給ふ。風情ある菓物魚など、然べき奉仕人なども奉り給り。半は床しげなけれど如何はせん、是も然べきにこそはと思ひ忍して、準備し給り。舟にて上り下り漕廻り、面白く遊び給ふも聞ゆ。微々有様見るを、其方に立出て、若き女房見奉る。正身の御有様は其と見分ねども、紅葉を葺たる舟の飾の錦と見るに、聲々吹出る樂器の音ども、風に隨て驚々しきまで覺ゆ。世人の靡き冊き奉る體、斯く忍び給る路にも、甚殊に嚴きを見給ふにも、實に七夕ばかりにても、斯る彥星の光をこそ待ち出めなど覺えたり。詩文作せ給べき準備に、博士なども侍ひけり。黄昏時に、御舟差寄て遊びつゝ、詩文作り給ふ。紅葉を薄く濃く翳して、海仙樂といふ曲を吹て、各々心適たる

用意されよと
 なり
 しぐれのまぎ
 れに
 雨やどりに皆
 皆参らんとな
 り
 かつは
 薫の萬事沙汰
 するをうかれ
 つはゆかしげ
 なき事と思は
 るなり
 七夕ばかり
 年一夜なり
 ともなり
 御船さしよせ
 て
 此時の宿宇治
 院なり
 近江の海の心
 見らぬいかな
 なり
 海ぞあふみか
 のたえ生ひ
 ねば一七夕の
 をちかた人の

氣色なるに、宮(句)は近江の海の心地して、遠方人の恨如何にとのみ、御心空なり。時に應たる題出して、嘯き誦し合ひ。人の騒少し静めて在せんと中納言も思して、然べきやうに聞え給ふに、内裏より中宮の仰言にて、宰相(夕霧)の兄の衛門督、事々しき隨身引連て、壯重き態して参り給り。斯様の御外出は、忍び給ふとすれど、自然事弘りて後の例にもなる事なるを、重々しき人数多もなくて、俄に在しにけるを聞召し驚きて、殿上人數多具して参りたるに、顯露く成ぬ。宮(句)も中納言(薫)も苦しと思して物の興もなくなりぬ。御心の中をば知らず、醉亂れて遊び明しつ。今日は斯てと思すに、又宮の太夫(明石中宮)然ぬ殿上人など數多奉り給り。心慌くて、口惜く歸り給ん空なし。彼處には御文をぞ奉れ給ふ。興しやかなる事もなく、甚眞摯だちて、思しける事どもを細々と書き續け給れど、人眼繁う騒しからんにとて御返事なし。數ならぬ有様にては、愛たき御邊に難はん、効なき事かなと甚ど思し知り給ふ。他に隔たる月日は待遠さも道理に、然ともなど慰め給ふを、近き邊に騒り在して、難面く過ぎ給なん、憂くも口惜くも思ひ亂れ給ふ。宮(句)は況て慥く理なしと思す事限なし。網代の氷魚も心寄せ奉りて、色々の木の

門わたる今宵
さへをちかた
人のつれな
るらん前
七夕のこと
り今又をち
た人といへ
おもしろし
幸宮の御供
句の御供に
参れるなり
事々しき身
衛門の兵衛
ど本府の隨
を具するなり
今日はかく
終日も御留
と思すなり
おぼしける
常の艶書の
うにもなき
り思の切なる
なり
あじろのひ
もの字にて
にもさまん
の進物ある
と見えたり
一いかでな

葉に搔交ぜ弄ぶを、下人などは、甚興しき事に思は、人に随つゝ心適く御外遊に、自身の御心地は胸のみ直と塞りて、空をのみ眺め給ふに、此古宮の梢は甚殊に面白く、常磐木に這交れる蔦の色なども物深げに見て、遠目さへ凄けなるを、中納言の君も、却々頼め聞えけるを、憂しき事かなと覺ゆ。去年の春御供なりし君達は、花の色を思出て、後れて爰に眺め給らん心細さを言ふ。斯う度々に通ひ給と微聞たるもあるべし。情知ぬも交りて、大方に兎や角やと、人の御上は、斯る山陰なれど自然聞るものなれば、人々「最惜げにこそ在し給ふなれ。箏の琴上手にて、故宮の明暮弄び習し給ければ」など、口々に言ふ。宰相中將、

源宰相「何時ぞやも花の盛に一眼見し、

木の下さへや秋は淋き。」

主人方と思て言は、中納言(薫)

薫「櫻こそ思ひ知すれ咲き匂ふ、

花も紅葉も常ならぬ世を。」

衛門督(夕の)

衛「何處より秋は往けん山里の、

紅葉の蔭は過ぎ憂きものを。」

中宮太夫、

太「見し人も亡き山里の岩垣に、

心長くも這る葛かな。」

中に老至て打泣き給ふ、親王の若く在しける世の事など思ひ出るなめり。宮、

句「秋果て淋さ増る木の下を、

吹な過しそ嶺の松風。」

あじろの水魚
にこと問はん
何によりてか
我をとはぬ
と一水魚には
紅葉を敷くよ
おくれ
父宮に後れて
淋しくながめ
らるゝ姫君を
あるじ方と
薫によりかけ
たるなり
飛花落葉は世
の常なき理を
知らず中にな
も櫻は殊にな
ほとたり宮の
去年の春は在
りし眺め給ひ
り
秋はゆきけり
おもしろし
おもしろし
は紅葉のかげ
はかくげれば
過ぎうければ
八宮も爰をば

とて甚う涙含み給るを、微に知る人は、實に深く思すなりけり。今日の便宜を過し給ふ御心苦しさと見奉る人なれど、事々しく曳き續きて得在し寄す。作りける詩文どもの面白き所々打誦し、和歌も事に付て多かれど、斯様の酔泣の紛に況て抄々しき事あらんやは、片端書留てだに、見苦くなん。彼處には過ぎ給ぬる氣色を、遠うなるまで聞る前驅の聲々只ならず覺え給ふ。準備しつる人々も、甚口惜と思へり。姫君(大)は況て仍音に聞く、着草の色なる御心なりけり。微に人の言ふを聞ば、男といふものは、虚言をこそ甚巧くすな

中君句宮に忘
らまては常の
給はんとは心
山里の紅葉
泊瀬詣、紅葉
衛覽いづれも
なり

ゆづらるゝ
大君の中君に
とゆづらるゝ
とまなりしこ
となり
とりかへす
ものにもかへす
や世の中を
はれあな憂と
なげきつるか
すちことに
此度の春宮に
もと句宮をば
帝の思召さる

女一宮に申
けり
伊勢物語の繪
阿保親王の五
男に在る五氏
なる故に五と
いへり
人の結ばん
伊勢物語に
もかし男に
をかし男に
を見居りて
をうらわみ
寝よげに見ゆ
結ばんことを
しぞ思ふこと
ど珍しきこと
のほぞらな
く物を思ひけ
なくかなら
ば心ゆるし
打とけたりし
ものなりし
ね見ん根と寝
とにかけたり

源氏物語活釋後編

輕々しき御有様と、世人も下に譏り申すなりと、衛門督(夕霧の)の洩し申し給
ければ、中宮も聞召し嘆き、主上も甚ど許さぬ御氣色にて、大方心に任せ給
る御里住の悪きなりけりと、嚴き事ども出来て、内裏に直と侍せ奉り給ふ。
左の大殿(夕霧)の六の君を、承引ず思したる事なれど、強て參せ給へく皆定め
らる。中納言殿聞き給て、駭なく物を思ひ歩き給ふ。我が餘り異様なるぞや。
然べき宿縁や有けん、親王の不安しと思したりし體も哀に忘れ難く、此君達
(中君)の御有様氣色も殊なる事なくて、世に衰へ給ん事の惜くも覺る餘りに、
人々しう待遇ばやと奇きまで苦慮るゝに、宮(句)も生憎に執心て責め給しか
ば、我が思ふ方は他なるに、讓るゝ有様も興なくて斯く周旋してしを、思は、
悔くもありけるかな。孰も我が物にて見奉んに咎むべき人もなしかし。取
返す物ならねど、思がましう心一つに思ひ亂れ給ふ。宮(句)は況て御心に懸ら
ぬ折なく、戀しう不安しと思す。明御心に着て思す人あらば、爰に參せて、
例様に悠閑に消光し給へ。筋殊に思ひ聞え給るに、輕びたる様に、人の聞へ
かめるも、甚なん口惜き」と、大宮(明石)は明暮聞え給ふ。時雨甚くして閑な
る日、女一宮(妹宮)の御方に參り給れば、御前に人多くも侍す、靜寂に御繪な

ど御覽する程なり。御几帳ばかり隔て、御物語聞え給ふ。限もなく貴に氣高
きもの乍、柔婉に美しき御氣色を、年來二つなきものに思ひ聞え給て、又此
の御有様に准ふ人世に有なんや。冷泉院の姫君(弘徽殿)ばかりこそ、御位地
の程、内々の御様子も奥床く聞れど、打出ん方もなく思し渡るに、彼山里人
は、可愛氣に貴なる方の劣り聞まじきぞかしなど、先づ思出るに、甚ど戀し
さ増る慰めに、御繪どもの數多散たるを見給ば、美しげなる女繪どもの、戀
する男の住居など書き交ぜ、山里の趣致き家居など、心々に世の有様書きた
るを、擬らるゝ事多くて御眼留り給ば、少し聞え給て、彼處へ奉んと思す。
在五が物語を書て、妹に琴教たる所の、人の結んと言たるを見て如何思すら
ん。少し近く參り寄り給て、句(古)の人も、然べき間は隔なくこそ習して侍り
けれ。甚疎々しうのみ遇させ給こそ」と、忍て聞え給ば、如何なる繪にかと
思すに、押卷き寄て御前に差入れ給るを、俯伏て御覽する御髮の打靡きて溢
れ出たる片側ばかり、微に見奉り給ふが飽す愛たく、少し血縁の隔たる人と
思ひ聞ましかばと思すに、忍び難くて、
句「若草の寝見んものとは思ねど、

總角

一腹一生の兄
妹なれば寝見
どらるは思はね
ましませば心
地むすぼると
なり結ぼると
根のむすぼるも
にかけたたり

なほかうなめ
りさりとと思
ひつれどなほ
是までなりと
見果つるなり
中納言在した
り宇治へなり

うとき人
他人の意なり

見苦しう
大君の心にな
りことさらにも
わざと死に
たき身を新
など要なしと
なり昨日の如
へだてふも
なり

結ほれたる心地こそすれ。」

御前なりつる女房は、此宮(句)をば殊に恥ぢ聞えて、物の後に隠れたり。事もこそあれ憂て奇しと思せば、物も宣す。道理にて二心なく物と言たる姫君も、戯て憎く思さる。紫の上の取分て此二所をば馴し聞え給しかば、数多の御中に隔なく思ひ交し聞え給り。世に無く冊き聞え給ひて、侍人々も偏に少し飽ぬ所あるは不合せなり。貴き人の御娘なども甚多かり。御心の移ひ易きは、珍き女房に、些く語ひ着きなどし給つ、彼邊(宇)を思し忘る折なきもの乍、訪れ給て日頃経ぬ。待ち聞え給ふ所は絶間遠き心地して、仍斯なめりと心細う眺め給ふに、中納言(薫)在したり。惱しげにし給ふと聞て、御見舞なりけり。甚心地惑ふばかりの御惱にもあらねど、托けて對面し給す。薫驚きながら遙けき程を參り來つるを、仍彼(大)の惱み給らん御邊近くと、切に覺束ながり聞え給ば、御簾の前に入れ奉る。甚傍痛き事と苦しがり給ど、氣憎くはあらで、御髮搔げ御答など聞え給ふ。宮(句)の御心も適で、在し過にし有様など語り聞え給て、薫悠長に思せ。焦躁して勿恨み聞え給そ」など教へ聞え給ば、大(愛)には兎も角も聞え給さめり。亡き人(宮)の御訓戒は、

斯る事にこそと見侍るばかりなん、最惜かりける」とて泣き給ふ氣色なり。甚心苦しう、我さへ恥しき心地して、薫世中は兎ても角ても一樣にて過す事難くなん侍るを、如何なる事をも御覽し知ぬ御心どもには、單に恨しなど思す事もあらんを、強て思し閑めよ。不安うは豈夫あらじとなん思ひ侍る」など、人の御上をさへ扱ふも、半は奇く覺ゆ。夜々は況て甚苦しげに爲給ければ、疎き人(薫)の御氣色の近きも、中君の苦しげに思したれば、仍例の彼方にと女房聞れど、薫況て斯く煩ひ給ふ程の不安さを思の儘に參り來て、出し放ち給れば、甚理なくなん。斯る折の御介抱も、唯かは抄々しく仕奉る」など、辨の御許に談合ひ給て、御修法ども初むべき事など宣ふ。甚見苦う、殊更にも厭しき身をと聞き給ど、斟酌なく宣んも憂てあれば、有繫に生存よと思ひ給る懇情も哀なり。又の旦に、薫些も快く思さるや。昨日ばかりにてだに聞させん」とあれば、大(日頃)経ればにや、今日は甚苦うなん。然ば此方に」と言出し給り。甚哀れに如何に在し給へきにかあらん。以前よりは懐しき御氣色なるも胸潰れて覺れば、近う參りて萬の事を聞え給ふ。大(苦)うて得聞えず。少し休息ん程に」とて、甚微に哀なる氣色を、限なう心苦しうて歎息居給へ

總角

ひとの國にま
りけん香の事な
り「九花帳深
夜情々反魂香
反二夫人之魂
夫人之魂在
何許一香煙
引到二焚レ香
處二白氏文
集この詩は
李夫人亡せて
後漢の武帝甘
泉殿の中に彼
の容を圖し方
士をして靈藥
を合せて焚きし
命爐に焚きし
かば香の煙の
見えし事なり
心々しく
無邪氣の意に
いつも用ゐる
片時
八宮のかくれ
給ひし時もか

參らん。罪深げなる身どもにて」と、後世をさへ思ひやり給ふ。他の國に有
けん香の煙ぞ、甚得ま欲く思さる。甚暗うなる程に、宮(句)より御使あり。
折節は少し憂悶慰みぬべし。御方(中)は疾にも見給はず。大「仍心美しく寛裕
なる態に聞え給へ。斯で果敢うも成り侍りなば、是より名残なき方に扱し聞
る人もや出らんと不安きを、稀にも此人(句)の思出で聞え給んに、然様なる有
まじき心用ふ人は得あらじと思は、冷淡ながらなん頼れ侍る」と聞え給へば、
中「後らさんと思しけるこそ甚う侍れ」と愈顔を引入れ給ふ。大「限あれば片時
も留らじと思しかど、生存る事なりけりと思ひ侍るぞや。翌知ぬ世の有繋に
嘆かしきも、誰が爲惜き命にかは」とて、大殿油參せて見給ふ。例の細かに
書き給て、

句「眺るは同じ雲居を如何なれば、

覺東なさを添る時雨ぞ。」

斯く袖漬る」などいふ事もやありけん耳馴にたるを、仍否じ事と見るに就て
も、恨しさ増り給ふ。然ばかり世に有難き御有様容貌を、甚ど如何で人に愛
られんと好ましく艶に舉止し給れば、若き人の心寄せ奉り給んも道理なり。

程經るに就ても戀しう、然ばかり所狭きまで約束置き給しを、然とも甚斯く
は止じと、思ひ直す心を常に添ける。御返事今夜參りなんと聞れば、是彼 咳
し聞れば、只一言なん、

中「霰降る深山の里は朝夕に、

眺る空も搔昏しつゝ。」

斯く言は神無月の晦日なりけり。月も隔りぬるよと、宮は靜心なく思されて、
今夜々々と思しつゝ、障多みなる程に、五節など疾く出來る年にて、内裏邊
趣致しく紛れ勝にて、故ともなけれど過い給ふ程に、淺ましう待遠なり。些
う人を見給ふに就ても、然は御心に離る折なし。左大臣殿(霧)の邊の事、大宮
(明石)も 明「仍然る安心なる御嫡妻を儲けて、其他の尋ねま欲う思さるゝ人あ
らば參せて、重々しく寵遇し給へ」と聞え給へど、暫し然思ふ給る様など聞
え角力給て、實際に憂き目は如何で見せんなど思す御心を知り給ねば、月
日に添て物をのみ思す。中納言(薰)も見し程よりは輕びたる御心かな。然とも
と思ひ聞けるも、最惜く心から覺えつゝ、一向參り給す。山里には如何に如
何にと見舞ひ聞え給ふ。此月となりては、些し快う在すと聞き給けるに、公

やうに思ひつ
れどもなり
あすしれぬ
中君故こそ命
をしけれとな
ぬ我身と思へ
今日暮れぬ間
かなしかりそ
れ
ながむるは
中君も我も同
じ雲井を眺む
てなるに何と
かなきおぼつ
時雨ぞとなり
かく袖ひづる
一神無月いつ
も時雨は降り
しかど斯く袖
ひづる折はな
かりき
なほあらじこ
と
さして熱心な
らねどもたは
とならんより
とし給ふわざ
思ひ直す

中君はなり
山は冬深き
心深なるは
一山なるは
外山なるは
づきのけら
の心なり都
にさぞあり
此方を思召
やれとなり
さはり多み
分け小船の
一人あはぬ
かなあはぬ
五節の十一
中の三日の
始は三日の
月の新嘗會
あり大忌小
と衣袋につ
ていふ事あ
故に上の障
多みよりや
出せるなる
し

物をの娘君
宇治の娘君
ちなり
かろむを思
おとさるゝ
参り給ひす
参り給ひす
何の罪なる
よからぬ心
恨みあふ身
そかやうの
ひもあらめ
のつみにて
なりの神に
へりの神に
か戀ひつて
はぬ何の罪
も一何の罪
中君に申さ
るなり日頃
看しから御
背しから御
せ給へと打
せ給へと打
少ししぞき
中君なり

源氏物語活釋後編

私物騒しき頃にて、五六日人も奉り給ぬに、如何ならんと打驚れて、理なき事の繁さを打捨てて、修法は癒り果て給までと宣ひ置けるを、快く成にけるとして阿闍梨をも返し給ければ、甚人少にて、例の老人(辨)出来て、御有様聞ゆ。辨、何處と痛き處もなく、甚大しからぬ御惱みに、物をなん更に食召ぬ。元來人に似給はず、纖弱に在す中に、此宮(匂)の御事出来にし後、甚ど物思したる體にて些き御菓物だに御覽じ入りし積りにや、淺ましく弱く成り給て、更に頼むべくも見え給ず。世に心憂く侍りける身の命の長さにて、斯る事を見奉れば、先如何で先立ち聞えなんと思ふ給へ入て侍る」と言も爲す泣く體道理なり。薫、何か斯とも告げ給ざりける。院にも主上にも、淺ましう事繁き頃にて、日來も得聞ざりつる覺束なさとて、往し方に入り給ふ。御枕上近くて物聞え給へど、御聲も無き様にて答へ給ず。薫、斯く重く成り給ふまで、誰も告げ給ざりけるが辛う、思ふに効なき事」と恨みて、例の阿闍梨、大方世に驗ありと聞る人の限、數多請じ給ふ。御法、讀經、翌日より初めさせ給んとて、殿人數多参り集ひ、上下の人立騒ぎたれば、心細さの名残なく頼もしげなり。暮ぬれば例の彼方にと聞えて、御湯漬など参せんと

すれど、薫、近くてだに見奉らん」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今少し氣近き方に、屏風など立させて入居給ふ。中君苦しと思したれど、此御中を、仍疎隔れ給ぬなりけりと皆思ひて疎くも遇し隔て奉らず。初夜より初て、法華經を不斷誦せ給ふ。聲尊き限十二人して甚尊し。火は此方の南の間に灯して内は闇きに、几帳を引上げて些し入りて見奉り給ば、老人們二三人を侍ふ。中君は直と隠れ給ぬれば、甚人少に心細くて臥し給るを、薫、何か御聲をだに聞せ給ぬ」とて、御手を捉へて驚し聞え給ば、心細くは覺えながら、物言ふが甚苦しくてなん。日來訪れ給ざりつれば、疎遠くて逝ぎ侍りぬべきにやと、口惜うこそ侍りつれ」と、息の下に宣ふ。薫、斯く侍れ奉りつる程まで、参り來ざりける事」とて、噓もよよと泣き給ふ。御髮など些し熱くぞ在しける。薫、何の罪なる御心地にか、人の嘆負ふこそ斯は有なれ」と、御耳に差當て物を多く聞え給ば、煩うも恥しうも覺て、顔を塞ぎ給り。甚ど嬾々と纖弱にて臥し給るを、空う見做て如何なる心地せんと、胸も挫けて覺ゆ。薫、日來見奉り給らん御心地も安からず思されつらん。今夜だに心安く打休せ給へ。宿直人侍ふべし」と聞え給ば、不安けれど、然る様こそはと思して、些し退

ば法の聲など
千鳥の聲を以
て不輕の聲に
とりなしよま
り曉の嵐にわ
びてとある詞
に合せ思ふべ
し
中君自身をい
はれたり
似たり
辨が中君の返
歌をとり傳へ
たるをいへり
御寺のおはせ
八宮の御はせ
御暇の由
何箇日といふ
暇文を奏聞
するなり
今は
かくまでなり
て本復の後蕭
をば背くべき
方なしとなり
さてのみこそ

なるもの乍、懐しう効ある體に取做し給ふものを、今はとて別れば、如何なる心地せんと思ひ惑ひ給ふ。宮の夢に見え給けん事思し合するに、斯う心苦しき御有様どもを、天翔りても如何に見給らんと推量れて、在し、御寺にも御誦經せさせ給ふ。所々に御禱の使出し立させ給ふ。公にも私にも御暇の由申し給て、祭、祓、萬に到ぬ事なくし給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何の驗も見えず。自身も平癒にあらんと、佛をも念じ給はこそあらめ。仍斯る序に如何で亡なん。此君、燕の斯く添ひ居て残なくなりぬるを、今は疎隔ん方なし。然とて斯う疎ならず見ゆる懇情の、見劣して我も人も見んが心安からず憂かるべき事。若し命強て留らば、病に托言て姿をも變てん。然てのみこそ永き心をも互に見果べき事なれと思ひ染み給て、兎あるにても角るにても、如何で此の思ふ事してんと思すを、然まで偉き事は得打出で給て、中君に、大、心地の愈頼しげなく覺るを、忌む事なん甚驗ありて壽延る事と聞しを、然様に阿闍梨に宣へ」と聞え給は、皆泣き騒て、女、甚有まじき御事なり。斯ばかり思し感める中納言殿も、如何敢なきやうに思ひ聞え給ん」と、似氣なき事に思て、頼し人(燕)にも申し次ねば、口惜う思す。斯

夫婦などのづか
みは疎くなる
ことありさ
はあらで出家
などしてよそ
なすがら志を互
に絶ぬ心を互
見果つべけれ
となり
出家の思ふこと
思ひ戒むこと
尼の形になる
光もなくして
雪のふる空な
り
かきくもり
ば日かげの
づらをかか
日なれはなる
人日蔭を冠に
ふも蔭を冠に
かくるなり糸
にて結びたり
やうにかたり
た

く籠り居給れば、聞き次つ、御見舞に振延へ在し給ふ人もあり。疎に思されぬ事と見奉れば、殿人、昵き家司などは、各自萬の御祈禱を爲させ歎き聞ゆ。豊の明は今日ぞかした、京思ひ遣り給ふ。風甚う吹て、雪の降る體慄しう荒惑ふ。都には甚斯しもあらじかした、人爲ならず心細うて、疎くて止ぬべきにやと思ふ契は憂けれど、恨むべうもあらず懐しう可愛氣なる御舉止を、只暫時にても、例になして思つる事ども語はゞやと、思ひ續て眺め給ふ。光もなく暮れ果ぬ。

燕「搔曇り日影も見ぬ奥山に、心を昏す頃にもあるかな。」

只斯て在するを頼みに皆思ひ聞えたり。例の近き方に居給るに、御几帳などを風の顯露に吹き做ば、中君奥に入り給ふ。見苦しげなる女房も、耻き隠れぬる程に、甚近う寄て、燕「如何思さる。心に思ひ残す事なく念じ聞る効なく、御聲をだに聞ず成にたれば甚こそ佗しけれ。後らかし給は甚う愛からんと、泣々聞え給ふ。物覺す成にたる體なれど、顔をば甚巧く隠し給り。大「快き隙あらば、聞え欲き事も侍れど、只消え入るやうにのみ成り行くは、只惜き

事にこそ」と、甚哀と思ひ給る氣色なるに、愈漚き留め難くて、忌々しう斯く心氣に思ふとは見じと憚み給ど、聲も惜まれず。如何なる宿縁にて限なく思ひ聞えながら、憂き事多くて別れ奉るべきにか。些し醜き態をだに見せ給はなん、思ひ冷す節にもせんと目成ど、愈憐れ氣に可憐く美しき里のみ見ゆ。腕なども甚細う成て、影の如に弱げなるもの乍、色合變らず白う美しげに嫋々として、白き御衣どもの柔軟なるに、衾を押遣て中に身もなき雛を臥せたらん心地して、御髪は甚夥多うもあらぬ程に打遣れたる、枕より落たる際の艶々と愛たう美しげなるも、如何に成り給なんとするぞと、有べきものにもあらざめりと見るが、惜き事類なし。許多久く惱て、引も粧ぬ容姿の、心解す尊貴氣に、限なう奉仕し騷ふ人にも多う増りて、細かに見る隨に、魂も鎮らん方なし。薰終に打捨て給ては、世に暫時も留るべきにもあらず。命萬一限ありて留るべうとも、深き山に漂泊なんとす。只甚心苦しうて、留り給ん御事をなん思ひ聞ゆる」と答へせさせ奉んとて、彼(中)の御事を懸け給ば、顔隠し給ふ御袖を些し引直して、大「斯く果敢かりけるものを、了解なきやうに思されたりつるも効なければ、此の留り給ん人(中)君を、同じ事と思ひ聞

心苦しうて
中君のことな

世中をことさ
らに
蕪のなり世よ
蕪のひはなれよ
蕪のすはめ給ふ
佛の方便にて
わざと悲きも
の思ひをせき
の給ふか
の心なり
と蕪

虫の空蟬はから
一見つはから
をさめつはから
の山煙だに深草
べし
の心なる立

え給へと微かし聞しに、違へ給ざらましかば安心からましと、是のみ憾しき節にて、留りぬべく覺え侍る」と宣へば、蕪斯く甚う物思ふべき身にやありけん、如何にも、他方に此世を思ひ繋ふ方の侍らざりつれば、御趣意に隨ひ聞ず成にし。今なん悔う心苦しうも覺る。然ども不安くな思ひ聞え給そ」など嘆へて、甚苦しげにし給へば、修法の阿闍梨們召入させ、種々に驗ある限して、加持參らせ給ふ。我も佛を念ぜさせ給ふ事限なし。世中を殊更に厭はれねど、勧め給ふ佛などの、甚斯く甚きものは思せ給ふにやあらん。見る隨に物の枯れ行く如にて、消え果給ぬるは甚き事かな。引留むべき方なく、足摺もしつべく、人の癡しと見ん事も覺ず。限と見奉り給て、中君の後れじと思ひ惑ひ給る體も道理なり。在にもあらず見え給ふを、例の賢しき女們、女「今は甚忌々しき事」と引避け奉る。中納言の君は、然とも如何斯る事ありじ。夢かと思して、御殿油を近う掲げて見奉り給ふに、隠れ給ふ顔も、只寢給る如にて、變り給る所もなく、美しげにて打臥し給るを、斯ながら虫の殻の如にても、見る事ならましかばと思ひ惑る。終焉の事どもする御髪を搔遣るに、颯と打香たる、只有しながらの香に、懐しう香しきも有難う、何事に

人の見思ふら
中君の匂宮に
忘られたる君
思ひ歎きて亡
せ給へればな

かう物思はせ
中君になり

限あれば御衣
夫婦の縁なけ
ればなり

ゆるし色の氷
紅の衣を打ち
たるつやの水
のやうに見ゆ
るなり
すだれまき上
「遺愛寺鐘歌
枕聴、香爐峯
雪撥、簾看」
(白樂天)
むかひの入り
の山寺の相
ごとの今日も
暮れぬとき
ぞ悲しき一夜
なりし言へ
今日もくろし
今日もくろし
今日もくろし

て此人を些も斜なりしと思ひ覺さん。眞に世中を思ひ捨果る嚮導ならば、恐
し氣に憂き事の悲さも、覺ぬべき節をだに見付させ給へ」と佛を念じ給ど、
甚ど思ひ閑ん方なくのみあれば、言ふ効なくて一向に煙にだに成し果んと思
して、兎角例の作法どもするぞ淺ましかりける。空を歩む如に彷徨つゝ、臨
終の有様さへ果敢げにて、煙も多く結ほれ給す成ぬるも敢なしと、惘れて歸
り給ぬ。御忌に籠る人數多くて、心細さは些し紛れぬべけれど、中君は人の
見思ふらん事も恥しき身の心憂さを思ひ沈み給て、又亡き人に見え給ふ。宮
(匂)よりも御見舞甚繁く奉れ給ふ。意外に難面と思ひ聞え給りし氣色も、思
し直らで止ぬるを思すに、甚愛き人の御由縁なり。中納言斯く世の甚心憂く
覺る序に、本意遂んと思さるれど、三條宮(女)の思さん事に憚り、此君(中)の御
事の心苦さとに懊惱て、彼の宣ひし如にて、形見にも見るべかりけるものを、
下の心は身を分け給りとも、移ふべくは覺ざりしを、斯う物思せ奉るより
は、只打語ひて盡せぬ慰安にも、見奉り通はましものをなど思す。苟且に京
にも出で給す、搔絶え慰む方なくて籠り在するを、世人も疎ならず思ひ給る
事と見聞て、内裏より初め奉りて、御見舞多かり。果敢くて日來は過ぎ行く。

七日々々の事ども甚出く爲させ給つゝ、疎ならず孝じ給へど、限あれば御衣
の色の変ぬを、彼の御方の心寄せ分たりし女房の、甚黒う着替たるを微見給
ふも、

薰紅に落る涙も効なきは、

形身の色を染ぬなりけり。」
禁色の氷解ぬると見るを、甚ど濡し添つゝ眺め給ふ體、甚優雅う清げなり。
女房覗つゝ見奉りて、女言ふ効なき御事をば勿論にて、此殿の斯く見慣ひ
奉りて、今はと他人に思ひ聞んこそ、可惜しう口惜けれ。思の外なる御宿
世にも在しけるかな。斯く深き御心の程を、旁に背せ給るよ」と泣合ひ。此
御方(中)には、薰昔の御形身に、今は何事も聞え承らんとなん思ひ給る。疎
疎しく思し隔つな」と聞え給へど、萬の事憂き身なりけりと、物のみ憚しく
て、未だ對面して物なども聞え給す。此君(中)は、明快なる方に今少し巨めき、
氣高く在するもの乍、懐しう餘韻ある性質を、劣り給りけると、事に觸て覺
ゆ。雪の搔昏し降る日、終日に眺め暮して、世人の凄き事にいふなる師走の
月夜の曇なく差出たるを、簾捲き上て見給ば、向の寺の鐘の聲、枕を敲て、

今日もぬと微なるを聞いて、

蒸後れじと空行く月を慕かな、

終にすむべき此世ならねば。」

風の甚烈しければ、蔀下させ給ふに、四方の山の鏡と見る汀の氷、月影に甚面白し。京の家の限なくと磨くも、得斯うはあらぬはやと覺ゆ。僅に息出で在し給ましかば、諸共に聞えましと思ひ續るぞ、胸より餘る心地する。

蒸戀ひ佗て死る藥の床しきに、

雪の山にや跡を消なまし。」

半なる偶教ん鬼もがな。托言て、身も投んと思すぞ、心汚き道心なりける。女房近う呼出で給て、御物語などせさせ給ふ様子などの甚有ま欲う、寛裕に心深さを見奉る人々、若きは心に染て愛たしと思ひ奉る。老たるは口惜う甚き事を甚と思ふ。女御心地の重く成せ給し事も、只此宮(句)の御事を意外に見奉り給て、胡慮に甚じと思すめりしを、有繋に彼の御方(中)には、斯く思ふと知れ奉じと只御心一つに世を恨み給めりし程に、些き御藥物をも聞召し人ず、只弱りになん弱せ給めりし。表には何ばかり事々しく、物深げにも舉動

與へん末の二
句を言へば生
滅已寂滅爲樂
と唱へたり童
子石壁に書き
つけて谷なる
鬼の方へ身を
投げてし童連
華を出してば
子を受け帝釋
天なりと經釋
あり心きたなき
戀に死なれば
よりなければ
求法にことつ
けて身を投げ
ばやと思はる
るをいふは
四十九日は
まだ日數のこ
りたれど忌み
あへず参られ
しなり
思しなげきた
大君のなり
今より
故姫君の知り

せ給て、下の御心の限なく何事も思すめりしに、故宮の御訓戒にさへ違ぬる事を、効なう人(中)の御上を思し惱み初しなり」と聞えて、折々に宣ひし事など語り出つ、誰も泣き感ふ事盡せず。我が心から、味氣なき事を思せ奉りけん事と、取返さま欲く、凡ての世も憂きに、念誦を甚哀れにし給て、交睫む程なく明し給ふに、未だ夜深き程の雲の氣色甚寒げなるに、人々聲數多して、馬の音聞ゆ。何人かは斯る真夜半に雪を分べきと、大徳達も驚き思るに、宮(句)狩の御衣に甚う微服て、濡々入り給なりけり。打叩き給ふ體然ななりと聞き給て、中納言は隠へたる方に入り給て、忍びて在す。御忌は日數残りたりけれど、待遠く思し佗て、夜一夜雪に惑されてぞ在しける。日來の憂さも紛れぬべき時なれど、對面し給へき心地もせず。思し歎きたる體の耻しかりしを、即て見直され給ず成にしも、今より後の御心更らんは効なかるべく思ひ泌て在し給れば、誰も甚う道理を聞え知せつ、物越にてぞ日來の怠慢盡せず宣ふを、情々と聞き居給る。是も存か亡かにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御氣色の心苦しさを、不安う甚じと宮も思したり。今日御身を捨て宿り給ぬ。物越ならでと甚く佗び給ど、中今少し物覺ゆる程に

總角

とぢこもり
薫のなり

いみじかりし
大君のみまか
られし時なり

女一宮の御方
句の御妹の女
らになど思し
よるかと申君
を重く思はる
るなり
おぼしよるめ
句の薫の中君
しと心うつる
ことなり

ばぶしわか
しわの光や
そわかみふ
にし里も花は
咲きけり
君の心なり
年姉君に別
移る節にお
かざりし春
かほらず來
となり
もとす
歌の上の句
下

君にとて
八宮の御時
嘉例を忘れぬ
となり

法事も殿しう爲させ給ふ。宮(句)よりも御誦經など、夥きまで見舞ひ聞え給ふ。斯てのみやは新しき年さへ嘆き過さん。爰彼處にも覺束なくて、閉ぢ籠り給る事を聞え給は、今はとて歸り給ん心地も喩へん方なし。斯く在し習て、人繁かりつる名残なくならんを思ひ侘る女房、甚かりし折の當面て悲かりし騒よりも、打静りて甚じく覺ゆ。時々折節聞しやかなる程に、聞え交し給し年來よりも、斯く閑静にて過し給る日來の御有様氣色の懐しく情深う、戯き事にも眞實なる方にも同情多かる御性質を、今は限に見奉り止つる事と涙涙合ひ。彼の宮(句)よりは、仍斯う参り來る事も甚難きを思ひ侘て、近う渡り奉るべき事をなん、思案出たると聞え給り。後の宮聞召し付て、中納言も斯く疎ならず思ひ毫て居たんなるは、實に一般に思ひ難うこそは誰も思さるらめと、心苦しがり給て、二條院の西の臺に渡り給て、時々も通ひ給へく忍て聞え給ければ、女一宮の御方に托言て、思し成るやうと思しなから、疎遠かまじきは嬉くて、宣ふなりけり。然ななりと中納言も聞き給て、三條宮造り果て、渡り奉らん事を思しものを、彼の御代りに准へても、見るべかりけるをなど、引返し心細し。宮(句)の思し寄めりし筋は、甚似氣なき事に思ひ離れ

で、大方の御後見は、我ならては又誰かはと思すとや。

早 藤

敷し分ねば、春の光を見給ふに就ても、如何で斯く生存にけん月日ならんと、夢の如にのみ覺え給ふ。往交ふ時々隨ひ、花鳥の色をも音をも同じ心に起臥見つゝ、些き事をも本末を取て言交し、心細き世の憂さも辛さも打語ひ合せ聞しにこそ、慰む方もありしか。興しき事哀なる節をも、聞き知る人もなき隨に、萬搔き昏し心一つを碎きて、宮(八)の在さず成にし悲さよりも、稍打増りて戀しく侘しきに、如何にせんと明け暮るも知らず惑れ給と、世に留るべき間は、限ある事なりければ、死なれぬも淺まし。阿闍梨の許より、文年改りては、何事か存すらん。御祈禱は油断なく仕う奉り侍り。今は一所(中)の御事をなん、安からず念じ聞えさする」など聞て、殿、土筆、趣致き籠に入れて、是は童の供養じて侍る初穂なり」とて奉れり。手跡は甚悪うて、歌は特とがましく引放ちて書たり。

阿君にとて
數多の春を摘しかば、
例を忘れぬ
初藤なり。

御前に讀み申さしめ給へ」とあり。大事を思ひ廻して詠出しつらんと思せば、歌の意味も甚憐にて、等閑に然しも思されぬなめりと見る言の葉を、愛たく好ましげに書き盡し給る人(匂)の御文よりは、此上なく眼留りて涙も零るれば、返事書せ給ふ。

中「此春は誰にか見せん亡き人の、

形見に摘る峯の早蕨。」

この春は誰にか見せん亡き人の、形見に摘る峯の早蕨。使に祿取せさせ給ふ。甚盛に匂多く在する人(中)の、種々の御物思に、少し打面瘦せ給るしも、甚貴に優雅しき氣色増りて、昔人にも肖え給り。並び給りし折は、更に似給りとも見ざりしを、打忘れては、偶と其かと覺るまで似ひ給るを、中納言殿(薫)の、骸をだに留めて見奉るものならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給めるに、同くは見え奉り給ふ御宿世ならざりけんよと、見奉る女房は口惜がる。彼の御邊の人の通ひ來る便宜に、御有様は絶ず聞き交し給り。盡せず思ひ惹れ給て、新しき年ともいはず、いや眼になん成り給りと聞き給ても、實に一向の心淺さには在し給ざりけりと、甚ど今ぞ哀も深く思ひ知る。宮(匂)は在す事の甚所狭く有難ければ、京に渡し聞んと思し立にたり。

内宴大方正月中にありて作文な

下枝を折て薫の

折る人の法を治

君のたえぬは中

かごととあるは

人の後上さへ

内宴など物騒しき頃過して、中納言の君、心に餘る事をも又誰にかは語はんと思し佗て、兵部卿宮の御方に参り給り。寂靜なる夕暮なれば、宮打眺め給て、端近くぞ在しける。箏の御琴撥鳴しつゝ、例の御最負なる梅の香を愛で在する。下枝を押折て参り給る香の甚艶に愛たさを時節興しう思して、句「折る人の心に通ふ花なれや、色には出ず下に香へる。」

と宣へば、

薫「見る人に啣言寄ける花の枝を、

心してこそ折べかりけれ。

煩しく」と、戯れ交し給り。甚好き御問なり。細かなる御物語どもになりては、彼の山里の御事をぞ、先は如何にと宮は聞え給ふ。中納言も、過にし方の飽ず悲き事、既往より今日まで愛念の絶ぬ由、折々に就て、哀にも興しうも、泣み笑みとかいふらんやうに聞え出給ふに、況て然ばかり色めかしう涙脆なる御癖は、人の御上にてさへ袖も絞るばかりに成て、効々しくぞ應答ひ聞え給ふめる。空の氣色も將た、實にぞ哀知り貌に霞み渡れる。夜に成て

ためしちり
たかりける
薫の大君に
事なかりし
つびをいへ
なげかしき
薫のなり

便なくや
句の疑ひ給
てはとなり
岩瀬の森の
一戀しよば
人も見よか
の森の呼子
なともあひ
なり

ふし心な
中君の心
我が世は
の菅原の
の里の荒
も惜し一
の巻にけ
の山にけ
らんと宇
にしなふ
けりしな
しなして
るなり
とよにて
に君と給
中君と給
どもと給
やけと給
所へと給
御前も給
亡せ給へ
十日の敷
る二月に
みそぎな
川の浅き

源氏物語活釋後編

烈う吹き出る風の氣色、又冬めきて甚寒げに、大殿油も消つ、闇は黒白なき
迎々しきなれど、互に聞止し給へくもあらず、盡せぬ御物語を、得晴けやり
給はで、夜は甚う更ぬ。世に例あり難かりける中の睦を、率然とも甚然のみ
はあらざりけん、残りけに問ひ做し給ぞ、理なき御性癖なめるかし。然
ながら、物に心得給ひて、嘆かしき心の中も曉むばかり、半は慰め、又哀
をも冷し、種々に語ひ給ふ御様子、風情きに嘆され奉りて、實に心に餘る
まで、思ひ結ほる、事ども、些づ、語り聞え給ふぞ、此上なく胸の隙明く心
地し給ふ。宮も彼人(中)近く渡し聞てんとする程の事ども、語ひ聞え給ふを、
「甚嬉き事にも侍るかな。効なく自身の過失となん思ふ給らる、飽ぬ昔
(大)の名残を又尋へき方も侍らねば、大方には何事に就ても、心寄せ聞へき人
となん思ひ給るを、若し便なくや思召るべき」とて、彼の他人となん思ひ分そ
と、譲り給し心掟をも、少しは語り聞え給と、岩瀬の森の呼子鳥めいたりし
夜の事は残したりけり。心の中には、斯く慰め難き形身にも、實に然てこそ
斯様にも扱ひ聞へかりけれと悔き事漸う増りゆけど、今は効なき物ゆゑ、常
に斯のみ思は、有まじき心もこそ出来れ。誰が爲にも味氣なく愚がましから

んと思ひ離る。扱も在さんに就ても、眞に思ひ後見聞えん方は又誰かはと思
せば、御邊の事ども準備せさせ給ふ。彼處にも妍き若人童など求めて、人々
は満足顔に急ぎ思たれど、今はとて此伏見を荒し果んも甚う心細ければ、嘆
かれ給ふ事盡せぬを、然とても又切て心強く絶え籠りても偉かるまじく、
句淺からぬ中の契も、絶え果ぬべき御住居を、如何に思し得給ふぞ」とのみ
恨み聞え給ふも、些は道理なれば、如何すべからんと思ひ亂れ給り。二月の
朔日頃とあれば、程近くなるまゝに、花の木どもの氣色ばむも残床しく、峯
の霞の立つを見捨ん事も、己が常世にてだにあらぬ旅寝にて、如何に妨く胡
盧なる事もこそなど、萬に恥しく、心一つに思ひ明し暮し給ふ。御服も限
ある事なれば脱捨て給ふに、御後も深き心地とする。親一所は見奉らざり
しかば、戀しき事も思はず、其の御代にも、此度の衣を、深く染んと心には
思し宣へど、有繋に然べき故もなき事なれば、飽ず悲き事限なし。中納言殿
より、御車、御前驅の人々、博士など奉れ給り。
薫果敢しや霞の衣裁し間に、
花の紐解く折も來にけり。」

けたり服の解
 除に川に出
 御後するな
 業一舟をば
 舟君をば見
 られざりしな
 らば姉君を母
 如くに思はる
 るなり
 さるべき故も
 姉君の服を母
 君の如く長く
 はすべきなら
 ぬなり
 御車御せん
 御後河邊に
 出でらるる
 意を薫より
 らせらるる
 り
 はかせ
 御鞍の爲御
 陽師を奉ら
 たるべし
 はかなしや
 大君の事を
 日今日と思
 しにはや中
 の除服とも
 の衣は服衣
 の衣は服衣

實に種々甚美麗にて奉れ給り。御渡の程の祿どもなど、事々しからぬもの
 から種々に細やかに思しやりつゝ、甚多かり。折に就ては、忘ぬ體なる御心寄
 の有難く、女同胞なども、得甚斯までは在せぬ事ぞ。など、女房は聞え知す
 鮮ならぬ老人の心には、斯る方を心に染て聞ゆ。若き女房は、時々も見
 奉り馴ひて、今はと他方に成り給んを淋々しく、女如何に戀しく覺させ給
 ん」と聞え合ひ。自身(薫)は渡り給ん事明日との未だ早朝在したり。例の客
 人居の方に在するに就ても、今は漸う物馴て、我こそは人より先に斯様にも
 思ひ初しかなど、過し事、宣ひし戀情を思ひ出つゝ、有繋に距れ殊の外にな
 どは辱め給ざりしを、我心もて奇うも距りにしかなど、胸痛く思ひ續けられ
 給ふ。垣間見せし障子の穴も思ひ出らるれば、寄て見給へど、此中をば下し
 籠たれば甚効なし。内にも女房思ひ出で聞つゝ、打撃み合ひ。中君は況て催
 さるゝ御涙の川に、翌日の渡も覺え給はず、毫々しげにて眺め臥し給るに、
 薫月來の積も、何となけれど慥く思ふ給らるゝを、片端も明らめ聞させて慰
 め侍らばや。例の侮くな差放せ給そ。甚と有ぬ世の心地し侍り」と聞え給れば、
 中無禮と思れ奉らんとしも思ねど、否や心地も例の如にも覺す搔亂りつゝ、

花のひもとく
 は除服のこと
 にいへり

所近く
 中君は二條院
 薫は三條宮造
 り出て渡らる
 る故に言へり

宿をばかれ
 此里をばかれ
 じと思ふ心は
 深く侍れど近
 くと又うれし
 けて又うれし
 くもありさま
 るまに思ひ亂

甚と抄々しからぬ儼事もやと、憚しうてなん」と心苦しげに思いたれど、最
 惜などは彼聞えて、中の障子の口にて對面し給へり。甚尊貴げに優雅て、
 又此度は成熱増り給にけりと、眼も驚くまで多く、人にも似ぬ用意など、
 噫愛たの人やとのみ見え給るを、姫君は面影去ぬ人(大)の御事をさへ、思ひ出
 で聞え給ふに、其憐と見奉り給ふ。盡せぬ御物語なども、今日は言忌すべく
 やなど言止つゝ、薫渡せ給へき所近く、此頃過して移ひ侍るべければ、夜中
 曉と世俗しき人の言ひ侍るめる、何事の折にも疎からず思し宣せば、世に
 侍ん限は、聞させ承りて過さま欲うなん侍るを、如何は思召すらん。人の
 心種々に侍る世なれば、効なくやなど、一方にも得こそ思ひ侍らね」と聞え
 給ば、中「宿をば離じと思ふ心深く侍るを、近くなど宣するに就ても、萬に亂
 れ侍りて、聞させやるべき方もなくなん」と、所々言ひ消て、甚く物哀れと思
 ひ給る様子など、甚酷う肖え給るを、心から他の物に見做つると、甚悔しく
 思ひ給れど、効なければ、其世の事決ても言はず、忘れにけるにやと見るまで、
 明快に舉動し給り。御前近き紅梅の色も香も懐しきに、鶯だに見過し難げに、
 打啼て渡るめれば、況て春や昔のと心を感し給ふ同志の御物語に、折哀れな

橋ならねど、昔の香をかば、橋の香を人の袖に香ぞする。心とめて大君のなり見人なり中君自らも迷ふは京へうつるに、心けを亂るは、大君をいへり、そでふれし大君のなり根をいへり、京へ移らるるをいへり。

中「見る人も嵐に迷ふ山里の、昔覺る花の名ぞする。」

言ともなく微にて絶々聞たるを、懐しげに打誦しなして、

「薫袖觸し梅は變ぬ香にて、

根ごめ移ふ宿や他なる。」

絶ぬ涙を容好く拭ひ隠して、言多くもあらず、薫又も仍斯様にてなん、何事も聞させ寄べき」など聞え置て立ち給ぬ。御邊に有べき事ども、女房に宜ひ置く。此宿守に、彼の鬚勝の宿直人などは侍ふべければ、此邊の近き御莊どもなどに、其事ども宜ひ預けなど實際なる事どもをさへ定め置き給ふ。辨ぞ辨斯様の御供にも思ひ懸ず、長き命甚憂く覺え侍るを、人も忌々しと思へければ、今は世に在るものとも人に知れじ」とて、姿も變てけるを、強て召出て甚哀れと見給ふ。例の昔物語など爲させ給て、薫此處には仍時々は參り來

いとたつぎな誰も知りたる人なくはりの意こもりたりいとふにけえてにくさのみ根ぬはの池のいとふにはゆるけるにぞありなべての世を身一つのおがからなへてつるかな恨みひたひのほど下げ尼のさまなりなどかゝるさま大君の病にともつかへんと申し君に申されしをいことあるまじきこととてさ薫にも申次がざりしを死後

べきを、甚便宜なく心細かるべきを、斯て在し給んは、甚哀れに憐かるべき。事になん」など、得も言爲らず泣き給ふ。辨厭ふに延て延び侍る命の憂く、又如何にせよとて打捨させ給けんと恨しく、凡ての世を思ふ給へ沈むに、罪も如何に深く侍らん」と、思ひける事どもを憂へかけ聞るも痴しけれど、甚好く言ひ慰め給ふ。甚く老にたれど、昔美麗げなりける名残を、削ぎ捨たれば、額の邊容變れるに、少し若くなりて、然る方に閑雅なり。思ひ侘ては何ど斯る體にも成し奉らざりけん。其に延る様もやあらまし。扱も如何に心深く語ひ聞えてあらましなど、一方ならず覺え給ふに、此人さへ羨しければ、隠へたる几帳を少し引遣りて、細かにぞ語ひ給ける。無下に思ひ耄たる體ながら、物打言たる氣色、用意口惜からず、趣致ありける人の名残と見たり。辨「先に立つ涙の川に身を投げ、人に後れぬ命ならまし。」

と打擧み聞ゆ。薫「其も甚罪深かなる事にこそ。彼岸に到る事、何か然しも非業き事にて深き底に沈み過さんも効なし。凡て空しく思ひ取るべき世になん」など宣ふ。

薫身を投ん涙の河に沈ても、

戀しき瀬々に忘しもせじ。」

如何ならん世に、些も思ひ慰むる事ありなると、終もなき心地し給ふ。歸ん方もなく眺られて、日も暮にけれど、漫に旅寝せんも人の咎る事やと効なれば、歸り給ぬ。思し宣へる事を語りて、辨は甚ど慰め難く昏惑ひたり。人は心適たる氣色にて物縫ひ營みつゝ、老曲める容貌も知ず粧ひ騒ふに、愈

辨人皆急ぎたつめる袖の浦に、

一人藻鹽を垂るあまかな。」

と憂へ聞れば、

中「潮垂るあまの衣に異れや、

浮たる浪に濡る我が袖。」

世に住み着む事も甚有難かるべき事と覺れば、事態に隨ひて、爰をば荒れ果じとなん思ふを、然ば對面もありぬべけれど、暫しの間も心細くて、立ち留り給ふを見置くに甚ど心も適ずなん。斯る姿なる人も必ず一向にしも、絶え

ぞなきこと
なれやはこと
なれやはこと
なれやはこと
見給へ來よ
三條宮へ來よ
となり

ありふれば
初瀬河に流れる
あふ瀬もあり
ける瀬もあり
宇治河と思ひ
こよなくとも
心あさしとな

籠らぬ事なめるを、仍尋常に思ひ做て、時々も見え給へしなど、甚懐しう語ひ給ふ。昔の人(君)の使用給し然べき御調度どもなどは、皆此人に留め置き給て、中「斯く人より深く思ひ沈み給るを見れば、先世も取分たる宿縁もや在し給けんと思ふさへ、睦しく憐になん」と宣ふに、愈童の戀て泣く如に、心鎮ん方なく涙涙居たり。皆搔拂ひ萬取纏めて、御車ども寄て、御前驅の人々四位五位甚多かり。御自身(匂)も甚う在さまほしけれど、事々しくなりて却々悪かるべければ、只忍たる體に擬して、不安く思さる。中納言殿よりも、御前驅の人々數多く奉れ給り。大方の事をこそ、宮(匂)よりは思し置つめれ。細なる内々の扱ひは、只此殿より、思ひ寄ぬ事なく贈遣ひ聞え給ふ。日暮ぬべしと、内にも外にも催し聞るに、心慌しう、何地ならんと思にも、甚果敢く悲しとのみ覺え給ふに、御車に乗る大輔の君といふ女房の聞ゆ。大輔「有経れば嬉き瀬にも逢けるを、

身を宇治河に投てましかば。」

打笑たるを、辨の尼の離情に、此上なくもあるかなと厭う見給ふ。今一人、女房「逝にしが戀しき事も忘ねど、

縁起を思ひ
ふなり

今日將た先もゆく心かな。
孰も年経たる女房にて、皆彼の御方(君)をば、心寄せま欲く聞たりしを、今は斯く思ひ改めて言忌するも、心憂の世やと覺え給ば、物も言れ給す。路の程遙けく険しき山路の有様を見給ふにぞ、難面にのみ思ひ做れし人の御中の通ひを、道理の絶間なりけりと些し思し知れける。七日の月の清かに差出たる影興しく霞みたるを見給つ、甚遠きに慣す苦しければ、打眺られて、中眺れば山より出て行く月も、

世に住み侘て山にこそ入れ。

事態變りて、終に如何ならんとのみ危く行末不安きに、年來何事を思けんぞ、取返さま欲さや。宵打過てぞ在し着たる。見も知ぬ體に、眼も輝く心地する殿作りの、三葉四葉なる中に曳き入て、宮(匂)疾と待ち在しければ、御車の許に自身寄せ給て下し奉り給ふ。御装置など有べき限して、女房の局々まで、御心留させ給ける程著く見て、甚有ま欲げなり。如何ばかりの事にかと見え給る御有様の、俄に斯く定り給ば、臆氣ならず思さるゝ事なめりと、世人も奥床く思ひ驚きけり。中納言(薰)は三條宮に、此廿餘日の程に渡り給んと

て、此頃は日々在しつゝ見給ふに、此院(二條)近き程なれば、様子も聞んとて夜更るまで在しけるに、奉り給る御前驅の人々歸り参りて、有様など語り聞ゆ。甚う御心に入て、厚遇し給なるを聞き給にも、半は嬉さものの乍、有紫に我心ながら思がましく胸打潰れて、物にもがなやと返すく獨語れて、

薰科照や鳩の湖に漕ぐ舟の、

真帆ならねども逢見しものを。

とぞ言ひ腐さま欲さ。左の大殿(夕)は、六の君を宮(匂)に奉り給ん事、此月にと思し定めたりけるに、斯く思の外の人を、此程より先にと思し貌に冊き据ゑ給て離れ在すれば、甚不快氣に思したりと聞き給も最惜ければ、御文(匂)は時々奉り給ふ。御裳着(君)の事、世に響て急ぎ給るを、延べ給んも胡慮なるべければ、廿餘日に着せ奉り給ふ。同じ縁類に珍げなくとも、此中納言をこそ、人に譲んが口惜きに、然もや成てまし。年來人知ぬものに思けん人(君)をも亡なして、物心細く眺め居給なるをなど思し寄て、然べき人して氣色取せ給けれど、薰世の果敢さを眼に近く見しに、甚心憂く身も忌々しく覺れば、如何にもく然様の有様は物憂くなん」と、荒涼げなる由聞き給て、如何で

ものにもがな
池にすむ我
名をすむの
もがなや人
根がなや人
しなては片
この枕詞は
つもいふ上
級のたては
の故にいは
るは片はへ
ぞこゝは思
を作者の思
まが(まほ)な
はかたほな
ば片の意に
用ひたるか
まほなるか
もは實事な
かりし近き
中君に近き
とはあるを
珍しげなく
夕霧と薫と
表面は弟は

寄生

その頃、前にはさかの推本、
の邊にありたる、
故左大臣、
誰ともなし、
人より先に、
梅枝の巻に、
ふの宮を、
君おさへて、
娘を夢とせ、
麗景殿と、
後藤殿と、
なるべしと、
移る

其頃藤壺と聞るは、故左大臣殿の女御になん在しける。未だ春宮(今上)と聞させし時、人より先に参り給にしかば、睦しう憐なる方の御寵は殊に在し給れど、其験と見る節もなく、年経給ふに、中宮(明石)には宮達さへ數多許多成人給ふめるに、然様の事も少く、只女宮(宮女二)一所をぞ持ち奉り給りける。我が甚口惜う人に壓れ奉りぬる宿世、嘆しく覺る代りに此宮をだに、如何で行末の心も慰むばかりにて見奉らんと、冊き聞え給ふ事疎ならず。御容貌も甚美しく在すれば、帝も可愛きものに思ひ聞させ給り。女一宮を世に類なき體に厚過ぎ聞させ給ふに、大方の世の待遇こそ及ぶべうもあらね、内々の御有様は、一向劣ず、父大臣の御威勢嚴しかりし名殘甚く衰へねば、殊に不足き事などなくて、侍ふ女房の服装姿容より初め、怠なく時々につつ、整へ好みて、賑しく趣致しき體に遇し給へり。十四に成り給ふ年、御裳着せ奉り給んとて、春より打初めて、他事なく思ひ急ぎて、何事も尋常ならぬ體にと申し設く。古(左大臣)より傳りたりける寶物ども、此折にこそはと深し出つ、

禁中へは母女、
御里にあら、
れしなるべし

うつろひはて、
うつろひ盛ひ、
とつろひ又ひ、
さかるとりなり

甚く營み給ふに、女御(藤)夏頃靈氣に煩ひ給て、甚果敢く亡せ給ぬ。言ふ妙なく口惜き事を主上にも申し嘆く。性質情々しく、懐しき所在しつる御方なれば、殿上人ども、此上なく淋々しかるべき事かなと惜み聞ゆ。大方然まじき際の女官などまで偲び聞ぬはなし。宮(女)は況て若き御心地に、心細う悲く思し入たるを聞召して、心苦しう哀れに思し召るれば、御四十九日過るまゝに、忍て参らせ給へり。日々に渡せ給つ、見奉らせ給ふ。黒き御衣に妻れて在する容、甚ど可愛氣に貴なる氣色増り給り。御性質も甚好く成人び給て、母女御よりも、今少し沈着に、重厚なる所は増り給るを、安心くは見奉らせ給へど、實際には御母方とても、後見と頼せ給べき伯父などやうの、抄々しき人もなし。僅に大藏卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりけり。殊に世の聲譽重りかにもあらず、貴からぬ人々を、頼し人にて在せんに、女は心苦しき事多かりぬべきこそ最惜けれなど、御寂慮一つなるやうに思し扱ふも安からざりけり。御前の菊褪色果て盛なる頃、空の氣色も哀れに雨るにも、先づ此御方に渡せ給て、昔の事など聞させ給ふに、御答なども寛濶なるものから、幼稚からず打聞えさせ給ふを、愛しく思ひ聞えさせ給ふ。斯様なる御様

寄生

思ふ人もたり
宇治の大君を
思さるゝとて
女二宮を疎略
になどほされ
ぬ薫の本性と
なり
終には
本台の定まる
べしとなり

子を見知ぬべからん人の、持映し聞んも何かはあらざらん。朱雀院の姫宮(三)女を、六條院(源氏)に譲り聞え給し折の敕定どもなど思し出るに、暫くは率や飽ずもあるかな。然でも在しなましと聞る事どもありしかど、源中納言(薫)の他より殊なる有様にて、斯く萬を後見奉るにこそ、往時の御聲譽衰へず、貴き體にては生存へ給めれ。然ずは御心より外なる事も出でて、自然人に輕められ給ふ事もやあらましなど思し續て、兎も角も御覽する世にや、思ひ定ましと思し寄るには、即て其序の隨に此中納言より外に好しかるべき人又なかりけり。宮達の御傍に差並べたらんに、何事も眼覺しくはあらじを、元より思ふ人持りとて、聞醜き事など打交まじう將た有めるを、終には然様の事なくても得あらじ。然ぬ先に然もや微めかしてましなど、折々思召しけり。御基など打せ給ふ。暮行く隨に、時雨風情き程に、花の色も夕映したるを御覽じて、人召て「帝、只今殿上に誰々か」と問せ給ふに、侍・中務親王、上野親王、中納言源朝臣侍ふ」と奏す。帝「中納言朝臣此方に」と仰事ありて、參り給り。實に斯く特殊て召出るも効ありて、遠く香れる香より初め、人に殊なる容し給り。帝「今日の時雨常より殊に長閑なるを、管絃など荒涼き方にて甚徒

これなんよか
るべき
「送春唯有
酒鎖」日不
レ過「春」白氏
文集
先づ今日は
のりものを
出すべきなれど
も先づ今日は
とたり
朗詠「開得園
中花養」
請君許「折二」
枝
よのつねの御事
をふくみたし
霜にあへず
か女御もなき
母にたへたり
残の色は前に
移ひ果て盛
なるといへる
本意にもあら

然なるを、徒に日を送る戯にても、是なん好るべき」とて、基盤召出で、御基の敵手に召寄す。何時も斯様に氣近く性し纏し給ふに慣れたれば、然にこそはと思ふに、帝「好き賭物は有ぬべけれど、輕々しくは得渡すまじきを、何をかは」など宣する御氣色、如何見らん、甚ど用意して侍ひ給ふ。然て打せ給ふに、三番に數一つ負させ給ぬ。帝「憾き事かな」とて、帝「先づ今日は彼花一枝許す」と宣すれば、御答聞させて、下て雅致き枝を折て、參り給へり。

薫「普通の垣根に匂ふ花ならば、

心の隨に折て見ましを。」

と奏し給る用意淺からず見ゆ。

帝「霜に敢ず枯にし園の菊なれど、

残の色は褪ずもあるかな。」

と宣はす。斯様に折々微かさ給ふ御氣色を、人傳ならず受け給ながら、例の心の癖なれば、急しくも覺す。率や本意にもあらず、種々に最惜き人々の御事どもをも熟く聞過しつゝ、年經ぬるを、今更に聖僧様の者の、世に返り

跡にえなまし
山賤に笑はれ
なくなる方ま
しとなり

必ざさるさま
に在せま
り世ならばな

覺て、貴き方(女二)方に、疾などは急ぐ心もなし。左の大殿(夕)には急ぎ立て、八月ばかりにと聞え給てげり。二條院の對の御方(中)には聞き給に、然ばよ如何でかは數ならぬ有様なめれば、必ず胡慮に憂き事出らんものぞとは、思ふ思ふ過しつる世ぞかし。仇なる御心と聞き渡りしを頼もしげなく思ながら、眼に近くては殊に憂氣なる事も見ず、切に深き契をのみし給るを、俄に變り給ん程、如何は安き心地はすべからん。平人の間などのやうに、甚しも名残なくなどはあらずとも、如何に安氣なき事多からん。仍甚憂き身なめれば、終には山住に換るべきなめりなど思すにも、即て跡絶なましよりは、山賤の待ち聞んも胡慮なりかし。返すくも故宮(八)の宣ひ置し言に違て、草の許を離にける心輕さを、耻うも憂くも思ひ知れ給ふ。故姫君(大)の甚柔婉く物果敢き體にのみ、何事をも思し宣しかど、心の底の重厚なる所は、此上なくも在しけるかな。中納言の君(兼)の、今に忘らるべき世なく嘆き渡り給めれど、若し世に在せましかば、又斯様に思す事は有もやせまし。其を甚深う如何で然はあらずと思ひ入り給て、右方左方に拒絶ん事を思して、姿をも變てんとし給しぞかし。必ず然る體にてぞ在せまし。今思ふに如何に重厚なる御性

例ならぬ
懷妊なり

其日など
六の君の参ら
るゝことなり

かくわたり
中君の参られ
しよりはなり

格ならまし。亡き御蔭ども、我をば如何に此上なき輕率さと見給らんと、耻しう悲く思せど、何かは効なきもの故、斯る氣色をも見え奉らんと忍び返しつゝ、聞も入ぬ體にて過し給ふ。宮(匂)は常よりも切に懷しう起臥語ひ契つゝ、此世のみならず、長き事をのみぞ頼め聞え給ふ。然は此五月ばかりより、例ならぬ體に惱しうし給ふ事もありけり。甚大く苦しがりなどはし給ねど、常よりも食參る事甚ど無く臥てのみ看するを、未だ様なる人の有様など、熱も見知り給ねば、只暑き頃なれば、斯く在するなめりとぞ思しける。有繋に奇しと思し答る事もありて、匂「若し如何なるぞ。然る人(妊)こそ然様には惱むなれ」など、宣ふ折もあれど、甚耻しうし給て、然氣なくのみ舉止し給るを、差過ぎ聞え出る人もななければ、確にも得知り給す。八月に成ぬれば、其日など他よりぞ傳へ聞き給ふ。宮は隔んとにはあらねど、言出ん程心苦しう最惜く思されて、然も宣ぬを、女君は其さへぞ心憂く覺え給ふ。忍たる事にもあらず、世中惣て知たる事を、其程などだに宣はぬ事と、如何恨しからざらん。斯く渡り給にし後は、殊なる事なければ、内裏に参り給ても、夜泊る事は殊にし給す。爰彼處の御夜離などもなかりつるを、俄に如何に思

かかねてより
つらさを人に
習はさすに
かなしはる
かたりにて
はかねてより
はさるゝ用
を中君はみ
す方なり

同じ身ぞと
中君を自身
同じぞとて
しことなり
ふて連れゆ
しことなり

ひ給んと、心苦しき紛しに、此頃は時々御宿直とて、參内などし給つゝ、豫てより習し聞え給をも、只憂き方にのみ思ひ隔れ給へき。中納言殿も、甚最惜き事かなと聞き給ふに、花心に在する宮なれば、憐とは思すとも、賑しき方に必ず御心移ひなにかし。女方も甚嚴重に在し給ふ邊にて、緩びなく聞え纏し給は、月來も然も慣ひ給で、待つ夜多く過し給んこそ哀なるべけれなど、思ひ寄るに就ても、効なしや我が心よ。何しに譲り聞けん。昔の人(大)に心を染てし後、大方の世をも思ひ離れて、澄み果たりし方の心も濁り初しかば、只彼御事(大)をのみ兎方角方には思ながら、有繋に人(大)の心許されであらん事は、初より思し本意なかるべしと憚りつゝ、只如何にして些も哀れと思れて、打解け給らん氣色をも見んと、將來の希望事のみ思ひ續しに、人(大)は心にもあらず遇して、有繋に一向にしも得差放つまじう思ひ給る慰安に、同じ身ぞと言做て、本意ならぬ方(中)に赴け給しが憾く恨しかりしかば、先づ其意志を違んとて、急ぎ爲し事ぞかしなど、強ちに女々しう物狂しく、率て歩き謀り聞し程思ひ出るも、其怪からざりける心かなと、返すくぞ悔しき。宮も、然とも其程の有様思出で給は、我が聞ん所を些は憚り給じやと思

おもひおきて
しさまをたが
へ中君を薫に
こそ思ひしを
れしことなり
おとるよじき
孫王などもあ
るべし
女三宮に奉仕
せしめらるゝ
なり

に、率や今は其折の事など懸ても宜ひ出さめるかし。仍仇なる方に進み移り易なる人は、女の爲のみにもあらず、頼しげなく軽々しき事も有ぬべきなめりかしなど、憎く思ひ聞え給ふ。我が眞に餘り一方に染たる性癖に、人は甚此上なく誹しく見るなるべし。彼人を空う見奉り做てし後思ふには、帝の御女を賜んと、思し置つるも嬉くもあらず。此君(中)を得ましかばと覺る心の月日に添て増るも、只彼(大)の御由縁と思ふに、思ひ離れ難きぞかし。同胞といふ中にも、限なく思ひ交し給りしものを、今はと成り給にし果にも、留らん人を同じ事と思へとて、萬は遺憾なる事もなし。只彼の思ひ掟てし事を違へ給るのみなん、口惜う恨しき節にて此世には残りぬべきと宣しものを、天翔りても、斯様なるに就ては甚と難面とや見給らんなど、徒然と人爲ならぬ獨寢し給ふ夜々は、些き風の音にも眼のみ覺つゝ、過去將來の人の上さへ、味氣なき世を思ひ廻し給ふ。些の戯に物をも言觸れ、氣近く仕ひ馴し給ふ女房の中には、自然憎からず思さるゝも有ぬべけれど、實際には心留るもなきこそ澹如なれ。然は彼君達(大君)の階級に、劣るまじき際の女房も、時世に随つゝ衰へて、心細氣なる住居するなどを尋ね取つゝ在せなど甚多かれど、今はと

いでもわろ
く治の姫君に
よりて物思ひ
つきしをねぢ
けてゐるしと
思はるゝなり
あくるま吹き
て朝顔は常な
き花の色なれ
やあくる間吹
きて移ひにけ
り

おくつゆの
かくはかなく
消えやすきも
のと見でつ
なほ愛でつ
きとなり大君
のこをいへ

をみなへしを
一をみなべし
愛しと見つ
ぞゆきすぐ
男山にし立
りと思へば
女といふ名
ればまめなる
薫の心に見過
さるゝなり
まだき來にけ
り
引歌あるべき
詞なれど見え
たらざ
めざましう
こゝは眼さむ
るほど美き方
にいへり
かふるふる人
薫自身をいへ
り北面(表向
ならで女房な
などの居る所)
など相當とな
り
あしこもど
あそこまでと
中君を誘ふな

世を背き離ん時、此人こそと取立て、心留る絆になるばかりの事はなくて、
過してんと思ふ用意深かりしを、率然も悪く、我心ながら曲けてもあるかな
など、常よりも即て交睫す明し給る翌朝に、霧の籬より、花の色々面白く見
え渡る中に、權の果敢氣にて交りたるを、仍殊に眼留る心地し給ふ。明る間
咲てとか、常なき世にも准るが、心苦しきなめりかし。格子も上ながら、甚
假初に打臥つ、明し給ば、此花の開る程をも、只一人のみぞ見給ける。人召
て北院に參んに、事々しからぬ事差出させよと宣へば、臣、宮は昨日より内裏
になん在すなる。昨夜御車率て歸り侍りにきと申す。薫、然ばれ彼對の御方
(中)の惱み給なる、見舞ひ聞ん。今日は内裏に參るべき日なれば、日闌先
と宣ひて、御装束し給ふ。出で給まゝに、下て花の中に交り給る體も、殊更
に艶立ち色めきて舉動し給ねど、奇う只打見るに、優雅しう尊貴げにて、甚
う氣色だつ好色人どもに准ふべくもあらず、自然典雅うぞ見え給ける。權を
引寄せ給に、露甚う零る。

薫今朝の間の色にや愛ん置く露の、
消ぬにかゝる花と見るく。

果敢な一など獨語て、折て持給り。女郎花をば見過ぎてぞ出で給ぬる。明離る
隨に、霧立ち滿たる空風情きに、女同志は亂次く朝寢し給らんかし。格子妻
戸など打叩き聲作んこそ初々しかるべけれ。朝未明未前來にけりと思ながら、
臣召て中門の啓たるより見せ給ば、臣「御格子ども皆開りて侍るべし。女房の
氣色などし侍りつ」と申せば、下て霧の紛れに容好く歩み入り給るを、宮の
忍たる所より歸り給るにやと見るに、露に打濕り給る香、例の甚特殊に香ひ
來れば、女、仍眼覺しう在すかし、心を餘り鎮め給るこそ憎けれ。など、漫く
若き女房などは聞え合ひ。驚き貌にもあらず、好き程に打動きて、御褥差出
などする體も甚眼易し。薫、是に侍へと許させ給ふ程は、人々しき心地すれど、
仍斯る御簾の前に差放せ給る愛しさになん、屢々も得侍ぬ」と宣へば、女房「然
ば如何侍るべからん」と聞ゆ。薫、北面などやらの隠所ぞかし。斯る老人など
の侍はんには相應なる休息處は。其も又只御心なれば、憂へ聞へきにも侍ず」と
て、長押に押寄りて在すれば、例の人々、女、仍彼處許に「など唆し聞ゆ。元
より氣色燥急に、雄々しくなどは在し給ぬ性格なるを、愈靜寂に舉動し鎮め
給れば、今は自身聞え給ふ事も、漸う轉て憚しかりし方些づ、薄らぎて、面馴

中君のなり

物思はぬ
好色ならぬ
さへかく思ひ
はなれがたけ
ればなり

よそへてぞ
姉君によそへ
てなり契りか
と大らかに言
はれたるおも
しろし
露を落さで
薫の進退のし
づやかなるを

れ給にたり。惱しう思さるらん容體も、薫如何なれば」など問ひ聞え給ど、
抄々しくも御答聞え給ず。常よりも濕り給る氣色の心苦しきも、哀れに推量
れ給て、細やかに世中の有べき様などを、同胞やうのものゝ有ましやうに、
教へ慰め聞え給ふ。聲なども特と似給りとも覺ざりしかど、奇きまで只其と
のみ覺るに、人眼見苦しかるまじくは、簾も引啓て對坐て聞ま欲く、打惱み
給らん姿容床しう覺え給も、仍世中に物思ぬ人も得あるまじき事にやあらん
とぞ、思ひ知れ給ふ。薫人々しく眩耀しき方には侍らずとも、心に思ふ事あ
り、嘆しく身を扱惱む體になどはなくて過しつべき此世と、自身思ひ給しを、
心から悲き事も愚がましく悔しき憂悶をも、旁に安からず思ひ侍るこそ甚効
なけれ。官位などいひて、大事に爲める道理の憂に就て嘆き思ふ人よりも、
是や今些し罪の深さは勝らん」など言つ、折り給る花を扇に打置て見居
給るが、漸う赤みもて行くも、却々色合美しう見れば、徐ら差し入て、
薫擬てぞ見るべかりける白露の、
契りか置し朝顔の花。」
故意びてしも舉動ぬに、露を落さで持給りけるよと風情しく見るに、置なが

上句は姉君に
ことよそへは
身に残るゆは
なほはかなき
心深しかなき
何にかよれる
一頼めおくる
の葉だにも言
かよれる露の
命ぞ一
秋の空は
「就中」
「就中」
「就中」
心なり
庭もまがきも
一里はあれて
人はふりにし
宿なれや庭も
まがきも秋の
野らなる
巖院
大覺寺なり
峨帝の離宮に
て脱履の後移
られたるよし
國史にあり清
和の大行奏し
給ひて寺とな
され大覺寺と

ら枯る氣色なれば、

中「消ぬ間に枯ぬる花の果敢さに、

折る、露は仍ぞ増れる。

何に懸れる」と、甚忍て言も續す、憚し氣に言消ち給る程、仍甚酷く似給る
かなと思ふにも、先ぞ悲き。薫「秋の空は今少し眺のみ増り侍る。徒然の紛し
にもとて、先つ頃宇治に參して侍りき。庭も籬も實に荒れ果て侍りしに、堪
難き事多くなん。故院(源)の亡せ給て後、二三年ばかりの末に、世を背き給し
嵯峨の院にも六條院にも、差覗く人の心鎮ん方なくなん侍りける。木草の色
に就ても、水の流に添ても、涙に昏てのみなん歸り侍りける。彼御邊の人は、
上下心淺き人なくなん愁嘆侍りけるまゝに、方々集ひ在せられける人々も、
皆所々に別れ散つ、各自思ひ離る住居をし給めりしに、賤き分際の女房な
どは、況て心鎮ん方なく覺ける隨に、物覺ぬ心に任せつ、山林に行交り、
漫なる田舎人に成りなど、哀れに彷徨散るこそ多く侍りけれ。然て却々皆荒
し果て、忘草生して後なん、此左大臣(霧)も渡り住み、宮達(明石中宮)なども
方々在し給ば、昔に返りたるやうに侍るめる。然る世に類なき悲さと見給し

は名づけられ
たり嵯峨帝の
こと六條院
に於て書け
るなり
わすれ草生し
て
愁傷を忘る
程を移り住
夕霧も移り住
まれしとなり
毛詩に「北堂
我意草一能忘
レ愛住吉の忘
草も萱草な
り
いにしへの
源氏の世を去
り給ひし折は
蕪幼少なりし
大君をかき
心の源氏をこ
ふる心にまさ
るはなり
世のうきより
一山里は物の
淋きことこそ

あれ世のうき
よりけりし山
かりけりし山
はなりしほど
りしを今世の
中に住みよか
里の住みよか
なりしを知る
この廿日あま
父宮の第三年
たふとき方に
寺に中君字
治に申さる
言につけての
何處にても
にはみすの外
を中君のみか
へ外君のあか
がられはしと
なり又かやうに
も又参らんと

源氏物語活釋後編

程の事も、年月経れば、思ひ冷す折の出来るにこそはと見給るに、實に限あ
る事なりけりとなん見え侍りし。斯は聞させながらも、彼の往時の悲さは未
だ幼稚く侍りける程にて、甚然しも染ぬにや侍りけん。仍此近き夢こそ覺す
べき方なく思ひ給らるゝは、同じ事、世の常なき哀傷なれど、罪深き方は勝
りて侍るにやと、其さへなん心憂く侍る」とて、泣き給る程、甚心深げなり。
昔の人(大)を甚しも思ひ聞ざらん人だに、此人の思ひ給る御氣色を見んには、
漫に虚心にもあるまじきを、況て我も物を心細く思ひ亂れ給ふに就ては、甚
ど常よりも面影に戀しく悲く思ひ聞え給ふ心なれば、今少し催されて、物も
得聞え給はず、自制難給へる氣色を、互に甚哀れと思ひ交し給ふ。中「世の憂よ
りはなど人は言しをも、然様に思ひ較る心も殊になくて年來は過し侍りしを、
今なん仍如何で閑寂なる體にても過さま欲く思ひ給るを、有繋に心には叶ざ
めれば、辨の尼こそ羨しく侍れ。此廿日餘りの程は、彼近き寺の鐘の聲も聞
き渡さま欲く覺え侍るを、忍て渡させ給てんやと聞させばやとなん思ひ侍り
つる」と宣へば、蕪荒さじと思すとも如何かは。心易き男子だに、甚往
來の程峻岨しき山路に侍れば、思つゝなん月日も隔り侍る。故宮(八)の御忌日

は、彼阿闍梨に然べき事ども、皆言ひ置き侍りにき。彼所は仍貴き方に思し
譲りてよ。時々見給るに就ては、悲傷の絶せぬも効なきに、罪失ふ體に成し
侍りなばやとなん思ひ侍るを、又如何思し置つらん。兎も角も定させ給んに
隨てこてはとてなん。有べからん様に宣せよかし。何事も疎からず承ら
んのみこそ、本意叶ふにては侍らめ」など、實立たる事どもを聞え給ふ。
經佛など此上(中)も供養じ給へきなめり。斯様なる序に托けて、徐ら籠り居
なばやと、意向け給る氣色なれば、蕪甚有まじき事なり。仍何事も心長閑に
思し做せ」など、訓へ聞え給ふ。日差上りて、女房参り集りなどすれば、餘
り長居も事あり貌ならんに依り、出で給なんとして、蕪「何處にても、簾の外に
は慣ひ侍らねば、不合き心地し侍りてなん。今又斯様にも侍はん」とて立ち
給ぬ。宮(旬)の何か無き折には來つらんと思ひ給ぬべき御心なるも煩しくて、
侍の別當なる右京大夫召て、蕪「昨夜罷出させ給ぬと承りて参りつるを、
未然かりければ口惜きを、内裏にや参るべき」と宣へば、右「今日は罷出させ
給なん」と申せば、蕪「然ば夕つ方」とて出で給ぬ。仍此御氣色有様を聞き給
ふ度ごとに、何て昔の人(大)の御意志を非違て了解なかりけん、悔る心の

寄 生

なり侍の別當
句宮の家司な
り侍の居る所
の長官
いざだ精選に
て
大伴の後、薫
のなり
いくよしも
らじ
一幾世もあ
らじ我身をな
ぞもかくあま
の刈る藻に思
ひ亂るゝ
今宵過ぎんも
今日吉日なる
べし
大空の月だ
に宿に入るも
のを雲のよそ
にも過ぐる君
かな一といへ
る元良親王の
を少しかへて
引きたり
今なんとも見
えじ
中君に今夜と
も

思はれしとな
り
御文聞え給へ
りける
禁中なる句よ
り中君へ御文
ありしなり御
より御返事
なり
一人月な見給
ひそよ
「莫對二月明
ア」
思中往時上
かくれの方よ
り
二條院の寢殿
に句宮は住ま
れ中君は西の
對に住まるゝ
よし見えたり
ともかくも覺
えねど
一涙川水まさ
ればや敷妙の
枕の浮きてと
まらざると
ん一中君の心
にかげじとす
れど涙の枕ら
くばかりなる

み増りて心に懸りたるも煩しく、何や人爲ならぬ心ならんと思ひ返し給ふ。其隨に未だ精選にて甚ど勤行をのみ爲給つ、明し暮し給ふ。母宮(三)は仍甚若く恍きて、物亂次き御心にも、斯る御氣色を甚危く忌々しと思して女三幾世しもあらじを、見奉らん間は効ある體にて見え給へ。世中を思ひ捨て給んをも、斯る身にては妨げ聞へきにもあらぬを、此世にては言ふ効なき心地すべき悲傷に、甚ど罪や得らん」と宣ふが、畏く最惜くて、萬を思ひ消つ、御前にては憂悶なき體を粧り給ふ。左の大殿(霧)には、六條院の東の御殿を磨き修飾て、限なく萬を整へて待ち聞え給ふに、十六夜の月漸う差上るまで待遠ければ、甚しも御心に入ぬ事にて、如何ならんと安からず思して案内し給ば、「此夕つ方内裏より出で給て、二條院になん在すなる」と入申す。思す人持給ればと不快けれど、今宵過んも胡盧なるべければ、御子の頭中將して聞え給り。

夕、大空の月だに宿る我宿に、

待つ宵過ぎて見ぬ君かな。

宮(句)は却々今なんとも見じ、心苦しと思して内裏に在しけるを、御文聞え給

りける、御返事や如何ありけん、仍甚哀れに思されければ、忍て渡り給りけるなり。可愛なる有様を見捨て出べき心地もせず、最惜ければ萬に契つ、慰め難て、諸共に月を眺て在する程なりけり。女君(中)は日來も萬に思ふ事多かれど、如何で氣色に出さじと萬に念じ返しつ、淡き體し給ふ事なれば、殊に聞も各々體に、恍に舉動て在する體甚哀れなり。中將(夕霧)の參り給るを聞き給て、有繫に彼(六)も最惜ければ出で給んとて、句今甚疾く參り來ん。一人月な見給そよ。心空なれば甚苦し」と聞え置き給て、生傍痛ければ、隱の方より寢殿へ渡り給ふ。御後姿を見送るに、兎も角も覺ねど、只枕の浮ぬべき心地のすれば、心憂きものは人の心なりけりと我ながら思ひ知る。幼き程より心細く哀れなる身どもにて、世中を思ひ留たる體にも在せざりし一所(八)を頼み聞させて、然る山里に年經しかど、只何時となく徒然に凄うはありながら、甚斯く心に染て世を憂きものとも思ひ知ざりしに、打續き淺ましき事どもを思し程は、世に又留りて片時經へくも覺ず、戀しう悲き事の比類あらじと思しを、命長くて今までも生存れば、人の思たりし程よりは、人數にも成るやうなる有様を、長かるべき事とは思ねど、見る限は憎氣なき御性

ねば「ほどは
 なくとあるは
 心のとまる方
 なるべし
 おんかへりも
 六君よりの御
 返事をもちな
 んとせどな
 常のへだてよ
 りは泊られ
 禁中に泊られ
 なり
 おもがくし
 俗に「てれが
 くし」なり
 見えぬべけれ
 見えぬべけれ
 見えぬべけれ
 命待つ間のほ
 どばかりうき
 ことしげく思
 はずもがな
 こりずまに
 又もあだ名に
 立ちぬ世に人

朝しも殊に美しげさ増りて見え給ば、効なく涙含れて、暫し打目成聞え給ふ
 を、耻しく思ひ、打俯伏し給る髪垂り髪容など、仍甚有難氣なり。宮も
 生耻きに、細かなる事などは直も言ひ出給ず、面隠しにや、何ど斯のみ
 惱しげなる御氣色ならん。暑き程の事とか宜しかば、疾と涼き程待ち出たる
 も、仍晴々しからぬは見苦き事かな。種々に爲さずる事も奇う驗なき心地の
 みこそすれ。然はありとも、修法は又延てこそは好らめ。驗あらん僧もがな。
 某僧都をぞ夜居に侍すべかりける」など様なる、懇言を宣へば、斯る方に
 も言好きは、厭く覺え給へど、無下に答へ聞ざらんも例ならねば、中昔も奇
 う人に似ぬ有様にて、斯様の折は侍りしかど、自然甚好くこそ爽なれ」と打
 笑ひて、懐しう愛嬌づきたる方は、是に並ぶ人あらじかしと思ながら、仍又
 疾く床しき方の焦躁も立添ひ給るは、御志の疎にもあらぬなめりかし。然
 ど見給ふ間は變る差もなきにや、後世までと誓ひ頼め給ふ事どもの盡せぬを
 聞くに就ても、實に此世は甚短かんめる。命待つ間も難面き御心は見ぬべけれ
 ば、後の約束や違ぬ事もあらんと思にこそ、仍懲ずまに又も頼れぬべけれ
 て、甚う念ずべかめれど、得忍び敢ぬにや今日は泣き給ぬ。日來も如何で斯

し住へば一
 度の御儀に
 頼まれんと
 きこゆるま
 我が申すま
 になり
 何ほどつり
 ことえりし
 ひ物につく
 も六君に眞
 心うづりた
 ばはづれ
 に見ゆべき
 のぞとなり
 身を心とも
 一いなせとも
 言ひ放たれ
 うきものは
 心をせぬ
 世なりけり
 思ふやうなる
 帝位になど
 帝位になど
 ばなり
 命のみにそ
 今得ぞし
 らば我や
 る人やは
 るやと
 るは

く思けりと見え奉じと、萬に思ひ紛しつるを、種々に思ひ集る事し多かれば、
 然のみも得秘されぬにや、零れ初ては疾にも得停ひ給ぬを、甚耻しく佗しと
 思て甚く背き給は、強て引向け給つ、句聞る隨に憐なる御有様と見つるを、
 仍隔たる御心こそ在し給けれな。然ずば夜の間に思し變りにたるか」とて、
 我が御袖して涙を拭ひ給は、中夜の間の變心こそ宣ふに就て推量れ侍りぬれ
 とて、些し微笑ぬ。句實に吾君や、幼稚の御物言や、然ど實際には心に限の
 なければ甚心安し。甚う言撰して聞とも、甚著かるべき事ぞ。無下に世の道
 理を知り給ぬこそ、可愛きもの乍理なけれ。縦し我が御身に成ても、ひ廻し
 給へ。身を心ともせぬ有様なりかし。若し思ふ如なる世もあらば、他に勝り
 ける志の程も知せ奉るべき節なんある。容易く言出づべき事にもあらねば、
 命のみこそ」など宣ふ程に、彼處に奉り給る御使、最甚う醉過にければ、少
 し憚るべき事も忘れて、顯露に此南面に參れり。蟹の荷る珍き玉藻に被き埋
 れたるを、然なんめりと女房見る。何時の程に急ぎ書き給つらんと見るも、
 安からずはありけんかし。宮(句)も強ちに隠すべきにはあらねど、當面は仍最
 惜きを、些の用意はあれかしと生傍痛けれど、今は効なければ、女房して御

奇 生

文取入させ給ふ。同くは隔なき體に扱し果むと思して、引披け給るに、繼母の宮(葉)の御手蹟なめりと見れば、今少し心安くて打置き給り。宣旨書にても不安の事や。文「賢らは傍痛さに唆し侍れど、其惱しげにてなん。」

落葉「女郎花萎れぞ増る朝露の、

如何に置ける名残なるらん。」

貴やかに美しう書き給り。句「啣言がましげなるも煩しや。實際は心安くて暫くは在んと思ふ世を、思の外にもあるかな」などは宣へど、又二なくて然べきものに思ひ習たる平人の中こそ、斯様なる事の恨しさなども見る人苦しくはあれ。思は是は甚難し。終に斯るべき御事なり。宮達と聞る中にも、筋殊に世人思ひ聞たれば、幾人も幾人も得給ん事も誹あるまじければ、人も此御方(中)を最惜なと思たらぬなるべし。斯ばかり物々しく冊さ据多給て、心苦しき方疎ならず思したるをぞ、幸福在しけると聞る。自身心にも餘りに慣し給て、俄に妨かるべきが嘆かしきなめり。斯る道を如何なれば淺からず人の思らんと、昔物語などを見るにも人の上などにも、奇う聞き思しは、實に疎なるまじき事なりけりと、我身に爲てぞ、何事も思ひ知れ給ける。宮は

かゝる道に戀慕嫉妬のこ
とを昔よりさ
まをいかにあ
まかりはあ
ぞと思ひし
身の上になり
なり思ひし
ひぐらしのな
くひぐらしの
啼きつるな
に思ふはくれ
藤にぞありけ
るにぞありけ
れてその意な
り大方に
昔の山里住み
のまにきくべ
きもつりす
あまもつりす
をの泣けて音
敷妙の枕の下
に蚤ぞ釣す
罪深うも

常よりも哀に打解たる體に遇し給て、句「無下に物食らざなるこそ、甚悪けれなど宣ひて、趣ある御菓物召寄せ、又然べき人召て、殊更に調ぜさせ給などしつゝ、勸し聞え給と、甚遙にのみ思したれば、見苦しき事かなと嘆息聞え給ふに、暮ぬれば夕つ方寢殿へ渡り給ぬ。風涼く大方の空興しき頃なるに、賑しきに進み給る御心なれば、甚どしく艶なるに、憂悶しき人(中)の御心の中は、萬に忍び難き事のみぞ多かりける。鯛の啼く聲にも、山の蔭のみ戀しくて、中「大方に聞ましものを鯛の、

聲恨しき秋の暮かな。」

今宵は未だ更ぬに出で給なり。御前驅の聲の遠くなる隨に、蚤も釣するばかりになるも、我ながら憎き心かなと思ふく聞き臥し給り。初より物を思せ給し有様などを思ひ出るも疎しきまで思ゆ。此の惱しき事も如何ならんとすらん。甚う命短き族なれば、斯様ならん序にもや、果敢く成なんとすらんなど思には、惜からぬと悲うもあり、又甚罪深うも有なるものをなど、交睫れぬ隨に思ひ明し給ふ。其日は后宮惱しげに在すとて、誰もく參りけれど、殊なる事も在さずとて、大臣(霧夕)は晝罷出給にけり。中納言の君(薫)誘ひ

懐妊にて果てば罪深かり
心取かしの
初めに六君を
ざりしうけひか
りしたしき方の
夕霧の男の兄
弟は薫ならで
はなきとなり
さて招かるべし
なるべし
寢殿の南の廂
此夜の作法重
臣親王の右人
給ふ三ヶ夜の
かまを准じて
かき彼記にて
一月「夜漸
深」向「右相府
亭」所「住東南
對」廂「東頭四
向」設「座以二
朱台六基及銀

聞え給て、同御車にてぞ罷出給にける。今宵の儀式(三ヶ)如何ならん美麗を盡さんと思すべかめれど、限あらんかし。此君(薫)も心耻しけれど、親き方の縁類は、我方々に又然べき人も在せず、物の榮にせんに、特殊に將た在する人なればなめりかし。例ならず急しう參で給て、人(匂)の御上に見做たるを口惜とも思へらず、何や彼やと同心に扱ひ給るを、大臣(霧)は人知ず生憾しとぞ思しける。宵少し過る程に在したり。寢殿の南の廂、東に寄て御座奉れり。御臺八つ、例の御皿など莊重げに美麗にて、又小き臺二つに、花足の皿ども、甚趣致しう爲させ給て、餅參せ給り。珍しからぬ事、置き置くこそ憎けれ。大臣渡り給て、夜甚う更ぬるをと、女房して唆し聞え給と、甚戯れて疾にも出で給ず。北の方(雲井)の御同胞の右衛門督、藤宰相などばかり在し給ふ。辛じて出で給る御容、甚見る効ある心地す。主人の頭中將(夕霧)御盃捧げて御臺參る。次々の御土器二度三度献り給ふ。源中納言(薫)の甚う勸め給るに、宮(匂)些し微笑み給り。煩しき邊をと、相應からず思て言しを、思し出るなめり。然ど見知ぬ様にて甚實體なり。東の對に出で給て、御供の人々饗應し給ふ。位地ある殿上人ども甚多かり。四位六人は、女の裝束に細長添て、五位十人

器一雙以二深器二
辨二饌菓等一
安二坐右一
女房してそい
のかし
御酒宴あるべ
き座へ運き故
なり
いとあざれて
六君の方にて
なり
前にとり込め
られてはなれ
と薫に語られ
しなるべし
女の裝束唐衣
尋常の裳長衣
等なり細長は
貴女の着する
別の是を添ゆ
るなり三重襲
は三領襲ぬる
なり小腰引腰
共ふ裳と異る
絹ふに作る裳
を身小腰に結
びつ

は、三重襲の唐衣、裳の腰も皆差別あるべし。六位四人は、綾の細長、袴など、半は限ある事を飽す思しければ、物の色縫方などをぞ美麗を盡し給りける。召次、舍人などの中に、煩雜しきまで嚴しうなん有ける。實に斯く賑はしう花麗なる事は見る効あれば、物語などにも先づ言ひ立たるにやあらん。然ど詳うは得ぞ數へ立ざりけるとや。中納言殿の御前驅の中に、生位地鮮ならぬや、闇き紛に立交りたりけん、歸りて打嘆息て、御前「我が殿(薫)の何か柔順に、此殿(霧)の御聲に打成せ給まじき。味氣なき御獨棲なりや」と、中門の許にて呶きけるを、聞付け給て、可笑となん思しける。夜の更て眠たさに、彼の欺待かれける人々は、心地快げに醉亂れて倚臥ぬらんかしと、羨きなめりかし。君(薫)は入て臥し給て、耻げなる事かな。事々しげなる體したる親の出で居て、離ぬ間なれど、是彼灯明う挑げて、勸め聞る盃などを甚見易く舉動し給めりつるかなと、宮(匂)の御有様を見易く思ひ出奉り給ふ。實に我にても妍と思ふ女子を持ちましかば、此宮を措き奉りて、主上にだに得參せざらましと思ふに、誰も誰も宮に奉んと志し給る娘は、仍源中納言にこそと交々に言並ぶなるこそ、我が評の口惜くはあらぬなめれ。然は甚餘り世似

南の町内
六條院の
りもより
部卿宮の
給ひし方
べしなる

なごり
蕪の八宮
など大切
す心の今
か名残あ
ると取り
るなりは

ひじり立
るの御忌
ことなど
に申せし
名残と
中君への
うにこそ
候へもと
残と宜へ
く成りぬ
り子染
易に丁字
ぞぬるな

よりも、此御事をば、甚殊に思ひ掟て聞え給るも、宮(匂)の御位地有様故なめり。斯て後二條院(君)に、得心易くも渡り給ず。輕易なる御身ならねば、思す隨に晝の程なども得出で給ねば、即て同じ南の町に、年來ありしやうに在して、暮れば又得引避ても渡り給ずなどして、待遠になる折々あるを、斯らんずる事とは思しかど、差當りては甚斯しもやは名残なかるべき。實に心あらん人は、數ならぬ身を知て交ふべき世にもあらざりけりと、返すくも山路分け出けんほど、現とも覺す悔しく悲ければ、仍如何で忍て渡りなん。無下に背く體にはあらずとも、暫し心をも慰めばや。憎げに舉止などもせばこそ愛てもあらめなど、心一つに思ひ餘りて、耻しけれど中納言殿に御文奉れ給ふ。文「前日の御事(法)は、阿闍梨の傳たりしに、悉う聞き侍りにき。斯る御心の名残なからましかば、如何に最惜くと思ひ給らるゝにも、疎ならずのみなん。然ぬべくは自身も」と聞え給り。檀紙に、引も粧はず、眞摯だちて書き給るしも、甚美しげなり。故宮の御忌日に、例の事ども最甚う尊く爲させ給りけるを、悦び聞え給る體の、誇大しうはあらねど、實に思ひ知り給なめりかし。例は是より奉る御返事をだに、打解す憚しげに思して、扱々し

くも續け給ぬを、自身とさへ宣へるが珍く嬉きに、心悸動もしぬべし。宮の賑しく好み立ち給る程にて、思し怠りにけるも、實に心苦しく推量るれば甚哀れにて、情事やかなる事もなき御文を、打も措ず引返し引返し見居給り。御返事は、文「承りぬ。一日は聖僧立ちたる體にて、殊更に忍び侍しも、然思ひ給る様侍る頃ひにてなん。名残と宣せたるこそ、少し淺く成にたるやうにと恨しう思ふ給らるれ。萬は今侍てなん、噫畏と淡白に白き色紙の剛剛しきにてあり。然て又の日の夕方ぞ渡り給る。人知ず思ふ心し添たれば、何なく用意甚うせられて、柔軟なる御衣どもを、甚ど香し添へ給るは、餘り過多しきまであるに、丁子染の扇の持馴し給る移香などさへ、喩ん方なく愛たし。女君も奇しかりし夜の事など、思ひ出で給ふ折々なきにしもあらねば、懇篤に切なる御意志の、人に似ず在し給ふを見るに就て、然ても有ましをと思ひ給るは、思もやし給らん。幼稚き程にし在せねば、恨しき人(匂)の御有様を思ひ比るには、何事も甚ど此上なく思ひ知れ給にや、例には隔多かるも最惜く、理解ぬ體に思ひ給らんなど思ひ給て、今日は御簾の中に入れ奉り給て、母屋の御簾に几帳添て、我は少し引き入て對面し給り。蕪特と召と侍らざりし

宮の法事のこ
となり

疎ませなり
世やはうき
人やはつら
あまの若ら
に住む虫の
れか、ちぞ
は虫の名と
藻につく小
き貝とも。破
葎の義かとい

ものにもがな
やとりかへす
ものにもがな
やとりかへす
幾度も出でた

あらずや
俗に「ちが
ましたか
どの意なり
に治へ忍び
てと申さる
はれしをとり
りて申さる

源氏物語活釋後編

かど、例ならず許させ給りし悦びに、即ちも參らま欲く侍しを、宮(匂)渡せ給ふと承りしかば、折悪くやはとて今日に爲し侍りにけり。然は年來の験も辛う顯れ侍るにや、隔少し薄らぎ侍りにける御簾の中よ。珍く侍る事かな」と宣ふに、仍甚恥しく、言出ん言の葉もなき心地すれど、中「前日嬉しく聞き侍し心の中を、例の只結ほれながら過し侍りなば、思ひ知る片端をだに、如何でかはと口惜さに」と、甚憚しげにのみ宣ふが、甚く退きて絶々微に聞れば、焦躁くて、薫甚遠くも侍るかな。眞實に聞させ承らま欲き世の物語も侍るものを」と宣へば、實にと思して、少し身動き寄り給ふ氣息を聞き給ふも、直と胸打潰るれど、然氣なく甚と沈着たる體して、宮の御愛情意外に淺う在しけりと思しく、半は言も疎め、又慰めも旁に徐々と聞え給つゝ在す。女君は、人(匂)の御恨しさなどは、打出で語ひ聞え給へき事にもあらねば、只世やは憂きなどやうに思せて、言寡に紛しつゝ、山里に假初に渡し給へと思しく、甚切に思て宣ふ。薫其はしも心一つに任せては、得仕奉るまじき事に侍るなり。仍宮に只正直しう聞させ給て、其御氣色に隨てなん好く侍るべき。然らずば些も違目ありて、心輕くもなど思し在せんに甚悪う侍りなん。然だに

有まじうは、路の程の御送迎へも下立て仕う奉んに、何の憚かは侍ららん。安心く人に似ぬ心の程は、宮も皆知せ給り」などは言ながら折々は過にし方の悔しさを忘る折なく、物にもがなやと、取返さま欲き心情など微かしたつゝ、漸う暗う成り行まで在するに、甚煩く覺て、中「然ば心地も惱しくのみ侍るを、又快く思ふ給らん程に何事も」とて、入り給ぬる氣色なるが、甚口惜ければ、薫「扱も何時ばかりに思し立べきにか。甚繁う侍りし路の草も、少し打掃せ侍んかし」と、心取りに聞え給ば、暫し入措して、中「此月は過ぬべかめれば、朔日の程(九)にもとこそは思ひ侍れ。只甚忍てこそ好らめ。何か世の許可なと事々しうは」と宣ふ聲の、甚う可愛氣なるかなと、常よりも昔思出らるゝに、得憚み敢て、寄居給る柱の許の簾の下より、徐ら及びて御袖を叩つ。女然りや噫心憂と思ふに、何事かは言れん。物も言で甚ど引入り給ば、其に蹤て甚馴顔に半は中に入て添臥し給り。薫「あらずや。忍ては好るべう思す事も有けるが嬉きは、僻耳かと聞させんとぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣色や」と恨み給ば、答すべき心地もせず、意外に憎く思ひ成ぬるを、切て思ひ鎮て、中「思の外なりける御心の程かな。人の思らん事よ淺まし」

と許めて、泣ぬべき氣色なる。些は道理なれば最惜けれど、薫「是は咎あるばかりの事かは。斯ばかりの對面は、往時をも思し出よかし。逝にし人(大)の御許もありしものを、甚此上なう思されにけるこそ却々憂てあれ。好色しく眼覺しき心はあらじと、心安く思せ」とて、甚悠閑に舉動し給れど、月來悔しと思ひ渡る心の中の、苦きまで成り行く情を、眩々と言ひ續け給て、許すべき氣色にもあらぬに、爲ん方なく甚じとも尋常なり。却々無下に事情知ざらん人よりも、耻しう厭くて泣い給ぬるを、薫「此は何ぞ、噫若々し」とは言ながら、言知ず可愛氣に心苦しきもの乍、用意深く尊しげなる様子などの、見し程よりも此上なく成熟増り給りけるなどを見るに、心故他人に爲做て斯く安からず物を思ふ事と、悔しきにも又實に音は泣れけり。近う侍ふ女房二人ばかりあれど、不覺なる男の入り來るならばこそは、此は如何なる事ぞとも參り寄め。斯く疎からず聞え交し給ふ御間なれば、然る様こそはあらめと思ふに、傍痛ければ不知貌にて徐ら退きぬるを最惜きや。男君は往時を悔る心の忍び難さなども、甚鎮め難かりぬべかめれど、昔だに有難かりし御心の用意なれば、仍甚思の隨にも、舉止し聞え給ざりけり。斯様の筋は細にも

今の間も
浮舟になれそ
めらるゝ伏線
なり

得なん真似び續ざりける。効なきもの乍、人眼の愛なきを思は、萬に思ひ返して出で給ぬ。未だ宵と思つれど、曉近う成にけるを、見答る人もやあらんと煩しきも、女の御爲の最惜きぞかし。惱しげに聞き渡る御心地は道理なりけり。甚耻しと思ひ給りつる着帯の證に、多分は心苦しう覺ても止ぬるかな。例の愚がましの心やと思ど、情なからん事は、仍甚本意なかるべし。又忽の我が惑亂に任せて強ちなる心を用て、後心安くしも得あらざらんもの乍、理なく忍び歩かん程も心盡しに、女の旁思し亂ん事よなど、賢く思ふに堰れず、今の間も戀しきぞ理なかりける。更に見では得あるましく覺え給も、返す返す生憎なる心なりや。昔よりは少し細やぎて貴に可愛かりつる様子などは、立ち離れたりとも覺ず身に添たる心地して、更に他事も覺ず成にたり。宇治に甚渡ま欲げに思ひ給めるを、然もや渡し聞てましなど思ど、正に宮(句)は許し給てんや。然とて忍て將た甚便なからん。如何様にしてかは人眼見苦しからで、思ふ心の適くべきなど心も浮遊て、眺め臥し給り。未だ甚深き早旦に御文あり。例の表面は、甚澹如なる堅文にて、

寄 生